

道類掘

東海道 辛酉 大津 又平



曲五國函

彫竹

固住政



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可昭和三年十二月廿八日印刷 昭和四年一月一日發行

謹 賀 新 年

暴落品店內全部大値下

高級毛綿メリヤス

婦人着、子供類、首巻

手袋、毛布

道頓堀辨天座西

東洋オクシヨン雜貨部

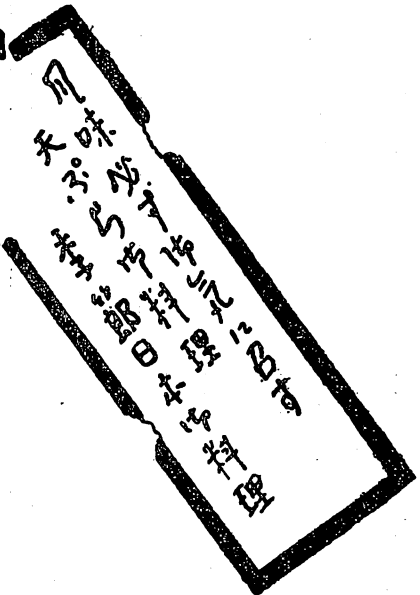
電話南 六九四二番

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



喜又屋會食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

◆表紙……(大津又平)……………豊國畫



口 繪

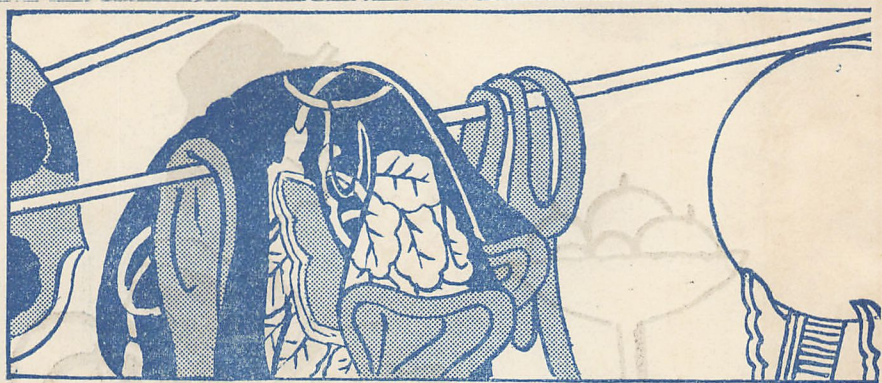
◎中座初春興行「傾城反魂香」鷹治郎の吃の又平◇「尾形光琳」の舞臺面、福助の尾形光琳我童の女房お石◇「尾形光琳」上の部―市藏の光信、成三郎の北の方、扇雀の正澄、福助の女房お徳、鷹治郎の吃又平、下の部―福助の女房お徳、鷹治郎の吃又平◇鷹治郎の阿波十郎兵衛◇「寛潤駕」の舞臺面、延若の與平、魁車の吾妻太夫、壽三郎の與次兵衛◇「當世舞」の舞臺面◎浪花座初春興行「二つの地球」淡海の古河政國、鶴龜の繁子◎角座初春興行、上瀬谷天外襲名口上、中「靈」の交換「藤村の西善太郎、石川の妻安子、十吾の谷口巖」「雪折れ笹」小織の父田山定次郎、東の藝妓吉彌、「親の味」天外の床太郎、小織の父松造十吾の兄好松◎辨天座初春興行「珠を抛つ」都築の相馬直亮、三好の川路靜枝、小松の直亮の妹貞子、野澤の關清一、「ある敵討たれ」小笠原の谷崎庄作、守住の妹八重、波多の源五郎、野澤の宇八郎

◇口上……………

年頭の辭……………白井松次郎(二)

◆考證研究記録◆

- 昭和四年を迎へて……………高安吸江(四)
- 尾形光琳について……………松居松翁(七)
- 光琳と乾山……………高原慶三(一六)
- 『尾形光琳』のこと……………堂本寒星(一八)
- 吃又とお徳……………高谷伸(三八)
- 吃又に就いて……………森ほのほ(四〇)
- 將來に對する強い暗示……………仲木貞一(五〇)
- 舞踊劇その他……………永田龍雄(五二)



□若者よ汝の名は鷹治郎……………日比繁治郎(六〇)
 □亡父の思ひ出……………澁谷天外(六三)

□劇壇往來(小山内薫逝去)……………(二五)
 □佛蘭西だより……………宮島綱男(五八)

昭道總 歌舞伎の一年……………富田泰彦(六八)
 和頼勸 新派劇と喜劇と……………中井泰孝(七四)
 三頓勸 新派劇と喜劇と……………中井泰孝(七四)
 年堀定 劍劇の一年……………松本泰三(七七)

◆劇場案内◆

□中座……………(六〇) □角座……………(六四)
 □浪花座……………(六一) □辨天座……………(六六)

◆脚本と芝居物語◆

□芝居見た儘 尾形光琳……………河上肇(八)
 □芝居小説 傾城反魂香……………松鼻莊主人(二〇)

◆脚本 與平 寛濶駕(二場)……………大森痴雪(二六)

□芝居物語 阿波十郎兵衛……………北村九泉水(四二)
 □狂言解説 當世 聲……………津守凡太郎(五六)

◇編輯 後記……………松本泰三(八〇)
 ◇挿繪・カット……………大塚克三



お芝居の幕間と

お帰りにはお揃で

食慾をそゝる春のお献立が

お待ち申してゐます

園
梅
園

お芝居でのお食事は食堂にて……………
お帰りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中
座
食
堂

本店 太左衛門橋北一丁目
電話南六二二七番

スキナ脂取紙

あぶら

正 賀

本年もあいかわらず

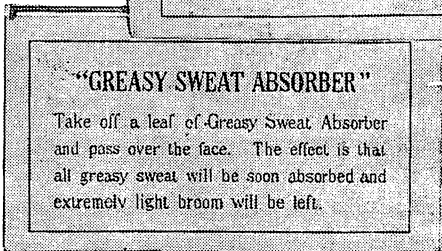
スキナ脂取紙を御愛

用下さる

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
 お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ



現品縮圖
 スキナあぶら取紙



本 舗
 スキナ屋 號
 中 田 商 店
 大 阪

證券金銀

有價證券賣買



株式會社

支店

本店

大阪市東區今橋二丁目

電話本局 自五二二〇番 至五二二五番

振替口座大阪 五四二五〇番

發信略號 シン

日本信託銀行

東京市日本橋區南茅場町

電話茅場町 四四五五番

振替口座東京 五六〇九〇番

發信略號 シン

櫻井まで電車開通

..... 一 月 上 旬

(上六より直通五十八分) 四十六銭

御所拜観

上六より通し切符で
六割引六十八銭

◆.....南大阪からの近道

御婦人お子達も樂々で行け
途中生駒、桃山に下車出来ませす

上六・奈良間
急行三十五分に短縮.....

大 阪
真 惠
方

初
詣

信	畝	桃	榎	奈良七福神めぐり	生	春
	傍	山	原		駒	日
貴	御	御	神		聖	神
山	陵	陵	宮	天		社

.....

大 阪 上 六

大 軌 電 車

電 南 五 五 〇 三 番

.....

昭和十一年
三月十日
發行

梅原商店

神戸市
梅社西門

電話 元町一六五番

行興春初座中



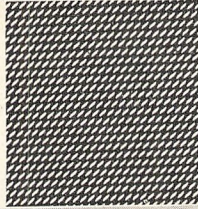
「香魂反城傾」

郎治鷹……平又の吃

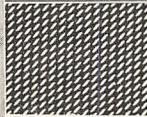
行興春初座中



「琳光形尾」
面臺舞



「琳光形尾」
助福……琳光形尾



「尾形光琳」
女房お石……我童



新品豊富

すべての用品を取揃へてお待ちしております

大 阪  京 都

石川呉服店



淡口ノ親玉

景品

九升樽詰一挺毎三

中央製菓カルケツト 大カ 一個宛

又ハ

清水燒茶器一組宛

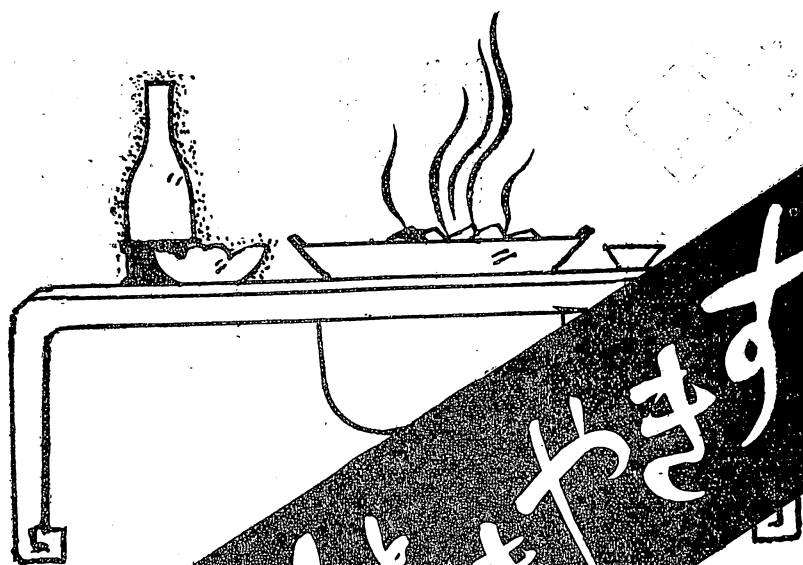
日本丸天醬油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

電話東 二五六一
四八三二



料理片ときやす

道頓堀竹横

鳥

鹿

電話南五九五九番

謹賀

新年

本年も相變り

ませす

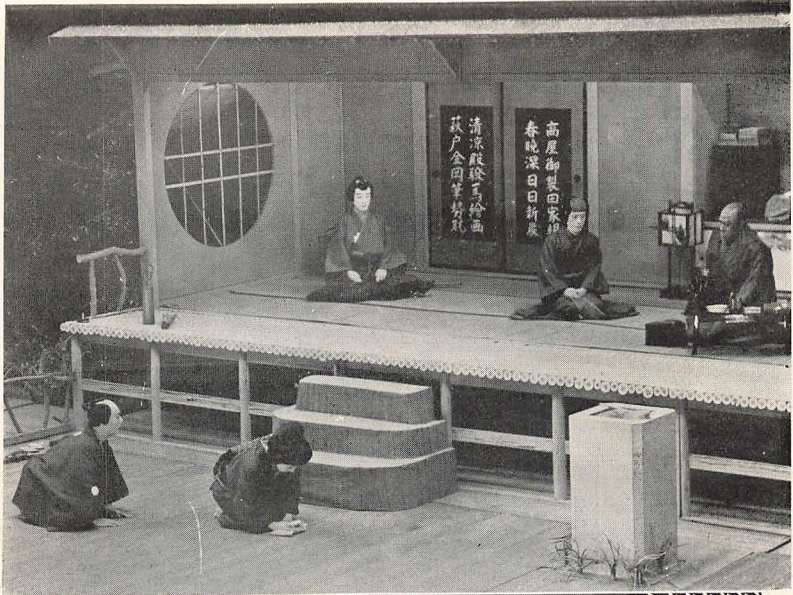
ヒゲタの御愛用を
お願い申上げます



ヒゲ
タ
醬
油



銚子醬油株式會社



中座初春興行「傾城反魂香」

下

福助の女房お徳
鷹治郎の吃又平

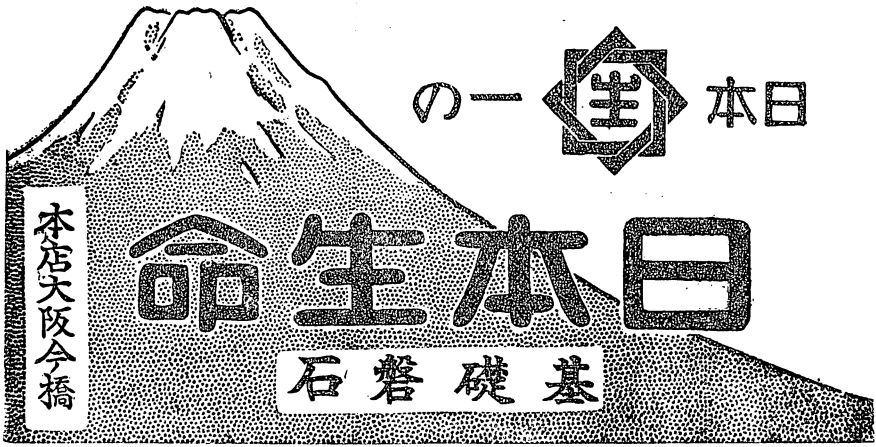
上 右より 市藏の光信、成三郎

の北の方、扇雀の正澄、福助の女房お徳、鷹治郎の吃又平



中座初春興行
阿波十郎治郎衛兵

謹
賀
新
年



の 一  本日

命 生 本 日

石 磐 礎 基

本店大阪今橋

芝居の切符なら……

大阪東區高麗橋通南入心齋橋筋

プレイガイド

電本三三〇九 三九九五

道頓堀の各座の切符
其他觀覽切手前賣券
を取揃へてあります

劇場綴帳
幕のぼり
各國々旗
優勝旗
染物一式
旗附屬品

大阪市南區日本橋南詰

新庄家本店

電話南二二七三番

颯爽たる

初春のお姿を

まづ優秀の技術を誇る

當館で御撮影下さい

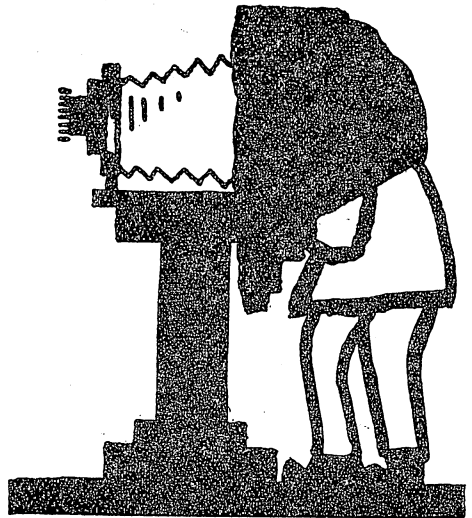
高津郵便局東


賀正

山崎

寫真館

電話南四二四四番



	皆	御		本
阪大	様			年
高	方	贈		も
島	に			⋮
屋	う	答		歳
の	け			末
商	の	用		年
品	よ			始
券	い	は	品	の

行興春初座中



〔駕潤寛^{きつあ}平^ら興^あ〕
面臺舞



衛兵次興の郎三壽・夫太妻吾の車魁・平興の若延りよ右

〔駕潤寛^{きつあ}平^ら興^あ〕



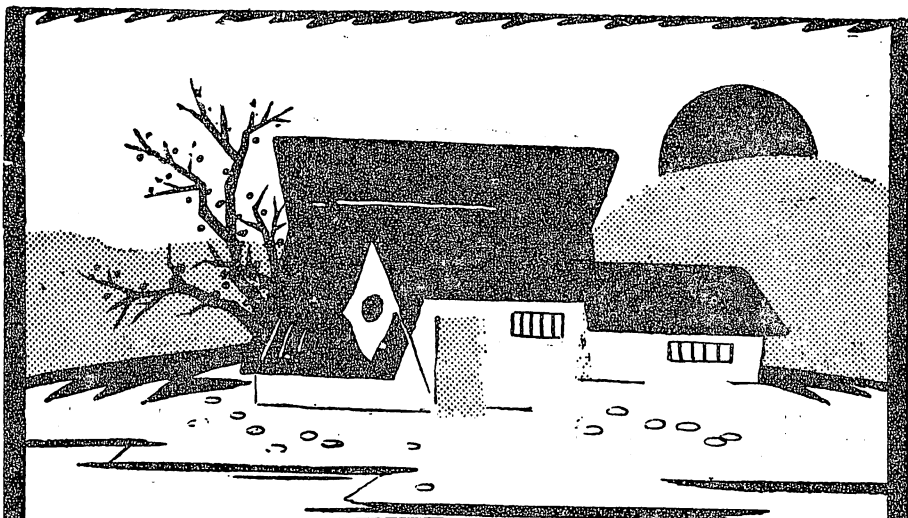
上……中座初春興行

新曲「當世掣」の舞臺面

下……浪花座初春興行

「二つの地球」

淡海の古河政國
龜鶴の繁子



謹つとで新年しんねんの御慶およろこびを申上まをしあげます

新装華やかな一月の三越

四方よひに輝かがやく初春はつはるの光ひかりうらゝかに、三越みつこの装よそひも一陽いちやう來復らいふくの華はなかさ、加くふるに吉例きちれいの音楽おんがくに舞踊まいうに、和洋わやうごりごりの雅興がくきうは、歡よろこびご希望きぼうに満みつる新あたらしき年としの首途かみちを祝いわぎつゝ、只管ひみたら皆みな様の御光來ごこうらいを御待ごまちち申まをして居まをります。

◆元旦、二日は年頭休業いたします
◆新年のお寫眞は……………三越へ

寫眞部に限り元日より無休にて營業いたします

大阪

三越

謹賀新年

中座

關西大歌舞伎

片中市中片嵐坂實	市市市市實中中中	林市中嵐林中	中
川村岡東川	川川川	村川	川村
緞成ひ橘壽	箱九八	政吉長右	鴈
我扇	市薙登團百	敏達治	福團
童雀郎郎し郎郎若	藏女羅次藏郎景車	夫雄郎郎郎次助	郎

謹賀新年

浪花座

志賀廻一家一派

太	宮衣吾野玉和	辨	淡	樂源多十か白辨	龜
部川	々 妻垣川	歌			
千る	靜伊春	浦		五景太も	
代り	都	友			
郎	子子子子江子	天	海	天郎島郎め石慶	鶴

(うろは順)

謹賀新年

角座

松竹家庭劇

小高藤	東桃香	米小春	石	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	會	一	會	(次第不同)				
織	村	谷	津	日												我	雄	我					
田	取	東	左	惠												酒	改	酒					
桂	美	幸	喜	照												家	め	家					
一	秀	智	喜	美													澁	十					
郎	巨	夫	子	子	子	子	子	薰	滿	郎	三	鳥	保	八	鳥	彌	鳥	照	樂	郎	郎	外	五

謹賀新年

辨天座

新潮流劇

三	小	大	葛	尾	富	守	都	小	波	進	松	泉	松	山	桃	真	原	吉	高	筒	野	
好	松	東	城	崎	住	築	笠	藤	井	村	木										井	澤
				士	川	文	多	英	保	日	木										德	
榮	孝	京	典	菊	茂	茂	原	太	一	出	吉										英	二
子	子	子	子	子	惠	子	男	夫	穰	郎	雄	作	夫	郎	助	章	作	雄	二	郎	一	

御料 御貴 白粉

純無鉛

美しい人氣の中に
ますく輝やく
優良第一の品質

本舖 伊東胡蝶園

二二二

角座初春興行

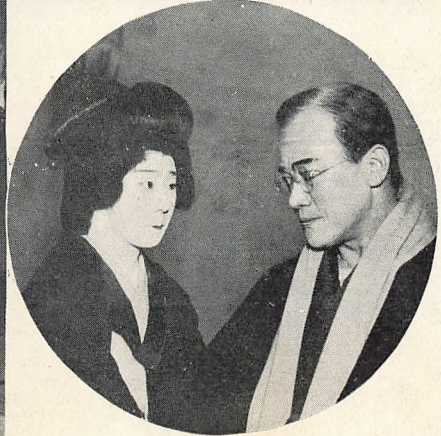


上 澁谷天外襲名口上
右 「靈の交換」

藤村の西善太郎
石川の妻安子
十吾の谷口巖



造松父の織小・郎太庄の外天
松好兄の吾十 「味の親」



「笹れ折雪」

郎次定山田父の織小
彌吉妓藝の東

行 興 春 初 座 天 辨



「珠を抛つ」

左より都築の相馬直亮
三好の川路静枝
小松の直亮妹貞子

右野澤の關清一
左都築の相馬直亮



「ある敵討たれ」

小笠原の谷崎庄作
守住の妹八重



「ある敵討たれ」

右 波多の源五郎
左 野澤の宇八郎



本年もどうか絶大の御聲援を！

蒲田撮影所特作・原作脚色村上徳三郎

監督 清水宏

「森の鍛冶屋」

オールスター、キヤスト

京都撮影所特作・原作脚色前田孤泉

監督 水島泰三

「黒手組助六」

林長三郎主演

蒲田撮影所特作・原作細田民樹氏

監督 池田義信

「愛人」(時枝の巻)

栗島すみ子主演

蒲田撮影所特作・原作脚色北村小松

監督 牛原虚彦

「彼と人生」

鈴木傳明主演

京都撮影所特作・原作脚色藤原忠

監督 小石栄一

「徳川天一坊」

阪東壽之助主演

新春映画界にお互に大作家の御案内

賀正

1929

松竹キネマ株式会社

謹 賀 新 年

松竹技藝部

顧問 白井松次郎

委員長 中村鴈治郎

評議員 中村福助

嵐 巖 笑

委員 市川市藏

市川右團次

片岡我童

中村魁車

實川延若

賀 正

大谷竹次郎

賀 正

白井信太郎



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

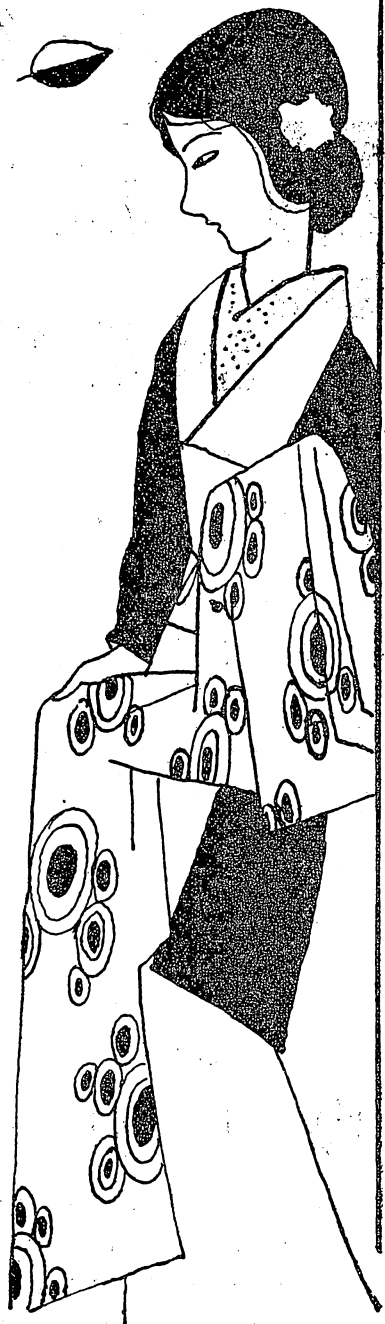
本店 大阪市南區久左衛門町八

電話 南一七一八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草 五五九九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます)



年 新 賀 謹



料身美のラトバオレク

ルイオムーバ

たしと料原を

嶮 石 竹 松

品 賞 定 規 募 應

一等	金拾圓也(勸業債券)	貳拾名
二等	金五圓也(復興債券)	五拾名
三等	松竹石嶮 半打	壹百名
四等	松竹石嶮 三個入奪箱	貳百名
五等	松竹石嶮 一個	壹千名

締切 昭和四年四月末日限
 表 昭和四年五月中旬大朝、大毎紙上

(御注意) 規定は必ず守ること、お一人でも何枚も出せますから多し程當りが良しになります

(審査方法) 正解者多数の際は大朝、大毎社員立會の上厳正抽籤の結果當選者決定

(送先) 大阪市東成區鳴野町松竹石嶮本舖懸賞係宛 (販賣店にもお取扱します)

(送り方) 大阪市内宛は封筒に入れて「二錢切手貼付の事」左記へ御送り下さい

(雑誌名) この廣告を御覽になつた雑誌名を御書きなさい

(用紙) 愛用者のお印さしてなるべく「パールオイル」松竹石嶮の包紙の裏へ明瞭にお書きなさい(書き方) 答へこあなたのお御住所氏名及松竹石嶮を御買はれた店の名と所及び其値段をお書きなさい

課題 (1) クレオパトラが愛用した美身料の名は何ぞいひますか?
 (2) 其美身料を用ひ、皮膚の榮養となる優秀石嶮の名は何ぞいひますか?

お正月のお樂みに (やさしい、面白い) ためになる當りのよい

若御領九さいし物(幣)へ最店宛(寄に替へ)有る内直名き取接名場入御化台二注小本二下

共 料 送 入 個 一
 也 錢 五 拾 貳 金 入 個 三
 也 錢 拾 七 金 入 個 三

舖本嶮石竹松 ルイオムーバ

場 工 嶮 石 山 奥

町野鳴區成東市阪大
 番八九七五東話電部業營
 番四七三五東話電部場工
 番九二二〇八阪大替振

月刊・演劇研究・雜誌

一月號

演劇研究

第四年

第二十八輯



年頭の辭

白井松次郎

曠古の御大典も御恙なく御終了あらせられ、皇運彌々隆昌、まことに御目出度い新春を迎ふるごまゝになりました、御同慶の至りに存じます。不肖蕤に不敏にも拘はりませず、縁綬褒章御下賜の恩典に接し、身に餘る光榮に恐懼するご同時に、一層の重責を感じ、茲に年のあらたまるご共に、努力以て報國の一端を盡したいご念願いたして

居ります。然る處社會の狀勢は益々複雑に時々刻々の進展をいたし、わが劇界並びに
映畫界も、これ等の歩みに伴ひまして實に爲す可きの事業は山積いたして居るの有様
であります。歌舞伎古典劇の復活、新劇及び大衆劇の促進或ひは文樂座の復興、新映
畫劇の擡頭、新劇場の建設、等々、不肖一個の事業のみにても殆んど十指を屈するの有
様で、おそらく本年は多事多忙のこゝかと思考いたして居ります。よつて更に大いに
經營方針を新たにして積極的に斯業發達の爲めに微力を盡ぐ覺悟でございます。幸ひ
に大方諸賢兄の御助力に俟つて譬へ一步たりとも理想の一端に觸れ得たいと日夜その
事に没頭いたして居る次第でございますから何卒本年も此上にも御鞭撻の程を切望い
たします。



昭和四年を迎へて

高安吸江

不景氣の聲も耳に聒が出来、暖い師走の風に惠まれた顔見世の盛況に次で、明くれば春の道頓堀、ほらなる金銀まうくる故に西鶴が書いた昔を今に、ばつこして世を送る大阪人で、初芝居はさぞ賑ふこゝであらふ。

今度上演される外題の中、八年振の吃又は其以前(大正七年十月)にも出たが、殆ど近松物ミ意識せられずに随分古くから度々演ぜられ、既に好劇家間に定評のあるものである。其他は全部新作揃ひの噂であつたが、實は改修された物もあり試演済のものありで、つまり古いお芝居に近松物、中古にして新作、何れなりとも御意の儘さいふ極めて八方向きな並べ方で、是を前年の不徹底な赤穂實録に比べて、如何にも賢明な作戦計畫である事に先敬意を表せねばならぬが、舞臺は一民族の進化的的并に國民的文化のあらはれで、一時代の思想内容や生活感覺と融合するなき、云ふ六ヶしい議論めいた事は別として、私等は

そのあまりに妥協性に富み過ぎる曲目を見て、本年我が關西劇壇が進むべき方向について何等の光をも其中に認め難いのを遺憾とし、衷心少からず不安を感じざるを得ないのである。

それで私は先既往一年を追懐して、そこに何等かの暗示を得ないか考へてみやう。行詰つた現代、日常生活の苦患から逃れるべくアルコールや阿片に隠れんミする心持に似て、現代離れのした夢幻劇を悦ぶさいふ意味で、二月の暫のトテモ素晴らしかつた人氣を説明し得たと思ふなら、それはトンでもない誤りである。大阪の所謂古い芝居好きは、よし其數が漸次減少しつつあるとはいへ依然として舊態を保ち、識者の考へるやうに必ずしも世路の辛酸を嘗めても居ないやうであつて、又これを極端な寫實劇や理窟ツポイ社會劇なきの飽滿による反動から、荒唐無稽な怪異的古典劇に傾いたミ觀察するのも妥當でなくやはり歌舞伎十八番に對する因襲的憧憬で、尙古き云ふよりも

寧ろ好奇の雷同性の結果と見るべきであらふ。だから純粹の規範的古典味を表現すべきすべての條件を具備した上での上演でなければ其聲價は永續性のものでない。例へば此間の顔見世に出た助六の様に、出演者の技倆如何に拘はらず、河東中心の純江戸氣分を減殺すべき分子を幾許でも含む場合には、其眞價値を一般に理解せしめる事が全然不可能となり、丁度眞田の張拔筒の威嚇的效果が唯一回に限る如く、再演の成功は頗る疑はしくなるのである。

私等に尤も深い印象を與へた實盛や盛綱なきは何れも正統の歌舞伎劇に屬するもので、それは傳統的に洗練に洗練を重ねて完成せられた形式美を、半生以上の刻苦努力によつて磨き上げた技能の爲め、鬱陶しい内容の考察に煩はされる事なく、思ふ存分その妙趣に陶醉させられるのであつて、此種の劇が既に現代大衆からあまり共鳴されない様になりつゝあるこの識者の定説に對して矛盾を感じしめるのは如何にも痛快である。然しその人々は將に没落せんとする歌舞伎國に踏留まつて奮闘する最後の勇者で、後に續く兵士もなく實に孤城落日の有様であることに想倒せば、私等は此成功の大なるだけ彌々大なる勝利の悲哀を覺えざるを得ない。

過去に向つてすべての愛惜を失て行く一般社會相の推移と共に、古典味の理解力缺乏は漸次著しくなり、かの大願成就殿下茶屋聚の上演にあたつても、所謂古劇趣味を現出せしむべき

豫想は裏切られ、嚴正な意味でその目的に適つたと思はれたのは鷹治郎唯一人云つてもよい位であつた一事から萬事を推察するこゝが出来来る。つまり古歌舞伎劇は之を表現し得る俳優の理解と技能如何によつて其生命を保つわけであるがしかも速成を喜ぶ現代人、理智にたけた若い俳優には到底堪えきれない忍耐と努力によつて始めて此れが達せられるのである。

「愚なオフエリアとなつて水死の女に扮する代りに、戀の爲に投身せんとする自殺者救濟會員として働く方が、女に有要な職業となつた。女が現實社會に働く時は美しい扮装の世界は消去り、男子の様に藝術家として眞摯に考へる事はない」こんなことをいつやらクレীগが云つたが、私には今の若い人々が十數年前のロンドンの女優に似た心持で居るやうに思はれてならない。併しすべての法則に例外のないものがないやうに、私は亦時に大勢に反抗して立つ畸形兒の出生が不可能でもないと思ふ。儼し、そこに多少のXを残しておきたいと思ふ。

扱て此一年間に道頓堀の歌舞伎俳優によつて演ぜられた新作劇について一言しやう。先づ其上演數が全部の三分の一弱乃至四分の一強に過ぎない點から見ても、是を同期間に於ける東京のそれが全部の殆ど半數以上にも達したのに比べて、甚しい遜色を呈して居るのに驚かされる。然しながら是は敢えて新劇に對する理解力の差異にのみ因するわけではない。私等は其外に種々の原因を數へる事が出来る。其中の一二を擧ぐれば、鷹治

鄭中心主義の結果——これは故意でなくても、又其意味の善悪は別として名優鴈治郎の偉大さが其周圍一切を眩惑するため、他の個性が認められ難かつた事の外、新しい試みに向つてあまりに慎重過ぎる年配である福助、魁車、延若なき多く旅に出て不在勝な右團次、我童、壽三郎なきに、それ以下は中心人物となるべくあまりに年少である上に、道頓堀集中制の結果、上演すべき場所の缺乏なきが大なる關係をもつて居る。之に反して東京では新作に適する年配の人、例へば左團次、勸彌、猿之助なき所謂多士濟々で、且是等の人々が新作競演に向つて充分な根據地を有つて居るなき如何にも有利な條件の下にあるではないか。

それはこに角ミして彼等によつて演ぜられた新作物の中でも高瀬舟、西郷大久保、お國五平などの優れた成績から見ても彼等がまたいつまでも池中のものでないのが推せられる。唯向後何の方面に進出し、何な特色を發揮し得るやは、尙一層の試練を重ねた上での考慮によらねばなるまい。又近來東京でも好評があつた喜劇物が今の關西俳優に適するや否や、それに在來の俄乃至會我的家劇等との關係等も研究を要する問題である。終に私は若い次の時代の人々が心中萬年草に成功した事、特筆せなければなるまい。同じ近松の天網嶋は天下一品の稱があり、又それが過褒でないにしても、その妙所は心中紙屋治兵衛と共通する點が多かつたが、これは眞の白紙の上に描かれ、感

激さ奮勵の結果に外ならぬ。私等は彼等の將來に大なる望を屬し得ることに此上もない満足を感じたのである。併しそれは僅に其一步を踏出したに過ぎず、其前途は實に牧野洋々で、更に數段の苦闘を繰返さねばならぬのは無論である。

舞踊その他に就いて私の述べんとする處は尙残つて居るが、冗漫を恐れて之を他日に譲るし、以上述べた處は大體に於て現代の文化的維新にあつて過去藝術に屬する歌舞伎劇が、恰も神々の黄昏に似た憂愁裡にさざ、れて居て、唯之を其滅亡から救ふものは一つに「力」あるのみである事、そして新時代に適應すべきもの、芽生は認められるが、如何にも微々たるもので其圓滿な發達は實に同人の感激と熱誠に基かなければならぬと云ふ二點に歸する。序ながら此機會に古くて併も新しいゲートの言葉を抄録して若い人々の座右に捧げる。

「凡て藝術に云ふものは親子の縁を引いて進んで行くものだから大藝術家に云はれる程の人を見るに、其人は屹度古人の善い處を取つて居る、古人の御蔭で偉くなれたものだ云ふ事が知れる。ラファエルのやうな人々はヒヨッコリミ出て來るものでない、古代からそれまで人の爲遂けた中の最上の所を土臺にして進んで來たのだ。彼等がきて、若し、それ迄に古人が築いて呉れた當時代の利益を活用しなかつたならば、ミても名を成す事なきは出來なかつたに違ひない。」(了)



尾形光琳について

松居松翁

今度大阪の中座で拙作『尾形光琳』が上演されるについて、何か此雜誌にかけたいふ御嚴命で、取敢へず愚文をかくべきであるが、此前京都で上演された時にも、何か書かせられて、大

きに困つた記憶だけが今以て残つて居る。近頃悪い事がはやり出して、方々の劇場も機關雜誌といふものをもつて居て、それに何か作者ののべこを書かすべきものにきめてかゝつて居るが、あれは作者に取つて、此上もない迷惑な事だ。其作者が愚

老同様さんなまづいにしろ、作をする時にはそれ相應苦心をしてかくのだから、多少の云ひ分は無い筈はないが、さりさて人様の前で、作劇のいはれや、材題の歴史的説明なごをするのはいかにもキザなもので、若い人なら知らぬ事、愚老のやうな老朽になるに、ソンの見つこもない事はしたくない。さりさて下手に謙遜をしてかゝるに、一方商賣に上演して居る人に迷惑をかける事になる。さうも進退兩難といふわけで、實際いやな事だ。

それに此前さんな事をかいたつたか、まるで記憶に残つて居ない。さうせ碌なごは云つて居なかつたらうから、今度はまるで違つた事を云つても好い様なものだが、それも年を老つては大儀な事だ。まあ、御免を蒙れ、ばそれに越した事は無い。

この原稿が締切の間に合はないで、没書といふ事になれば、こんな結構なごは無い。

然し萬々一没書にならないとすれば、何か云はねばなるまいが、實際あ、いふ舊作に對しては、何等主張がない。もつこも自分であの作をプロヂュースするといふ段になるに、可成云つて見たい事、やつて見たい事もないではないが、他の方が舞臺監督をされるのでは、それも致し方が無い。

たゞ見ず點で云つて見れば、あの作の主人公も、副主人公もあらゆる登場人物が悉く上方の俳優であるだけ、地方色がうまう出て居はしないかと思ふ。さうすればこれ迄、あの作をやりがたがつて居た東京の某々俳優諸君よりも適當したといふ事になるだらう……といふやうなお世辭がいへるだけでも、まあ都合がい、といふものだ。それと來春は東京で四つばかり新作を出すつもりで居たのが、みんな鏝際で中止になつて、たつた一つ新派の中幕をかけたに過ぎないといふ、愚老に取つては、これも新春の寂しさを慰める一つの機會になつて居る。その點で愚老は大阪の興行師、俳優、及び見物の方々に感謝しなければならぬらしい。あんなものでも皆様の居蘇機嫌の御邪魔にならなければ、有難いご、思つて居る。(昭和三、一二、一二)

松居松翁作

尾形光琳

河上馨

一

金山霞につままれ、新緑まきに酣にして
春の粧ひまつたき中に、歡樂の都、京の街々
に漸く春風薫らんとす。

四方の櫻花一時に花咲き、東山の裾ぬふあ
たり濃き緑の香る。

春の夢のみを追ふ京童の胸は、櫻花の咲き
満つと共に、快樂と遊興とを煽動させずには
おかなかつた。

此處に東山、櫻の老樹咲き亂れたる、樂阿
彌が構のほとり、目も拘なる小袖幕を春風に
めがらし、其の中には緋の毛氈を敷き詰め、
幕の上と透間よりは櫻花の雲をすかして見る
麗かな、霞こめたる東山一帯を一望に眺め

のどかな春の一日を、讀へんとして集りたる
一團はそも如何なるものか。

それは東西三都の名流の御内室の、色くら
べ、伊達くらべの爲めに催される場所と見て
さしつかへなからう。

昔も今も變りはない。人の世の心には變り
はない。今日の催しに集りたる女達の胸には
たゞらびやかなる満場の中に於て自分の誇
りを集人に見せびらかせ、そして集人の失望
と羨望との中に、高らかに自我賞讃を叫ぼう
とするにあるのだ。淺果敢な女の淺慮に、心
ゆく計り、失意と、勝利の交錯を醸さんとす
るにあるのだ。

先づ集つた顔ぶれはと見るに、京都の富豪
難波屋十右衛門の女房、およし。緋綸子に浴

中洛外を、金糸銀糸にて刺繡したる小袖を着
け、天鵝絨に美しき刺繡したる帯を結ぶ。夫

いで、秤座神善四郎の女房、おかね。これは
宮川祐信が特に意匠したる元緑模様の衣裳を
着け、娘おのりは小大夫鹿の子に友禪が意匠
したる小袖を着。淀屋辰五郎の妻、あづまは

これも五彩の色をつくして、西陣の俵屋が織
成せる唐織の小袖、淀の川瀬の水車と夜船と
描くが如く現せるを纏ひ。銀座年寄大黒作右
衛門の妻お梅。同じく戸棚勘定湯淺作兵衛妻
おとせ。同じく勘定後藤庄右衛門の妻お直。

何れも綺羅を盡せし小袖に身を飾りて集る。
次いで、東の富豪石川六兵衛の妻、お初。南

天の總模様の小袖、模倣、染色、縫ひの技巧
さして珍らしとは一同の目に映せねど、熟視
すれば、總身數百數の南天の實はいづれも一

粒數千金に値する紅珊瑚珠なり。今まで自己
の派手を競ひいたる一座の婦人達も忽ちに自
己の光輝を打消されたるを憶えた。

意氣昂然たるお初の胸には、口でこそ、一
座の女と言葉を交へてはゐるものゝ内心では

完全に、東女の意氣と勝利に快哉を叫び、一

座の女をみくびる女の常、柔かに流れる言葉の底には、嘲笑と喜悅に胸をわたしかせたのであつた。

一座の女はたゞ此のきらびやかな装に心うばはれて心の中では残念、無念と、はがみしたが、最初の一瞬間に、全く相手の氣力に呑まれて、氣をくれた心に、自信を持つて争はんとする者は一人もなかつた。失意と羨望に沈み返る一座を、激然たる態度で視つめるお初の面には、意氣揚々たるものがあつた。一座まさにしらみ渡らんとした時、小袖幕の外には皆のめいつた心に衝動をあたへるやうに人の叫ぶ聲がした。

「中村内蔵之介さまの御内儀」

その聲を聞いた時、一同は、小袖幕の開かれた其處に、中村内蔵之介の妻お石の立姿をみとめた。

身には黒羽二重に白無垢をかき、些の飾りをもつけぬ氣高な姿を見せられた時、人々は「アツ」と叫ばずには居られなかつた。その後には一座の女房たちにも、劣らぬ程の美粧したる少女二人、金銀、珊瑚、眞珠などで造

れる花籠の車をひきて、しづ／＼と入來る此の大膽にして、しかも全く人の意表に出でたる服装には、一座の女房たち、たゞ驚異の目を見はるばかり、さすが京の女の榮輝と寛潤とを一気に附し去りたる石川六兵衛の女房もお石が卓越したる意匠には其争ひがたきを認めざるを得なかつた、稍、久しい間、互の心に重苦しい壓迫と沈黙とが續いた。

やがて、今日の主人なる難波屋が女房およしの胸には、京方の勝利といふ地方的の喜びよりも、一個の婦人としての敗北の悲しさと口惜さがこみあふれて來た。およしは腹立しきうに云つた。

「これは中村の御内儀さま、大分御ゆるりでござりましたな」

お石は靜かに

「花にうかるゝ胡蝶の心は、やがて妾たちの今日此頃の心、春ののどけさに憧憬れて、思ひがけぬ運參の儀はとりわけ東のお客さまに御詫びを申します。その御詫のしるしとして、はござりませぬと京の匠の業くれをお笑草に御覽に入れたく、これまで索かせてまゐりま

した。お納めなされて下さいませ」
さう云つて二人の少女に目配した。二人はお初の前に花車を置いた。

「これはまた見事なお品、御辭退いたすもなんとやら、有難う頂戴いたしまする」
さう云つて、一禮して花車を熱視す。

「都の春を織なした、花と枝とはどれも／＼」
後に續く言葉はお初の口から出なかつた。

およしは「いいで

「赤いのは珊瑚珠、白いのは眞珠」
おかねも

「濱の眞砂か、小石の様に籠の底まで敷きらねた……」

おのり

「寶の珠も無難作に、彫り刻んだ美事な細工」
あづま

「數からいふても、大きさでも、お初さまのお召ものより……」
お初はハツとして

「えい……」
およしは急に語をさしはさんで

「やつと皆さんがお揃ひになりました。さア

どうぞあつちの設の席へ」

と氣轉を利かした言葉に、お石も、其場をつくらふやうに、だが、隠しきれぬ喜びの爲めに微笑み乍ら

「わたくしは今入り、さア、御遠來のお客様から……」

お石は、見るに、今先さまでの昂然たるお初の出鼻をくぢいて、心からなる氣喜と誇りを感じた。

お初はたゞ呆然と花車を凝視する斗りだつた。

やがて、歌舞狂言の初る囃子の音が、息づまるやうな雰圍氣の中に聞へて來た。

其處より、霞に包まれたる清水の舞臺や、八坂の塔が遠く見る事が出來。彼方には、稻荷の社の朱の玉垣が浮ぶ。

のどかな春に、蕩醉する幾多の男女が幕の中なる女房達の、衣裳くらべを見んものと絆き合つてゐる。

幕の前には難波屋の手代共がやつきとなつて群集をさへぎつてゐた。其の時、一人の酔漢出で、さんぐくに此の儘を罵倒する、それ

に力を得て、花にうかれ歩く者達、一時に小袖幕内に侵入せんとする。けれど、番頭重助の言葉にそれをさへぎられ、重助の言葉に續いてその場より除す。

漸く沈黙に返へらんとする時、中村内藏之介、手代を連れて出て來て、小袖幕のうちを覗き。

「此の頃、今宮の來山に逢ふた時、自慢で見せられた句に

見かへれば、寒し日暮の、山櫻。といふのがあつたが、丁度この小袖幕の中の心地ぢア、敷きすてた毛氈の上には、落花がひとり主人顔で誰がおき忘れたか銀扇の一つ残つてあるのも風情ぢア。それにしても今日

の伊達くらべでは、誰が一ち評判がよかつたか、萬事は光琳が差路、黒羽二重の白かさね、金銀五色のけば、しいあたるの趣向を消服するは最屈竟とは思ひ乍ら、さて心にかゝるは今日の首尾ぢア、早う、お石に逢ふてその様子を聞きたいものぢや」

そんな事をうそぶく時、お石ほろよひの體にて、花見幕をくぐつて出て來る、そしてす

ばやく内藏之介を見つけて

「おう、旦那様、お見へなされましたか」お石の言葉に、内藏之介待兼ねたやうに「今日の首尾の心許なきに、ちと早いとは思つたが、夕暮の櫻をながめ乍ら、小袖幕の外までうかぐと來てしもうた、してこの小袖の評判は？」

「されば、一時も早う聞いて戴きたいものと妾しも歌舞伎狂言の見物の間をばはして、こゝまで出てまいりました。金銀の縫ひ、眞珠、珊瑚ちりはめた、伊達姿、探山、神信、師宜、名人の描いた繪をそのまゝの工風を凝らさず下に見くぢして、たとほ花の山なる一つ松、世の春も知らぬやうなる此の氣高い趣向には、あの負嫁いな今日の主人も、淀屋の女房も、皆、我を折つたらしい顔つきでござりました。況してや珊瑚の珠を、この世で一番尊いものゝやうに身體中に縫ひとつた、江戸のお客はあの花車に氣を吞まれ、何の飾もないこの黒小袖に、珊瑚の色も褪せてしまひ、顔ばかり染めておられました」

「左様ならてはならぬ管ぢア、あゝそれで、
わしらも安緒した」

お石は今まで内藏之介を、勘算にばかり心
するどく、風流文事に疎い人だと思つてゐた
そして良人ではあるが、何時も心の中では内
藏之介を蔑んで居たのであつた。それが今度
西と東の兩狩野や、江戸で名高い一蝶も頭の
上らぬ今日の手柄を思つて、泌々心から嬉し
う思つたのであつた。

内藏之介は、此の事について、初めて自分
の工風でない事を自告したのであつた。

「して、この名趣向をお考へなされたは？」

「尾形光琳ぢや」

「えつ……」

お石はその言葉に愕然とした。

「いや、そのやうに驚く事はない」

此處で事の總てをお石に物語つた。お石が
まだ内藏之介の妻となる以前、島原で、光琳
と深い仲であつた事は、内藏之介もよく知
つてゐた。お石が内藏之介の妻となつてから
光琳は、ぶつたりお石の事は思切つて、妻を
娶り、妾も置いて、子供の二三人も設けてゐ

たのであつた。けれど光琳は物質に恵れない
爲め、あたらよい技量を持ち乍ら、心して筆
持つ暇もなかつた。で内藏之介は光琳に同情
して、出来るものなら諸賄ひを取仕切つてや
らうと思つて、此度の趣向を幸ひに、やつと
懇意を結んだ事を打明けた。

「そんなにしても、御意地なあのの方が、よ
うまア承知なされましたな」

お石は光琳の性質を知つてゐるだけにその
事に就いて、さう聞かずにはゐられなかつた

「年齢は人の心を丸うする。それに當節は何
事も余が力ぢや、浮世を外の高工でも、露を

喰ふては筆もとれぬ、空腹ない手でなければ
筆の先きにも力が入らぬは、あは……」

「それでも、わたしは、あの人は今さら逢ふ
のは、後めたらうござります」

内藏之介は、そんな事を云ふお石の心は判
つきり解つてゐた。

昔の事は水に流して、今は中村内藏之介の
妻として逢つてやるがよいと、しきりにお石
に進めた。二人がそんな事を話合つて押問答
してゐる時に、當の光琳の姿が見へた、けれ

ど、二人の姿を見た光琳はきびすを歸さんと
した、内藏之介は無理に光琳を呼戻した。そ
して内藏之介は此度の事に付て、厚く禮を述
べた。

十年後に初めて、顔と顔を見合せた、光琳
とお石の、互に語らぬ胸の中に、感慨の念に
絶ち難いものがあつた。

たま／＼中村の手代が、魚盆半田銀山より

松平宮内少輔よりの使の急飛脚をもたらせて

來た。内藏之介は光琳襲冥の後事をお石に託

くして其場を除した。

後に残された、光琳とお石の頭には、過ぎ
にし昔日の戀がまぎ／＼と甦つて來た。

「せめては夢になりとも、まどろめば、
短夜に山ほととぎす音ないて、はや夜が

明けた。

何處ともなく流れ來る此の唄に、光琳は
もうお石と寸時も對してゐる事は出来なかつ
た。十年前に受けた胸の痕は今新らしく、彼
れの心をかきむしつて行つた。われにもあら
ず歸する方によるめくやうに歩いて行つた。

光琳は全く一種の空想にとらへられて、お石

の事は忘れられたかのやうに、無意識のまま、小袖幕の中に入つて行つた。この時お石はたまらなくなつて光琳の袖にすがつた。

「市さま、あなたははまだ、此の妾ししが、それ程までに憎いので御座りますか……」

光琳は、昔日の影を追ふものゝ如く

「市さま……市さま……、わしも一度は市さまといはれた事があつた。戀しい人の唇から市様と呼ばれた事もあつた。しかし、その懐かしい市之丞といふ名は戀路の闇に踏み迷ふてゐた。若い頃の夢の跡ぢやア、そのやうな美しい夜はもう明け放れた」

お石の取つてゐた袖を振り放した。

「しんだ、つらいよの、こがるゝ浮身の消えもせて、さても命はながらへて晝はひねもす泣きくらし、夜は夜床にふし沈む

「未だに残る胸の痕跡も、あの時の悲しさが妾の心に喰ひ込んで消える時のない爲ぢやア。いつその時、惜しくもない魂の結が絶えてゐたら、こんな悲しさも、苦しさも一緒に絶えてゐたであらう」

「命を長らへてゐればこそ、今日の榮譽榮華に、三千世界の女達を羨やませる事が出来たのでは御座いませぬか」

光琳の言葉は皮肉にも、冷たかつた。

「十年経つた今日になつても……此身はどんなに成つても構はぬからもう一度、あの時のやうな春に逢つて見たい」

「楳の戸を打つ村雨や、梢にそよぐ松風や……」

「あなたが何日か御自分の影法師を障子にうつし書き残されし姿繪は、これ見て下さりませ」

お石は腕守りの中から光琳の影繪の姿を出して見せた。

「いとど涙に目がくれて、壁にそむける燈火の、影かすかなる曉の鐘」

「おいて呉れ、そのやうなたらし文句そなたこそ十年前の太夫の心がまだ失せぬか——」

光琳の兄の藤三郎が若い時からの傾城狂ひそが爲めに、勘當までした父の心の裡がいたわしく感じられた。それが故三十越しても紅白粉に遠かつてゐた自分が、お石を見てから

その兄にも輪をかけた道楽三昧、わづか一年餘りの間に身代をつかひ果してしまつたのであつた。

「わしが筆一本の淺ましい身となつた時、そなたは何とした、そなたは自分を何とした」

「わたしがあのやうになるについて、其時、あなたは承知された筈ぢや」

「さうぢや、承知せねばならぬ相談をかけたのぢや」

「あの時、父は死ぬ、母は大病、親方は邪見あの時の事は、あなたもよく」

「左様ぢや、だからわしは内藏之介に負けたのぢや、わしが持つ唯一の繪の力も、黄金の

前に負けたのぢや、しかしその黄金の強い力を、自由にする御身達夫婦も、貧しいものゝ心に潜む「繪」の力に頭を下げた時が来た。ハ……」

「そんなら小袖の趣向も、皆妾しへの復讐の爲めに書きなされたのか？」

「いゝや、わしはそなたの爲に、何一つ工風もせぬ、棄てられたそなたに「繪」といふもので、どうしてそなたを飾られやう、黒の小袖

で出るといふたは、昔の戀を黒染の法衣で包む、わしの意地ぢや」

「それ程強い憎しみが、まだ貴方のお心に消えずに……」

お石はたまらなくなつて泣き伏してしまつた。

「主人には、心で詫を云ひ乍ら、いまだにあなたを思つてゐた私はそれが口惜しい」

「お、憎い……あの時を思ひ出すさへ修羅がもえる。憎んでゐてもそれでもそなたの事は忘れる事は出来なかつた。わしに「繪」といふものがなかつたら、淵川に身をすて」

「いゝえ嘘ぢや、あれから程なく、御家内をおひかへなされた、開けば近頃お妾があるとの事、それ程までに移り氣な、あなたに身も心も放れてゐる妾を思ふなどは、それはみんな詐りぢや、わたしを苦しめるためのこしらへ事ぢや」

「いや、それがそなたに對する、此のわしの執着ぢや。——他の女に幾人逢つても、そなたに覺えた初戀のあの樂しみはもう得られぬそれ故、此頃は、妻子も、色戀も捨て、鞍

馬の厩に、繪筆の他に何物もない。だが内藏之介殿より小袖の事に付いて話あつてより、又立ちきはぐ心の煩惱、それが爲め近頃は繪の神にさへ見離され、今日もそなたの姿だけでもかいてみると、抜裁のやうな軀をこゝまで運んで來たのぢや」

「すざし別れに逢瀬といひし言の葉を忘れ

「妾のやうな愚な女は、またとあらうか、背いた殿御の誠の心を十年経つて初めて知た」

「併しもう總ては返らぬ事ぢや、何事も運命ぢや、わしは、再び「繪」にかへらう、そなたは夫に歸るがよい」

此の時光琳の弟子、光琳法橋任官の吉報をもたらして來る。

「何から何までこれ皆二條公の御推舉による處、此より直ぐ様今出川の御殿にまゐり御禮申上げやう」

光琳は狂喜して去らんとする。お石思はず後を追ふ。

「市さま、しばらく……市さまは、法橋に御任官」

その時幕の内にてお石の叫ぶ聲聞へる。

二

花に酔ふ、時の季節も何時か過ぎて、初夏の雨煙るが如く、若葉にそよぐ。

嵐山二條公の別邸、碧流さんくとして岸に碎け、靜風來たつて爽快を誘ふ。今日は二條邸にて賑々しき能の御催しあり。

法橋光琳も招かれてその席にあつた。今し方、彼が得意とする「江口」の打にて、シテを勸むる光琳の

「實相無齋の大海に、五塵六欲の風は吹かぬども

の謠ひの聲ゆるやかに聞へた。

「江口」の囃子終り近くなりし時、此の邸を尋ねる一人の旅装の男をみとめる事が出来た

此の旅人こそ、光琳が舎弟、乾山であつた彼は今江戸に時めく陶器の名手だつた。

侍女の取次ぎに依つて、間もなく光琳は乾山の前に「江口」のシテをそのまゝに現れた。絶えて久々の對面に二人は手を取つて無事なるを嬉んだ。

乾山は今度上野の御門主よりの急用にて、前年八月御山の諸堂落慶入佛式も済んで、王城の鎮護御山をそのまゝに東の都に移した姿御門主に此上もなき御満足、何事も心のまゝなる世の中に「情なきは此春満山の櫻に來て鳴ける鶯、音に訛りありて聲爽かならず、寢ざめの窓に經讀む聲もいたづらに都の空を戀しと思ふばかり、あはれ京の鶯の数百羽を捉へ來よ、吳竹の根岸の里に放ち飼つて來ん春毎に都の氣分を味はん」と御門主の御説、今手に入れては來春の間にあはず、それ故先頃叔父御宗中殿にお願ひ致した消息よりも取急いで上京の事となつたと傳へた。前以つて上京するとの知らせは來てゐたのであつた。けれど此んなに早く來るとは思つてゐなかつた。まだ四五日は見へぬものと光琳は思つてゐたのであつた。

光琳がお石に書いた小袖の事は江戸でも大した評判との事を弟の口から聞かされた。それは石川六兵衛の妻お初の江戸へ歸つてからの嘆聲に外ならなかつた。

乾山は繪の金銀に左右される可きでない事を光琳に説いた。

光琳とてもその通りであつた。何も金銀に支配されての上で繪筆を取る氣は一寸もなかつた。

光琳はお石の小袖の趣向に付て「繪」の筆を使はずにたとひ黒羽二重の白かさね、それだけの趣向のない趣向を教へてやつたまでだと總てを弟に告げたのであつた。

けれど、内藏之介から千両と云ふ禮金を受取つた事に付いて、乾山はきつもんした。それは以前光琳とお石との中を知る者に金を受け取りむば、未だにお石の色香に迷ふて貧乏意地を立てるなど取沙汰されるが不本意なさに誰々乍ら受取つた事をつけたして物語つた。そしてその金を、此度二條公が光琳の法橋任官祝を兼ねての能の舞開きに、油小路、西三條、中山の諸卿も一所に舞はうと仰せあつて、一代の榮譽此時と、小判を延箔として鏡板に繪具を盛り上げ、竹の皮つゝみの辨當の趣向、光琳の丹精を語つた。

乾山は、二條初め諸卿に對面している物の語りあり。やがて光琳が丹精の辨當の趣向ごとく諸卿の感服する處となつた。そしてその辨當は侍女の手に依つて川に流され

たのであつた。此處に於て光琳の面目、躍如たるものがある。

此の前乾山の進めに依り江戸へ下る決心なし此場に於て、諸卿方と袂別をおし、後日の大作成就を約して退出したのであつた。

三

嵐山の姿一見に迫り、峠路その中の若葉に埋もれて山腹に續く。

たわゝに咲きそるひたる山吹の黄金の花を流れにひたし、其處より名におふ名橋、渡月長く初夏の碧流に浮ぶ。大堰川の上の流はたちまちにして、急湍、たちまちにして深淵、雪の如き瀬と油の如き流れとを交錯して、たんと岸をかむ。兩岸に濕ぼる若葉、河水を挾んで滴たらんばかり。

雨上りの初夏の心地よい爽風に心ゆくばかり、面をたぶらかせ乍ら歩む二人の姿。それは法橋光琳と、乾山の二人であつた。

藝術の新たな魅力のまへに、決然として立つたる光琳の心氣一途繪筆にめざましく精進する彼の頭には、過去の惱も侮も何物もなかつた。ただ藝術の力強い誘惑のみがひし／＼

と彼の胸にむしあふれてゐた。

「こりやい、鹽梅に雨が上りましたな、若楓山吹、淀める水、いづれも兄上がお得意の繪の材料ばかりでござりますな」

と話しかけるは乾山。

「いつ見ても新しいは自然の眺めぢや、そこへ行くくと人間は、そなたのいふ通り變化がなうて面白くない、醒めた人、生きた人、今度の江戸下向は面白い事であらう」

光琳は泣々とさう云はずにはゐられなかつた。

「市さま……」

つと柳のかげより身を躍らせた一人の影。

「やつ、お石どのか、如何にして此處へ」

云ひさして光琳は乾山を振り返つた。乾山は光琳に目も警戒する。光琳うなづく。乾山、いそぎ橋を渡つて去つてしまふ。

「市さま、市さま、貴方は光琳と名をかへられても法橋に任官せられても、わたしには矢張りもとの市さまぢや。あの東山の花見の日から、わたしの胸は蘇へつた此のあなたは矢張りもとの市さまぢや。天下に名高い畫工、法橋光琳は、わたしの戀人ではない。世間に

名をこそ知らねど、心と腕に名畫をひそめてゐた其頃の市さまが、十年経つた今日でも、矢張り戀しい人ぢや。「繪」といふものの價値を知らず、黄金の力に打負けた不甲斐ない素人のお石はとうに死んだ。もとの大夫の左門と思ふて、市さま、たゞ一度許すといふ語を聞かせて下さりませ」

お石の吐く一句々々に血のにじみ出るやうな悲痛があつた。

「この橋の下を逃く水は、再びもとの流るゝ水ではない。今日の光琳は市之丞時代のわたしではない。この程東山で、恨みつらみを言ふた光琳でもない。いや、つい今しがた「江口」を舞ふた光琳ですらないのぢや。今の光琳はこれまでの一切煩惱の羈を絶ち繪畫の妙諦に勇猛精進の本願を立てた。その彼岸こそは關東の山河草木、新たに興る、江戸の繁華の根源を採つて日の本に昔から傳る倭繪を作り上げる光琳の覺悟ぢや。今ははや戀も無情も眼前の一塵、妻にも子にも暫時の執着を絶つた。丹精の杖の外には心は閉ぢる、かくて光琳一度都を去らば、そなたが迷ひの雲霧もおのづから霽れ、内蔵之介殿に對する操の鏡、やが

て光りを増すであらう。徒らに過去を追ふ時は、われも亦過去の人ぢや、お石ど、お互に新しい人に生れ變り、新らしき希望に生きやうではないか」

無氣にもなし訓すが如き光琳の一句々々深くお石の胸を衝いた。

お石はたゞ昔日の悔恨に、涙するばかりだつた。

「空も晴れた。月も上つた。若葉の匂ひは身に浸みる」

さう云ふ光琳の言葉は寂しかつた。滿感こも胸に迫り、それをうちまぎらはすかの如く、無意識のまゝに光琳は徐々に歩みをはこばした。

光琳の其言葉を開かれたお石も悲しかつた。相寄らんとして、相寄る事の出来得ない、今の身をも思つては、たゞ運命の経路に絶ち難き、きづなの袂別をあへなくされなければならなかつた。

光琳と乾山の遠ざかり行く後ろ姿を、お石はたゞ茫然と凝視する計りだつた。

去りゆく者、見送る者、さんくと岸をうつ流の音のみが、靜寂の中に響いてゐた。



光琳と乾山

高原慶三

京は小川頭、妙顯寺塔中本行院の光琳の墓は、江戸の酒井抱一上人が向島百花園の掬塲を京まで出張させ建てたものだといふこゝを聞いてゐる。その節掬塲が光琳の草稿數百枚を江戸へ持歸つたといふが、それが全部散逸したことは惜しい話。抱一は光琳、前者は江戸の大名、後者は京の町人、階級こそちがへ、時こそ隔つれこの二人の高踏派が藝道を仲介に結ばれた奇しき因縁であつた。

私はそうした事の興味から、ある年の五月雨の日、妙顯寺に苔を掃ひに出向いたこゝがあつた。

丁度卯の花が一杯墓域に咲き盛つて、それが雨にぬれてゐた

こゝもよい趣きであつた。墓域の門を這入つて、甃石が斜線を描いて、墓碑に達する布置の面白さも、さすがに抱一の好みであり、光琳が永久に眠る場所に相應しかつた。

「青々軒長江光琳居士墓」も、くせのないゆつたりした大名好みの文字であつた。



光琳を語るもの、誰しも花見小袖の意匠の卓抜を語り、嵐峽花見宴の、のべ金の竹の皮流しの豪宕を語る、が、かうした事

實は劇材に扱ひ易そうに見えて、なか／＼素人の庖丁には及ばなかつた。が松居松翁先生によつて始めて舞臺に上せられて脚色の老巧さに心憎く思はせられたのは丁度一昨年顔見世であつた。

その節、福助の光琳が律義一遍の堅町人に見えて、所謂「光琳、人となり豪宕にして、小節に拘はらず、その實行や、もすれば人を驚かす」態の藝術家らしい岩濤さに缺くるを遺憾に思つたが、さすがにこの人の身體にもつ貴品さは、かうした華麗重厚な貴族趣味の高踏派を描くに申分はなかつた。

やはり、その節、扇雀が紫翠深省の乾山をやつたが、これは義理にも褒められなかつた。若輩で、氣が利いてゐたことはこの人の持味かも知れぬが乾山にまつては全部無くもがな味であつた。

乾山はある意味に於て光琳よりは藝術家であつた。蒔繪のやうな技程はさうしたつて工藝的領分に屬する所以か光琳の事業には、さこやら効果を豫期して意表外に出でやうに

する野心がチヨイ／＼瞥見させられた。即ち竹の皮、花見小袖の逸話なき、さうやら趣向本位に墮し勝ちである。

乾山さくるさ、ズブ、まる切りの藝術家氣質、世評なんか氣にしないで、一塊の土に精魂をこめたこゝは、乾山の製作が、主として樂焼であつたこゝによつても窺はれるのだ。

茶を藤村庸軒に學び、禪の蘊奥を究め、茶禪一味の境に達しその遺偈に曰く「放逸無慙、八十一年、一口吞却、沙界大千」。

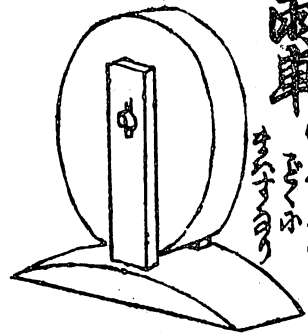
さにかく乾山は人間としては光琳より二三枚上手であつたらしい。

かうした達人の心境を歌舞伎の生活者が味到するこゝ、そのこゝさへまだ／＼なのに、舞臺に再現するこゝの至難なこゝ敢て冗言を要しまい。

くれ／＼も扇雀は乾山をやる前に京の北郊鳴瀨村の遺趾に佇んで落葉をたゞ時雨の音を聞いて、乾山の名こした深省をする必要があらうに、同じ京の住人たる好意からすゝめてやまな次第である。

歳末匆忙の際、ホンのせめふさぎの雑文、讀者諸君の寛恕を祈ります。

雨車
いんぐるま
てんくわ
あめずりぐるま



尾形光琳のこと

堂 本 寒 星

畫家を主題とした劇は、古くから餘り無いやうである。今度中座の初春興行に出てゐる近松の「傾城反魂香」などは著名なものだらうが、然しこれは吃又を浮世繪の始祖と云はれてゐる岩佐又兵衛に附會し、浮世又平なまき、呼ばせてゐるけれど、全然近松の空想の人物であつて、岩佐又兵衛ではない。

河竹默阿彌の作に渡邊華山を取扱つた「夢物語蘆生谷畫」にいふのがあるが、これまでも勤王家としての華山の一面を描いたもので、明治大正の作品中から物色しても「渡邊華山」「英一蝶」「圓山應舉」及びこれも中座の初春興行に上演される松居松翁氏の「尾形光琳」ぐらゐなものであらう。

英雄や心中者を描き盡した劇壇に、何故畫家をかうも劇化し

得なかつたか云ふことは、一寸不思議なやうにも考へられるが、名人とか名匠の一生といふものは、作品が著名であるといふ以外、僅かに苦心、奇行、又は機智に富む生活の或る斷片を窺はれる位が舞臺効果を擧ぐるに過ぎないのであるから、古來幾多の作者がこれを見逃したこゝであらうし、又一面俳優に取つても畫家に扮するには、その本體を把むこゝが頗る至難であつたらうこゝも、重大な原因を成してゐたこゝと思ふ。

私がこれまで見た華山、一蝶、應舉などは、その俳優が扮しても、さうも畫家としての風格や氣品に乏しいやうに思はれてならなかつた。今度の「尾形光琳」は、關西では一昨年の京都南座の顔見世で、福助の光琳、扇雀の乾山、市藏の内藏介、我

童のお石、鍛十郎の二條公なごで上演されたのであるが、光琳も乾山も餘りに美男子揃ひで、元祿を背景とした燦爛たる舞臺には成る程適はしい男振ではあつたが、私の胸底に描いてゐた天才の閃めいた光琳や乾山でなかつたのは是非もない。

それは兎も角として、この「尾形光琳」は畫家を主題とした脚本では纏まつた好い劇で、松翁氏の作品として後世に残るものであることは疑を容れない。開幕は東山の邊り、絢爛目を奪ふ元祿の花見の宴では、逸話として傳えられてゐる京の女(内藏介の妻女)と江戸の女(石川六兵衛の妻女)の豪華な伊達競べを見せ、嵐山では光琳蒔繪の竹の皮を大井川へ流す風流を描き、さて最後に渡月橋上、昔の戀人ミの淋しい雨の訣別を見せた技巧は誠に巧いものである。

蒔繪の竹の皮で想ひ出したが、光琳は畫家としての半生を京と江戸で送るうち、彼は常に金の「落し込み」の畫筆を庭前に在る石の手洗鉢で洗ふ習慣があり、積り積つてその手洗鉢から黄金が吹き出したやうに見えてゐたといふ逸話を残してゐる、それ程光琳の作品は豪華を極めてゐたのであつた。

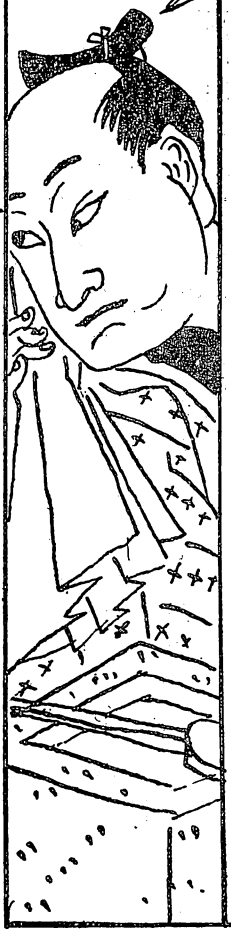
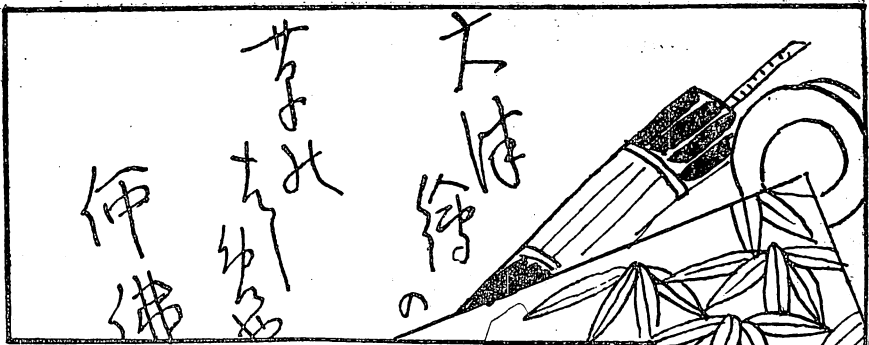
光琳の代表作として著名なものには津輕伯爵家所藏の「紅梅圖屏風」「白梅圖屏風」、根津嘉一郎氏所藏「燕子花圖屏風」その他「四季草花圖」「扇面散し圖」なごがあるが、何れも金色燦然たる光彩を放つてゐる。

光琳の家は京都西陣中立賣にあつて、父は東福門院の吳服御

用をつとめてゐた雁金屋の三代目宗謙といつた。その宗謙に三男があつて、長子藤三郎、次子を市亟、末子を權平と呼んだが、市亟は光琳で、平治元年に生れ、貞享四年父の没後、畫家になつて、一時江戸へ移り、再び京へ戻つて享保元年六月二日五十九才で逝去した、權平は乾山である。

その末孫は尾形家としてとてはないけれど、今日猶血統を繼いで小西家を名乗り淀町字木津に住してゐる。當代は藤次氏で、同家には傳來の家系、遺書、遺品が數多く殘されてゐる。遺書は「藤三郎より市亟への一札」「天和元年」「宗謙より市亟へ讓狀」(貞享元年)「藤三郎より日意上人へ一札」「市亟より同上人へ一札」「權平より同上人へ一札」「貞享四年」「宗謙より讓狀」(貞享四年)「光琳宛の乳母さん奉公請狀」(元祿九年)「光琳よりの寶狀」(元祿十七年)「乳母さんより光琳へ一札」「寶永七年」(光琳より妻女へ讓狀)「正徳三年」(光琳より小西新市郎へ遺書)「正徳三年」等がその主なるもので、別に「家屋敷見取圖」「百人一首畫稿」「寫生帖」なごの逸品があるが、「寫生帖」は鳥獸凡そ六十種を描き畫壇の至寶であらう。

光琳の墳墓は、この以前顔見世上演の際、西陣小川頭の妙顯寺を訪づれ、寺中妙泉院住職尾生行圓師の案内で、一度展墓したところがある。墓碑は本堂の東方に在つて、文政二年十一月雨華奔酒井抱一が建てたもので、「長江軒青々光琳墓」にあつた記憶してゐる。



中座初春興行上演
傾城反魂香

松 鼻 莊 主 人

俗に言ふ「吃の又平」ドモ又の芝居です。鷹治郎の吃又は既に定評があり随分久闊での上演です。このドモ又は浮世又兵衛とも呼ばれて浮世繪の始祖で荒木村重の子の岩佐又兵衛と言ふ慶長年間の人で土佐光則の門下で大和繪を學んで浮世繪の一派を開き市井の風俗

ださか人物わけて美人畫に獨得の描寫をした人で寛永十七年に死んだ。大津繪の又平は全然別人であります。そこで、此の『傾城反魂香』だが、是は寛永二年八月竹本座で近松門左衛門の作で上演されたのが最初で、歌舞伎では寶曆十三年大阪三軒座で上演されてゐる。大近松の作中でも畫家を取入れたものにして異色あるもので狩野、土佐兩派の人物が殆んど出て来る。吃の又平は土佐將監光信の末弟子で生れつきの吃で家は貧しく大津の宿外れで旅人に繪を賣つて喰べてゐた者です。後に土佐の苗字を許されて光起三名乗るのだが、この光起は光信、光長と共に土佐三筆の一人と言はれる人です。従つて狂言中には繪

畫に因む挿話が少くない。今日「傾城反魂香」大頭の舞をして上演する「吃又」の條だけでも狩野元信の描いた虎が暴れ出して竹籤へ逃げ込む。畫の虎なれば足跡があるまい。光信の鑑定がある。又畫の虎ゆへ畫筆で修理之助が抹消して仕舞ふ。更に又平が決死の絶筆をして手水鉢の石面に描いた自畫像が、尺餘の厚みある石を徹して両面に現れるなき仲々趣好たつぷりです。狂言は極簡單なものです。忠實に申上けるに、江州高島家の繪所土佐將監は都合あつて山科の竹籤多き邊りに浪居してゐます。

「……けに獸君の一靈山野にはびこり草木を踏みをり、田畠を荒すこゝな、めならず、近郷の百姓聲々に……」
大勢の百姓がそれ／＼獲物を手にして三井寺から藤の尾、そして山科へ追ひ込んだ虎を、皮に疵をつけず殿き殺そうと、浪宅の前の竹籤を覗いて騒いでゐる。將監の弟子の修理之介がその仔細を聞くに百姓達は天橋栗津の者で、此頃信樂山から虎が出て暴れるので退治するのだと言ふ。修理之介は虎と言ふ獸は日本に出た例がない。さては夜盜押入りの手引か。
「此の庵を誰ぞか思ふ。土佐の將監光信と言ふ繪師、仔細あつて先年勅勅を蒙り此所に逼塞し、將監年は寄つたれども某は門弟修理之介正澄と言ふ者、
油断はせぬミ棒を振り廻した。その騒ぎに將監夫婦も立出て

来た。天地の間に生ずるものあるまいとも極め難い。探して來い。修理之介に命じます。

「松明ふつて狩立つる一むら竹の下蔭に

ゐたぞ、ゐたぞ。それは正しく暴れにあらたる猛虎には違ひないが、立騒ぐ人影に恐る事もなく脊をたわめてねてゐるので。百姓達は今更に驚いた。將監ははたミ膝を打つて、

「あら不思議や、顏輝の筆の竹に虎の筆勢に少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず名筆の繪に魂入つて顯れ出しに極つたりしかも新筆今是程に書かんず人は狩野祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺えなし、いづれにもせよ證據には足跡あるまい尋ねて見やれ」
百姓達は若草を分けて尋ね廻つたが足跡はない。

「書き手も書き手」
「目利きも目利き」

「前代未聞の名人ぢやな」

「將監の前に跪いて一禮しました。修理之介はこのさまを見て繪道の悟を開いた。」

「そのしるしに我が筆先にてあの虎を消し失ひ申すべし。苗字名乗をさづけ御ゆるしを受けたう存じます」

將監は大いに喜んで早速土佐の光澄と名づけた。修理之介は印可の筆を與へられて虎の順にさし當て四五間あいだを置いて筆を動かした。頭、前脚、後すね、胴より尾先ミ筆に従つて次

第に虎は消し失せた。百姓達は舌を巻いて驚いた。子孫までの話の種、筆のついでによいおやまを十人程書いてもらつたら金儲けにならうものと言ひ、又借錢乞ひの帳面を消して貰ひたいにも笑ひながら在所へミ引返して行く。

將監の妻は修理之介の多年の丹精を愛でました。早速印可のしるしを將監は机に對つて印可の巻物を書いた。

「こゝに土佐の末弟浮世又平重起といふ繪描あり、生れついで口吃り言舌明かならざる上、家貧しくて身代は薄き紙の火打箱、朝夕の煙さへ一度を二度に追分けや大津外れに店がりして妻は繪のぐ夫は繪がく、筆の軸さへ細元手、上り下りの旅人の童すかしの土産物三錢五錢の商ひて命も錢も繋しが日影の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ夜なく見舞ふぞ殊勝なる……」

又平が女房のお徳と共に將監を尋ねて來ました。修理之介の取次で内に這入るこゝ、夫はなまなか目禮ばかり女房傍から通詞して……さある如く吃の夫に女房は到つての饒舌です。

『これはくお師匠様、まだお癪りなされませんか、誠にめつきり暖かに日も永うなりまして世間は花見の遊山のござはくざはく致します。こなたは山蔭、御浪人のおつれつれをいさめの爲め嫁菜のひたしに豆腐の煮べ、さゝるでもいたしまして關寺か高觀音へ……』

お供しやうかと思ふても心ばかりで道者時分は店が忙しく洗

濯物がつかえる。恰度瀬田鰻を貰ひ合せたので練貫水の天津酒と共に召上つて此春は幸福にお逢ひなされし喋りまくつた。將監の妻はその志を喜んだ。そして修理之介に名字を許されたこゝを告げて又平もあやかるがよいと言ひます。又平は聞くより女房を押退けて前へ突出て頭を下けたものの言葉が出ない。お徳はそれ察した。修理之介の話は道すがら聞いた。いくら身は貧であり不具者さ言へ弟弟子に土佐を名乗られて兄弟子がかうかゝして居られやうか。

「いつまで浮世又平で藤の花かたけたお山繪や、鯨おさへた瓢箪のぶらゝ生きて甲斐なし、身をもんでの無念がり……今生の思出に死んでの後の石塔にも俗名土佐の又平許してくれミ手を合せて涙に咽び入つた。聞くより將監は怒つた。これでも將監は禁中の繪所小栗の筆の争ひで勅勤の身になつてゐるが小栗にさへ從へば直ち富貴の身も榮へる者、土佐の名字を惜むのではないが修理之介は大功があつての事、おのれに何の功があるさけんもほろろである。女房は力を落しました。』

『これ又平の、こなたを吃に産附けた親御を恨みさつしやれ』
「泣けば又平も我喉笛をかきむしり口に手を入れ舌をつめつて泣きくづれた。折から表へ遠音に響く鐘諸共、息を切つて雅樂の助が走りつけた。

『將監殿、光信殿、一大事にござります』
「這入るなり氣を失つた。將監はそれを見て狩野之介の家來

「さ知るなり驚き、又平に跡よりの討手が来るか遠見の役を命じた。又平は『はあ……』と飛び出すなり大地に座しむんづみ兩手を組んできつみ向ふを見凝めた。將監は早速薬湯を雅樂之助にのました。注進の次第は御館の騒動が起つて姫君の御供をして切り抜けたが主人四郎次郎の行方知れず、それを探す中に敵に圍まれ遂に姫を奪ひ取られた。主人の身上心もこないの尋ねるから姫君の事はよろしく頼むと言ひ残して走つて行きます。又平はそれも知らぬけにじつみ見まもつてゐるのでお徳は役目のすんだことを言ふ。將監は身に迫る一大事に途方にくれた。義賢公のおたのみは爰の事額に小皺をよせて考へた。又平はそれを見て何か言ひたけにしてゐるたが女房の脊中をついて合圖するが女房は合點の行かぬ様である。遂に堪りかねていざり出て、

『オ、御師匠様が申上けます。コ、此のお使ひは、へ、拙者が参りました、ヒ、姫君をば……奪ひか、返して参りませう』

「おさきく言つた。將監は何を吃奴がご相手にしない。

『サ、ハ、そこがヒ、膝ごもダ、談合テ、天下に怖いものないへ、拙者が分別いたしか、叶はぬ時は、へ、へんぜラス、助定、ア、あつちへ遣るかコ、こつちへさるかク、首がけのバ、博奕、イ、命の相場がイ、一分五厘、ウ、浮世の又平ミナ、名乗つては、オ、親も

ない、子もない……

「たゞ師匠の名字を継ぎたいばかりに遣はされてくれぬ咽喉がき破らんばかりに頼み込んだ。將監はその聲も耳に入れず修理之介に雲谷の館へ乗込み、姫君と御朱印をうばひ返せし命じた。修理之介は畏つて駈け出した。又平はむんづみ抱き止めた。

『マ、待つてくれ、師匠こそつれなけれ、デ、弟子兄弟のナ、情けぢや。コ、此のおれを遣つてくれ、修理も云はぬ、ド、殿もイ、云はぬス、修理様〜』

「修理之介は氣をいらつて用捨はせぬ三刀を構へた。

『サ、キ、切れつ、つけ〜〜、ハ、放しやせぬ〜』

「將監は怒つて聲をあらけた。

『やア吃り奴、強つて邪魔ひろぐ此の將監が手は見せぬぞ』
又平はその前へさつかみ座した。切れ、殺してくれと言ふのです。修理之介はそのひまに急いで走り去つた。又平はそれを追はふミするをお徳は引止めた。それをもぎ放すのを握むミ突のけて地團太踏んだ。

『ナ、何ぢやホ、おのれまでがキ、氣狂ひは、ニヨ、女房にまでア、あなごらる、か、え〜』

「將監はきつみして、繪の道の功により土佐の苗字を繼いでこそ手柄、武道の功で繪師の苗字は許されぬと振り切つて奥へ立ち去ります。お徳は夫の覺悟を迫つた。今生での望みが切れた

ので傍の手水鉢を石塔ご定め畫像をかき止めて自害せよ泣く泣く硯の墨をすつた。又平は合點して手水鉢で水鏡を見て、手水鉢へは自分の姿を描き出した。

「……念力や徹しけん厚さ尺餘の御影石、裏へ通つて筆の勢墨も消えず兩方より一度に書いてる如くなり……」
女房はその奇蹟に驚いた。そして夫を無理に手水鉢の傍へミ引寄せた。

『コレ、抜けたわいなア〜』

『カ、ぬけた……』

奥より將監が出て來た。唐土では聞いたが我朝では例しが無い。此の筆勢見る上は今より苗字改め土佐の又平光起ご名乗れよ懐中より一巻を取り出して渡した。夫婦の悦び又平は口吃つて禮を言はれず涙にくれつ、踊り上つての嬉し泣きです。將監は重ねて先刻修理之介に申し付けたのは心を引見る手段、改めて又平に姫君ご御朱印の奪ひ返す役目を申しつけた。更にその形ではさあつて、衣服大小を與えた。おこくは喜んで着換えさす。だが大切な役目吃りでは將監が心もさなく思ひました。
『イエ〜その義はちつともお氣遣ひ下されますな。こちらの人が常々大頭の舞を好み私がシテワキにて舞ひしが節のある事はちつとも吃りはいたされませぬ』

このおこくの言葉に早速鼓は取出された。
『サア又平、祝ふて一さし舞ふて見やれ』

『ハア、さるにても鎌倉殿義經の討手にむくべし武勇の達者をゑられし……』

『それは土佐坊……』

これは土佐の又平光起が師匠の恩を報ぜんみ身にも應ぜぬ重荷を背負つたのです。女房は又もや御意のかはらぬうちに急いた。

『はやお暇申しまする』

ミ立上る又平に將監は印可の巻物を與えた。又平は師匠の恩を頭にいただき勇み〜て出世の途につきました。

配 役

- 浮世又平……………中村鴈治郎
- 女房お徳……………中村福助
- 土佐將監……………市川市藏
- 將監の妻……………中村成三郎
- 修理之介……………中村扇雀
- 雅樂之介……………林長三郎

小山内薫氏逝去

劇作家、評論家小山内薫氏は今回築地小劇場に上演された「晚春騒夜」の作者上田萬年博士令嬢上田富美子女史の慰勞會に出席のため廿五日夜日本橋區龜島町倍樂劇に行き、築地小劇場の北村喜八、友田恭助の諸氏と會談中、同七時ごろ突然心臟麻痺を起し葦原博士を招き食鹽注射をしたが、容體次第に險惡に陥り同八時急を聞いて築地小劇場芽生座からかけつけた登米子夫人や愛弟子一同に見守られたまゝ靜かに息を引きとつた、享年四十八である。

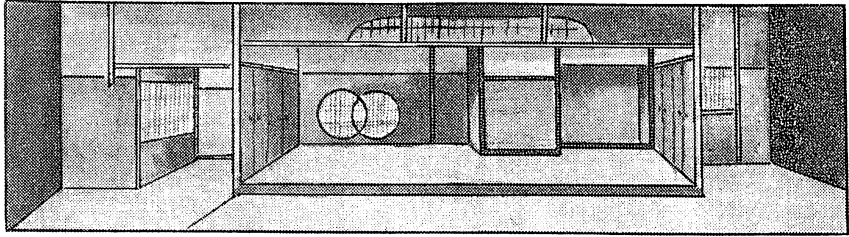
小山内氏は明治十四年七月廿六日廣島市大手町に生れ、五歳で嚴父の陸軍軍醫小山内玄洋氏に死別し母堂とともに上京して麹町區富士見小學校に入學、明治四十年東大英文科を卒業し、同年中澤臨川氏らと第一次「新思潮」を

發刊し、同四十二年十一月外遊から歸つた市川左團次と自由劇場を創立し日本新劇界に一大センセーションを巻き起し、新劇場によつて新劇運動に参加すると共に、松竹キネマ研究所長となり俳優の養成につとめ「路上の靈魂」に自ら映畫中の一役を演じ、日本初期映畫界に大きな貢獻をした。その間、慶應大學文科教授となり、久保田萬太郎、水木京太、北村小松氏などの劇作家を輩出し土方與志氏とともに大正十三年五月に築地小劇場を興し第一回に「海戰」を上演してから常に同劇場の指導者として内外の名作を上演すること四五回に及び昭和二年ソヴイェト・ロシア對外文化協會から招聘され訪露以來、持病の動脈硬化症が一層重くなり靜養につとめながらも去る十月小劇場改築後は「大乘への進出」を目

標として國劇運動を起し近松原作をアレンジして「國姓爺合戦」を上演し、また歌舞伎座十二月左團次歸朝興行に近松の「博多小女郎浪枕」の改作を續演し死の直前までは築地小劇場一月興行のメスフィールド作「忠義」の演出に努めてゐた。

尙菲儀は廿八日午後一時から築地小劇場で行はれた。舞臺一面を祭壇とし花輪の山で蔽はれたが、そのなかにソヴイェト大使館からの吊花が人目を引いた。

午後一時座員男女優をはじめ文壇各方面の人々が劇場前へ整列するところへ令妹岡田八千代夫人、登米子未亡人、令息徹君、宏君、喬君の三遺兒、友人總代久保田萬太郎氏等に護られて靈柩車は到着佛式により式を始め帝劇の山本事務を初め松竹 文藝家協會、三田文學、築地小劇場の各代表者それ〴〵弔辭を述べ午後二時終了、二時から四時まで一般會葬者の燒香を行つた。



中座初春興行上演

あづま
平寛

潤

駕

全二場

大森痴雪

場割

第一、井筒屋の座敷

第二、福島野

時

元祿時代

處

大阪——新町、福島野

第一、井筒屋の座敷

廣やかな客間、正面に床、脇床等、上手襖間の出入、下手は障子の出入、その外は廊下、室内はすべて茶屋らしい裝飾。

難波屋與平脇息に凭れて眠り、座には新造、引舟、花車、仲屠、替間なご居列ぶ。替間二人杯を間に置き拳を争ふ。賑かなる絃歌の聲にて幕開く。

替間の一（よい程に拳をやめて）鳥渡待ち、あの通りお大盡が三十石では、拳に勝つても勢がない、これ新造衆起しましや〜。

新造二人與平を揺起す。

人

難波屋與平

實川延若

藤屋の吾妻太夫

中村魁車

山崎與次兵衛

阪東壽三郎

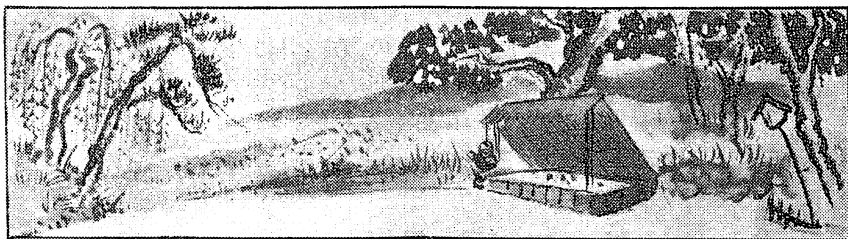
井筒屋九郎左衛門

嵐橋三郎

藤屋勘右衛門

市川鍛十郎

華者、替間、仲屠、新造、禿、田舎娘、旅人、昇夫等



新造の一もしお大盡様、お大盡様。

與平（醒める）あ、眠つたか、昨日は龜山から草津、けふは草津から京を乗越して大阪へ飛ばしたの
で、道な俺も勞れたかして、ついトロリミやつた、これ九郎左はさうした、吾妻はまだか。

仲居 あい、もう今でござんせう、まお目さましに一つお過しなされませ。

幫間の一 おつミお流れは此の吉兵衛へ、お肴はそれぐさしづめ新造の清川さん、この頃藤井長右
の古今節を覺えたさて、味な所をやられます、え、ミ、昔の人の戀するは命も絶えよミ戀をする、
さて中頃の戀の道、草木もなびげミ戀をする、今當代の戀の道、來らば來い、來ずばま、よミ、や
ア戀をする、なぞミな、は、ミ、ミ。

與平 措いてくれ、逢はぬ先から身請の談合に人橋かくる俺の前で來ずばま、よミは悪い辻占ちや。

幫間の一 南無三、これは……

與平 追従いふ手間で藤屋へ走れ、九郎左に逢ふて千兩までは苦しうない、随分ミ買煽つて埒を明け
吾妻を擲んで早ふ戻れミ。

幫間の一 おつミ合點、合點だ。

同 二 吉六酌まれ合點だ、金銀の盃おさへた、まつかせくまつかせな。

女達も聲を揃へて世繼踊を囃す、幫間の一踊りながら下手へ行きかける時、下手の廊下から
井筒屋の亭主九郎左衛門出る。

九郎左 旦那様、お喜びなされませ。

與平 調ふたか。

九郎左 藤屋勘右衛門ニツ返事でござります、何がさて天から降つた俄かの根引、身の代の算勘は後
より、太夫様は直様これへ、これくお出迎ひぢや。

幫間の一 おつミ合點、合點だ、加賀に菊酒お江戸のまん鉢、吉六酌まれ合點だ、まつかせくまつ

かせな。

幫間等下手へ去る。

與平は満足氣に杯を乾して九郎左衛門にさす。

與平 亭主の骨折で俺の思ひが首尾よふ叶ふ、先づ禮のしるしに杯をさう。

九郎左 これはお忝けてござりまする(受ける)何がさて金銀においさひなく身請けの手を打つてから、太夫様と初見の杯をお酌み交し遊ばさう云ふ潤達なお大盡は神武この方今が見始めの見納めでござりませう、井筒屋九郎左一代の譽れ、末代まで廓の花草、いやはや有難いお目出度いことござります、先づお慮外ながら御返杯を、

杯を與平に返す、

廊下から囃す聲が聞え幫間二人剽輕な身振りをしながら出る、その後には吾妻太夫續く。

幫間の一 吾妻太夫様あけます。

九郎左其他出迎へる。

與平 お、吾妻か。

吾妻は上座の櫛に着く、一座は陽氣立て、女は與平に酒を侷める。

九郎左 さて太夫様、早速の御入來で井筒屋九郎左お大盡に忠義の手始め、戰場ならば一番鎗を申す所でございます、定めし委細は勘右殿からお聞及び……でございますうな、

吾妻々々々見ぬ戀のお名になつて遙々その吾妻からお上りには昔男の業平朝臣を逆にした行き方、いざこま問はんと都鳥、我が思ふお人はこゝ大夫唯お一人を仰せられまして九郎左行て来い、畏まつたで逢状より先に根引の使者が罷り向ふたさは何さけふさいこまではござりませぬか。

吾妻 井筒屋の、待て下さんせ、花を賣るは太夫の常、こゝな逢状で來は來たなれき、根引さやら委細さやら私や何にも知りやんせぬ。

九郎左 まだ御存じなし、さはまださうぢや、はゝア、さては勘右殿、太夫様をあつと喜ばさう云ふ……。

吾妻 措いて下さんせ、身請け聞けば唐長崎の客衆はおろか初見未見の買手でも飛付いて行くと思ふてか、よそ島は知らぬこゝ、新町にはそんな女子はござんせぬ。

與平 亭主、抱主の藤屋が二つ返事さいふた口上に違ひはないか。

九郎左 減相な、尻から剝けるお座なりを何で私が申しませう。

與平 よし、それで安堵した、なふ吾妻、私は唐長崎の男でもなければ初見未見の客でもない、生粋の船場生れで江戸下りの油商人、今で二年前の正月に物も云ふた、杯も酌交した。

吾妻 ほ、ふ、そんなことあつたやらなかつたやら、覺えてはゐるやんせぬが、杯ばかりの正月のお客衆がそれほごに思ふて下さるも太夫冥利、嬉しうお禮を申しやす、したが馴染も重ねぬ先から根引の身請のこ、お金さかりが物をいふ野暮な話は措かしやんせ、新町は戀の廓、金の廓でござんせぬ。

與平 いや、その戀が金で買はれる所が廓の重寶ぢや。

吾妻 それは戀でなふて色でござんす。

與平 戀の色、その詮索は難かしいが、兎もあれ俺は何を隠さうそなたに惚れた、思込んだ、ぢやによつて命がけ一夜さ二夜さの帳端な戀は買はぬ、一生の花を買う、そなたにて一夜の花を賣るからは百年の花は賣らぬこは得いふまい吾妻 座敷の花なら、あい、一生でも買りやんせう、吾妻が婆になつて朽果るまで買はしやんせ。

九郎左 これはしたり如何に太夫の位を落さぬためぢやきて婆になるまでこはち色氣がなさ過ぎます、現に親方の藤屋では二ツ返辭、双方に渡るものが恠うく渡つてしまふたら……でござりませう。な、な、太夫様。

藤屋 勘右衛門下手から出でこの時内へ聲をかける。

勘右衛門 九郎左殿。

九郎左 誰ぢや、ごなたぢや。

勘右 藤屋勘右、お慮外ながらお座敷へ通ります、大事ござりませぬか。

九郎左 お、丁度な所、さ、さ、これへ旦那様、藤屋勘右衛門御返辭に參じましてござります。

勘右 勘右衛門座敷へ通り與平に一禮する。

勘右 さて九郎左殿、いやはや歳はさりたふないこの、藤屋

勘右衛門、さんこ老老をしてのけました。

九郎左 何ぢやいな、藪から棒に老老さ。

勘右 その老老故に途方もないしくぢり、旦那様、藤屋勘右衛門この通りこの通りお詫びを致しまする（頭を疊にすりつける）

九郎左 ま、手を舉げて下され、これさ勘右殿、じたいこりや何ぢやいな。

勘右 第一九郎左殿に面目ない、最前太夫が身請の談合、いやもう福徳の三年目さあまりの嬉しさに無我夢中で手を打ちました、あこで心付くにお詫びは爰ぢや、實の所身請の談合は外に一口前方からか、つてゐましたのぢや。

九郎左 外に身請の客、おつこ、そりやあかん、今時そんな古手は賣れぬ。

勘右 さ、さう云はれるのは覺悟の前、さうぞ藤屋が恠ほけして廓の作法を忘れたさなり、足許に付込んで抱兒の身の

代を競上げ損ねた横道者になり、さうなりにも貰んでその代りには一旦打つた手を反古にして下さりませ、お大盡様この通りでござります。

又仕へる手を遮つて

九郎左 おつこ待つた、その拜み倒してお大盡はお諦めなさるか知らぬがそれでは揚屋置屋の掟が立たぬ。

與平 待て九郎左、置屋から見や太夫も畢竟商ひの代物であらう、一つの品に二人の買手がついたから高値に渡す商ひの定法ぢや、四の五のいふ所はない、素より吾妻一人を目當に足かけ二年死身で稼出したこの金ぢや、よし俺はこれだけで太夫を身請する。

皮財布から千両の金を疊の上に打明ける、皆驚く。對手がこの上一分高ふても未練なしに引退るが、先のつけ値が千両から一文かけても吾妻は金輪俺のものぢやぞ。

吾妻は衝立立つて去らうとするのを勘右がさめる。

勘右 これ太夫。

吾妻 でも一座の中でこの耻が。

勘右 何にもいやるな、私に任せて、はて下になるや。

強ゐて坐らせる。

吾妻は無念の涙を拭ふ。

旦那様、今何ミやら仰りましたな、足掛二年吾妻一人を

目當てこやら。

與平 え、いかにも云ふた、何を隠さう、俺は眞實吾妻に惚れた、命をかけて思込んだからは八幡女は人手に渡さぬ、身請の料はざつこ千両を目安を立て、思立つこそのま、江戸へ下つて油商人、一代の智恵を絞つた懸引がまんま運に叶ふて一年餘りで五百貫目からの銀を儲け出した。

九郎左 え、僅一年で五百貫目。

皆驚きの眼を見合す。

與平 かう云ふ仔細で身請けがならずば捨場すてばに困る千両ぢやさ、藤屋の亭主、たつた今對手の客の買値を聞かう。

勘右 ま、鳥渡お待ち下さりませ、藤屋勘右衛門も抱への太夫を競りにかけた云はれては未代までの耻になります、では籤抽きにして戴きませふ。

與平 なに、籤抽きに……

勘右 兎角世の中は何によらず籤抽きの運次第、お慮外ながら旦那様の一年で五百貫をお握りなされたも御運に叶ふたればこそでござりませう。

與平 よし籤抽き承知した、俺がけふまでの天運でも、男一疋がこの思ひだけでも必らずお籤に引き勝つて、吾妻は身がものなるは知れてある。

勘右衛門は鼻紙を引裂いて二本の籤を作る。

勘右 では長い方が勝籤でござります。
與平 よし。

與平は坐を離れて真中に勘右衛門と對座する。

この籤に抽負けるほごなら、これまでの運は皆不運、儲けた金も石瓦同然で世には天道もなけりや眞もない、なんのなんの、そんなこごがあつてよいものか、さ勘右衛門、抽くぞ。

與平必死の態度で一本の籤を抽く。

勘右衛門はちつミ見る。

勘右 御運の強いお大盡、旦那様の勝でござります。

残りの短い籤を見せる。

與平 俺の勝か、お、この通り俺の勝ぢや、俺の勝ぢや、

吾妻はいよく俺のものに極まつた、これで二年越の思ひ

が叶ふた、は、は、は。

九郎左 旦那様、お目出度うござります。

幫間一 お大盡の勝籤ぢや。

同一 それ、お大盡の勝籤ぢや。

皆聲を合せて嘸す、吾妻はわつミ泣伏す。

それに驚いて皆口を噤ぐ。

勘右 これ太夫。

吾妻 親方さん。

勘右 何事も天道のお指圖ミ、な、早ふお大盡のお傍へ。
押やる。

與平 吾妻、今からは俺が女房ぢやぞ。

吾妻 あ、私は……

離れやうミするを九郎左が遮る。

九郎左 もし嫁寮人様、席をかへて祝ひませう、さ、奥へ御案内を〜。

案内を〜。

與平 九郎左、身請の算勘、萬事任せた、よいやうに圖らつ

てくれ、さ、吾妻。

手を取つて上手へ去る、皆嘸しながら隨ふ。

勘右衛門と九郎左残る。

勘右 やつぱり運ぢや、運に叶へば人間の心まで振曲ける、

争はれぬものぢやなあ。

九郎左 さうごも〜、お蔭でこつちも運が直つた、所で身

の代の折れ合ひぢやが、いや、先づこの金から先に改めて

か、らにやならぬ。

金を掻集めて數へて勘右衛門はちつミ腕を組む。

かうつミ、これで百両包みが十の千両、あミの勘定がむづ

かしい。

額銀その他を數へる。奥から絃歌が聞へる、上手か

ら吾妻が慌しく出る。

吾妻 親方さん、いえもう親方さはいひません、ようもく私をだまして深い所へ突陥めて下さりました。この返報はかうしてします。

下手へ去りかけるを勘右衛門抱留める。

勘右 待つてくれ、これには深い思案があつてしたこぢや
吾妻 思案は愆の思案、この怨みに死んでお前に見知らせます〜放して〜。

勘右 さうのほつてはさもならん、まア落つて私のいふことを。

吾妻 い、や聴かぬ聴きませぬ、あれほさまでに泣かせ拜ませ禮いはせて置きながら。

勘右 その腹立は尤もぢやが、これ見や、この通りまさかの時には摺替へる手品の種の長い籤まで拵らへて來た勘右衛門が、そなたの約束を反古にしたのは、そなたの身を思ふよく〜深い了簡があるからぢや、まアみつくり落つて聴いてくれ。

袂から別の長い籤を出して見せる。

九郎左殿には濟まぬこゝながら、最前こなたが去なれた後で、吾妻に仔細を話した所、深う云交した山崎の與次兵衛殿、親御の不首尾で逢瀬も絶々になつてはるるが、今他人に請けられては男に濟まず、こつちも立たず、仕替へをこ

るか、年切り増すか、我身で我身を身請してもこの根引はのがれない、助かりたい、頼む〜三拜まれては子飼馴染の可愛さに、私の了簡もがらり三變り、さうでも爰な客衆には渡さぬ思案でこの通り摺替の勝籤まで忍ばせて來たなれど、いざこいふ瀬戸際にのお客の眞實心に押負かされて、そなたの運を天道任せにあのお客へ渡してのけたこいふたら愆も思はうがさら〜以てさうでない、私はそなたがいこしいからぢや。

吾妻 何でこれがいこしい仕方、あんまり云へばあんまりな。

勘右 これ吾妻、あれほご眞眞剣な爰なお客が、何でこの場限りて手を引かうか、双方意地を張合ふたら、水の手の切れてゐる與次兵衛殿は張負かされて、二人は斷落か心中かいづれの道にも命代物、戀しい男を殺して本望でもあるまいし、私にすりや向のこゝこ、子飼のそなたにそんな愛目は見せられぬ、最前もいふ通り、世の中はすべて籤抽きの運次第、抽當てられたを定まる運も因縁も諦めて、な吾妻、生れ變る氣で請けられてくれ、聞けば聞くほご智恵もあり、才覚もあり、然かも魂までそなたに打込んでござるあのお客、行末の仕合せが見るやうな、云ふたら又氣に障るか知らぬか、あれほごの心中男を袖にしたら傾城冥利

に盡き果るぞや。

吾妻ちつこなる。與平上手から出で様子を窺ふ。

九郎左 成程なア、これが町方の女子供ならいざ知らず、戀の淵瀬のさん底まで知り盡した太夫様なら、こりや思案所でござりませうぜ。

吾妻 親方さん、私やあの客案に請けられませう。

勘右 うん、合點がいたか。

吾妻 水に根を持つ傾城の落つきはこんな所でござんせう。

與平座敷に入る。

與平 吾妻、爰にゐたか。

九郎左 お、お大盡様、唯今直に算用を。

與平 面倒ぢや、千両を藤屋へ渡せ。

勘右 いや、あこ二月で年の明く吾妻、千両取つては人の思惑、私の男が立ちませぬ、いつそ只で申したけれど、それでは御承知なされますまい、三百両で手を打ちます。

與平 なに、たつた三百両、初めから身請に當た千両の金、一兩残つても氣が濟まぬ、よし、三百兩は井筒屋へ祝儀にばつむ。

九郎左 え、三百兩、合せて六百兩、しめませう。

九郎左ミ勘右衛門しめる。

上手の襖から以前の暫間その他覗く。

與平 世の中は可笑しなものぢや、去年の正月は一文なしの風吹鳥、貧乏神の宣托兒で通つた難與平が、けふは千両の金の使場に苦しむ。

吾妻 難與平は。

九郎左 はて聞いたここのある名でござりますぞ。

與平 吾妻、ミつくりミこの荒男の面を見やれ、妾かたちは變つても何ミやらにちつこの見覚えはあらうも知れぬ。

吾妻は初めてちつこ與平を見成る。

去年の正月、しかも此家の店頭でそなたの手から十両の金恵まれた日傭取りの難與平はこの私ぢや。

吾妻 お、私への戀疾らひが不感故き、お袋さんが連れて來て杯一つ所望されたあの與平さん。

九郎左 ほんにその時太夫様は戀いふては叶はぬが、座敷ばかりは苦しうない、これで身の廻り調べて三十両金を恵まれました。

與平 傾城に金恵まれた羞しさ口惜しさに一心發起しての江戸下り、廊下使へばその場に消えるあぶく錢を智恵才覺で千兩にまで積上げたのは男の意地、その千兩を今散らすのは與平一代の戀の誠、これも勘右にいはせたら、運次第ミいふであらう。

勘右 いや、腕次第ミ申します、旦那様、へエ、これが年

期證文でござります。

與平、受取つて引裂く。

與平 吾妻、あすは有馬へ湯治ぢや、そなたが廓の垢をお返しによいか。

吾妻 あい、それで大方心の病も治りませう。

與平 さ、奥へ行て飲み直さう。

九郎左 お大盡様、この残金は。

與平 お。

四邊を見廻す、替間等座敷へ入る。

皆寄つて祝へ。

撒きちらす男女入亂れて拾ふ、華やかな絃歌の聲。

— 廻る —

第二、福島 の 野

一面の菜花畑、上手に一軒の野茶屋、上手奥より下手へミ一條の野逕が通ず。

野茶屋に六部が一人、旅商人が二人憩んで茶を飲み居る。

茶店の老爺は、土竈の前で炭を燻らす。

雲雀の聲。時々遠音に鶯の囀り。

商人一 何といふ麗かな天氣であらう、今年の春は雨が少なふて旅商人のこちさらには何よりぢや。

商人二、この塩梅ではあすもよいお天氣に違ひない、かうして菜の花を見ながら一ぶくしてゐるミ、商賣のこころも忘れ

てうつさるミ眠むうなつて来る。

六部 一天雲なく三日に雨あり、ミいふてあるで、明日は雨にならうも知れませぬ。

商人一 遺がは六部さん、難かしいこころを知つてゐさつしやるな。

六部 なに、これはお寺で坊さんから聞きましたのぢやハハ、

上手から田舎娘が出る。

茶店爺 お千代女郎、もう菜の花の蕊摘みかな。

千代 あいさ、早ふ摘まんミ菜種ののりがわるいだな。

爺 菜種もさうぢやが、お前も早ふ摘んでもらうてよい種を

仕込まにやあかんぞえ。

商人一 如才なふ何處ぞの若い衆に、疾うかう摘ましてゐる

のであらう、なふ娘さん。

千代 ほ、知らぬわいな。

後向いて懐から手紙を出して讀耽る。

上手から三人連れの娘が出る、囁き合ふてお千代の

後に忍び寄り、手紙を奪ふ。

あれ、そりや見せられぬ、頼むによつて戻して。

娘の二 白狀したら戻して進ぜる。

千代 いやぢや、そんな手紙ぢやないわいな、これ、戻して

取りにかゝる、手紙は手から手へ渡る。

又二人連れ娘が出てこれも加はつて、笑ひ興じながら追ひつ追はれつ上手へ去る。

六部 いづこの里も戀の沙汰ぢや、ハハ、ハ、ハ、

商人一 六部さんも覺へがあらう、され、私達も村へ行つて

若後家なりミ捜さうかい、ハハ、ハ、ハ、

三人 茶代を置いて去る。

下手の遠くから大勢の歌聲が次第に近く聞える。

唄へ 咲いた櫻になぜ駒つなぐ、のほんえ、駒が勇めば、

のほんえ、ほんほのん、いよゝゝ花が散るゝゝ

美しく飾つた駕に與平ミ吾妻を乗せ、それを取巻く
華車、仲居、幫間末社、荷持の下男など大勢さよめ

き乍ら下手から出る。

與平 なふ吾妻、この菜の花の美しさはさうぢや、大阪を離れて二里は來ぬに別世界ぢや、廓育ちのそなたには一入珍らしい眺めであらう。

幫間一 それゝ啼きますわ、囁りますわ、御寮人様、あれが雲雀ミ申す鳥めでござります、吉兵衛の舌もあの位廻つたら、一廉金儲けになりませうもの、羨ましい奴でござ

りますわい。

吾妻は浮かぬ體。

與平 さうぞしやつたのか、乗り馴れぬ駕に揺られて勞れたのではないか。

吾妻 い、え、何さもござんせぬ、氣にかけて下さすな。

駕はそのまゝ上手へ去る。

下手から「おーい」ミ呼ぶ聲。山崎與次兵衛が息をはづませながら走り出づ、一行の殿にゐた幫間の二人その他が遮ぎる。

與次兵衛 待つてくれ、吾妻を乗せたその駕待つてくれ。

幫間二 なりませぬ、吾妻様はもうよその花ぢや。

與次兵衛 きのみまで俺に追従いふた太鼓末社共、恩を知らぬが情を知らぬ、これ吾妻、與次兵衛ぢや、山崎與次兵衛ぢや。

搔きのけて行かふミするを幫間等が遮ぎる、上手から吾妻が、遮ぎる人を押のけながら走つて出る。

吾妻 與次兵衛さん。

與次兵衛 吾妻か。

抱き合ふて泣く。

昨夜おこした急飛脚の文、今朝手に入るミそのまゝ宙を飛んで新町へ駈けつけたが、後の祭、一小时前に有馬へミ聞い

て跡追ふて来た、悲しがるふ、死にたからう、俺も死にたい、身の臍甲斐なさが口惜しい、許してくれ、こらへてくれ、これ吾妻。

吾妻 お前を死なすまいばかりに、心を殺し身を捨て、根引しられた辛抱も、爰で逢ふたが互ひの因果、私の心はもう一寸も先きへは行かぬ。與次兵衛さん、さうぞ吾妻にお前の命を。

與次兵衛 お、やらいでか、その代りにはそなたの命は與次兵衛が貰う、不義者云はと云へ、不所存者云はと笑えかう取つた手は未來永劫離しはせぬ。

上手から與平が出る。

與平 與平にまつて何より手強い戀敵の心で睨み通して来たその對手が、案に相違のこの體態、心の張りの拍子が抜けた、したが吾妻は俺のもの、腐つても男なら指もさゝれはせぬ筈ぢや。

吾妻 いえ賣つたは體、心までは賣りませぬ、お金が惜しくは吾妻の死骸を持つて行かしてやんせ。

與次兵衛の指す脇差に取りつく、双方意氣込む。

與平 ふう心は賣らぬ、死んでも男も添ひたいのか。(チツと見る)

吾妻 あい。

與平 よし、くれてやらう、吾妻さいふ生きた死骸に鬩斗をつけやう。

吾妻 では私を。

與平 思ひ通り根引して我が物にしたからは一夜も百夜も變りはない、與平生れつき未練の念佛は禁物ぢや。

吾妻 では眞實私を與次兵衛さんに。

與次兵衛 いや貰はぬ、落魄でも山崎與次兵衛、廓の小眼にまでうたはれた男が、譯も立てずに女子貰ふたでは未代までの耻辱になる。

與平 貰ふがいやなら貸すせう、十兩の代りに千兩を期限なしの無證文、但し返金には親譲りの金銀は通用せぬ、與平がしたと同じやうに身の膏で煉り上げた金に限る、随分利徳な借ものながら、覺悟がなふては借られぬわい。

吾妻 與次兵衛さん、もし、與次兵衛さん。

膝を揺つて促がす。與次兵衛は遶らふ。

與平さん、何にも云はぬ、これでござんす。(拜む)

與平 嬉しいか。

吾妻 あい。

與平 與平が千兩の金になつて貸渡されても。

吾妻 あい嬉しうござんす。

與平は大笑する。

與平 ハハ、これで美事吾妻を買ふた、賣らぬ筈の心ぐ
るみ吾妻を請け出した。

吾妻 金ではなふてお前の心に、吾妻の心を賣ります、さ
與次兵衛さん、きつぱり借りて下さんせ。

與次兵衛 親の金の味より知らぬ與次兵衛、與平殿の一言が
臟腑に滲て、今こいふ今覺悟が出来た、いかにも恩に被し
金千両借用します。

手を仕へる。

與平 出来た、これで昨日からもやくやした氣がさらりさ晴
れた、さ、しめてくれ。

幫間等しめる。

上手から昇夫が駕を持つて出る。

與平 見渡す限り菜の花の、黄金世界が與平の金運を祝ふや
うでけんがよい、皆もはなむけに景氣よふ唄ふてくれ。

駕に乗る、昇夫は棒鼻を上手へ向けやうとする。

待て、もう有馬へは行かぬ。

昇夫一 さちらへやります。

與平 今から直ぐに江戸へ行く、飛ぶやうにやつてくれ。

駕は方面を轉じて花道へかゝる。

與次兵衛 與平殿。

吾妻 お前の仕合せを祈ります。

與平 お。

昇夫の懸聲いさましく、揚幕へ去る。

吾妻、與次兵衛その他見送る。

幫間の一人がよい聲ではなむけの唄をうたひ出す。

—幕—

松竹合名社經營各座御用達

西洋家具

室内裝飾設計

劇場・カフェー専門
お好みに應じ製造

大阪市天王寺區上沙町三丁目四七

島岡武治郎

洋家具製作所

電南四四九番



吃
又
と
お
徳

高
谷
伸

干支に囚んで鍬をついて蛇でも出すかと思へば、思ひがけなく鍬から虎の出る傾城反魂香ミは洒落た趣向である。

近松近松三名の喧しい割に、出雲や半二程深馴染にならない中で、さちらかさいへば親しみのある方ではあるが、舞臺の淋しいのが物足りない。畫師を扱つてゐながら色彩に乏しいのもあまりに皮肉である。

この前鴈治郎の吃又を見たのは大正七年の顔見世で、福助のお徳、梅玉の將監、右團治の雅樂之助、扇雀の修理之助ミいふ顔ぶれであつた。その時は、でなくてもくらい舞臺を衣裳の濫さから一層じめじめさせたのを今でも遺憾に思つてゐる。

愚直ミいふよりは愚痴つほく、くきくき苗字印可のこころを嘆願する又平を現はすのには、さうした効果を狙つたのかも知れないが、いつもいふ歌舞伎の美しさから論じて、それは探りたくない。淋しいうちにも華やかさを捉へて置かねば幕切の大頭の舞臺でもてぬ懸念がある。將監の娘お梅の黄八丈めいた着附が舞臺に見られなくなつたこころも色ざりの上からは實に惜しい氣がする。

歌舞伎には理窟は禁物である。

さんな名筆でも、いかに一心凝つても石の面から面へ畫が抜けるこいふ筈がない。しかし、念力の籠るこころ、石も突抜け

さうな氣持、眼光紙背に徹するこいふ氣魄は首肯できる。この感じを押し進め、具象化して像が抜けるこいふこになつたのだから、小細工よりその魄力を現すこゝが肝要である。

最初はお徳に芝居をさせ、修理之助に功を奪はれるあたりから焦りだし、死を覺悟して石面に對ふ時が最も緊張した時である。「抜けた」から、がらりこ氣を變へて大頭の舞の面白さに轉じるまで、作者の周到な用意が窺はれる。

この呼吸をよく考へて、小味より大味に、技巧より力に進めば芝居はきつ三面白くなる。それが歌舞伎の精神でもある。

鴈治郎の巧さは吃又に限らず、しばしば見るものであるが、味なる時に考へさせられる。

この一幕では又平が味で見せ、お徳が技で見せるまことに効果があるのであつて、吃り喋舌りこを對立させた作者の意圖もまたそこにあるのでは無からうか。

鴈治郎程の役者である。お徳に前半の芝居をうんこさせて、後半を又平で緊めて行くだけの用意は充分できてゐるこゝ、信じる。

従つてお徳はお梅が出ない限り、この幕唯一の女性であり、充分芝居をするやうにできた役である。これが面白く見えなければ、この幕の前半の興味は失はれる。

今度はそんなこゝは無いだらうが、この前の福助のお徳は感心できなかつた。それは第一に着附を濫くしたこゝ、第二に派

手な動きを控へたこゝであつた。

栗梅の着附に黒の丸帶こいふ式を避けて、納戸小紋の着附にかへたのがそれで、藤の花かたけたおやま繪や繪押へた瓢箪のぶらぶら生きても甲斐なしなまきのふりを控へたなきがその次である。主要な登場人物にそれぞれの演どころが考へてある淨瑠璃物演出の本位は、他人の演どころを冒さず、自分の演どころを活かす所にある。遠慮は無沙汰昔からいふ通り、あまりの引込思案は芝居全體を面白くなくするものである。

修理之助の着附もその時は縞もので派手ではあつたが、前髪若衆の歌舞伎らしい單純化された美しさが無かつた。

同じやうに石刷りの襖を持つた舞臺で、しかも所さへ程近い忠臣藏の九段目では流石に色彩の配合がよく考へてある。

裏の裏を行くのが古劇の面白さであるにしても、畫師の芝居に畫模様のすくないのは、裏へ抜けすぎる。

歌舞伎はやはり綺麗事である。さうせ虎のぬけるのも石のぬけるのも雅樂之助の注進のさんちゃんも主觀の具象化である。

嘘こいへば嘘である。嘘が歌舞伎を美しくもし、面白くもするのである。

又平の型には昔からさまざまの面白さが傳へられてゐる。雅樂之助が又平を飛び越す型なきも思ひきつた一例である。

さかく理につまつては面白くなくならうとされてゐる大阪の歌舞伎が改曆こゝにも、歌舞伎の本質に歸つた一大飛躍を見せてくれたら、私たち芝居好きはされだけ嬉しいか知れない。



吃又について

森 ぼ の ぼ

『傾城反魂香』を讀んで見るに、作者が人形の爲に描かうとした部分に、淨瑠璃の爲に描かうとした部分とが、餘りにハッキリしてゐるのに氣が付く。上の巻の前半、悪家老の爲に縛められた元信が、自ら肩を嚙切つた血で虎を畫くに、虎は生を得て襖を脱げ出で、對手をさんざんに懲らして元信を救ひ出す條、後段では、又平の畫いた大津繪の人物や動物が躍り出で、領主の姫君を奪はうとする悪人輩を追ひ退ける條——これだけを見ても、作者が「手摺」をいかに活躍させようとしたか、能く分かる。この間に介在するのが例の「吃又」の條で、これは全く語り物としての面白さを主眼としてゐる。木訥な、一克な、吃の藝術家に純情な、能辯なその妻——對照の妙は事新しく言ふまでもない。そして、人形の爲もした部分は時代と共に淘汰されて、この「吃又」の條だけが舞臺の上に繰返されてゐる。題名の『傾城反魂香』はもう全く名ばかりで、「吃又」には何の意味も持つてゐない。

元信に戀してゐる領主の姫、銀香の前——元信と契を結んだ將監の娘、傾城遠山——三角關係がこゝに生れて、遠山は懊惱の末、病死する。その魂魄が香煙の中に姿を現じる——『傾城反魂香』の題名はこれから來てゐる。

反魂香のこゝは、歌舞伎狂言の『夕霧』なぎにも用ひられたらしいから、何もこれが最初でもないだらうが、これを燒直したものに「今様傾城反魂香」だの『名筆傾城鑑』だのがある。又、歌舞伎の方へも移入されて、反魂香の所作なぎも出來たやうである。近松翁の作が喧傳されたこゝは察しられる。

名優、坂田藤十郎は臺詞の上手な、辯舌の達人な人だつたらしいが、その能辯家の『村松』といふ狂言では、わざと吃の役を書卸したといふこゝである。この趣向を淨瑠璃へ移して「しやべり」の女房と對比した『吃又』がこゝに作られた。

この『村松』を演じた時の藤十郎の苦心談がある——。いつも能くしゃべる藤十郎が、今度は吃に扮するのだから、それだけでも見物の同情はあるだらうと思つてゐるに、初日には藤十郎が吃る毎に見物が笑つた。藤十郎はこれは自分の藝の至らなかつたからだ、凝こ工夫を重ねた。「明日からはきつ、見物を泣かせて見せる」——藤十郎は自信を持つて舞臺に立つた。あの通り見物は泣いた。そのわけを或役者が訊ねるに、藤十郎はかう答へた。「吃は自分で吃、いふことは能く知つてゐるのだから、人に聴かれても恥かしくないやう、成るべく吃らないやうに氣をつける。だが、嬉しかつたり、腹が立つたり、可笑しかつたりするに、つひ自分を忘れて吃るものだ。今日はその心得で演じたので見物を泣かすことが出来たのだらう」「併し始から終まで吃つてるやうに見えましたが……」その役者は首をひねつた。するに藤十郎は、「それは口の中では吃つても、言ふのは吃らない。口の中で吃るのだから、それだけ間を抜けばい、のだ」に答へたさうである。苦心談としては面白いが、餘りに實感に訴へてゐるのは、少しく本末を誤つてゐる。

又平に扮する役者の研究と用意とに就いて、小宮豊隆氏はかう述べてゐられる。「又平に扮する役者が必ず吃らなければならぬのは當然である。然し、吃るに云ふことは、思ふことが自由に表現せられ得ないに云ふことの名である。故に、思ふことを自由に表現することが出来ないに云ふ心持を表現し得る

ならば、何を苦しんで態々吃の發聲法の研究に浮身を費す必要があらうぞ。吃ることに依つて惹起される心持が主である。吃のことは抑々末である」に。吃又役者の好い参考だと思ふ。

◇

多見之助時代の、故多見藏の吃又は、津太夫あたりの本行を参考にしたのであらう。吃の表現はいかにも巧いものだったが、それだけ寫實に傾いてゐた。そして、愚直な男には見えたが、藝術家らしい處は見出せなかつた。

幸四郎の吃又は、いかにも師匠思ひな、いかにも木訥な人物には受取れたが、哀れさ、痛ましさはもう一息であつたやうに記憶する。總じて、後半が優れてゐるさいふのが、當時の批評の一致する處だつた。段四郎のも見たやうに思ふが、さうも頭に殘つてゐない。壽美藏のも懸命な演出だつたが、年配の若いのが、哀れさを薄くした。併し、藝術家といふ點から言へば、この優はさうらしかつた。雁治郎のは一度も見てゐないが、藝術家らしい風格は、恐らく此優が第一位に在りはしないかと思ふ。女房お徳では、多見之助の時の延若より、幸四郎の時の梅幸の方が、辯舌の點では劣つてゐたが、情合の濃やかな處が優つてゐた。

幸四郎、梅幸の帝劇所演では、例の元信の繪抜けの虎を幻燈で出したことが非難された。が、いつもの縫ぐるみも餘り好い圖ではない。あれは何ミか工夫したいものである。



芝居見たまゝ

中座初春興行上演

阿波十郎兵衛

二幕四場

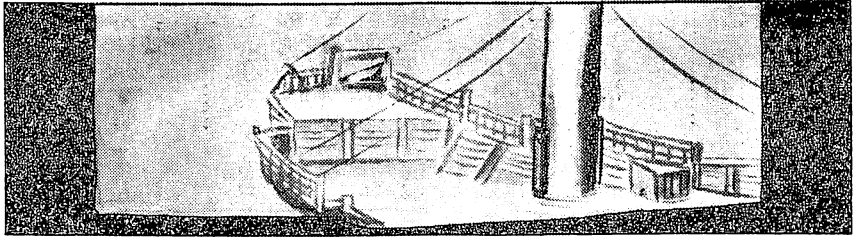
北村九泉子

上の巻(一) 祭禮の夜

徳川中期頃、阿波國板東郡宮島浦の眞言宗圓明院では今度新たに造営された金毘羅大権現の正遷宮の御祭禮で地車囃しや三味、鼓の音に踊り狂ふ群集が廣い境内も一杯であつた。

隣の津田村の船頭の彦助は此宮島村の人々が有頃天に騒いで居るのを見て忌々しそりに思ふて居る處へ十郎兵衛の従兄弟でありながら許嫁の女の事から十郎兵衛を内心憎んで居る用右衛門が少々酒氣を帯びて通りかゝつた。するに彦助は此踊騷も他村の知らぬう

まい汁を吸うての騒ぎだからキツト狸の化の皮を現はして見せるに壓味を云ひますが用右衛門はそれよりも自分を邪魔にする十郎兵衛の動きの取れぬ急所を握つて居るから一度は化の皮を引き剥がしてやりたい云ふのを聞いて彦助はそれを聞かうにします。が之れは金の蔓だから三いつて用右衛門は云ひません。彦助は用右衛門が子分に與へる金が無いのを見て出してやり、そして宮前で一杯飲うと連れて行きます。十郎兵衛の弟清左衛門、茂左衛門、清左衛門の妻お澤、船頭會一兵衛、妻おもよが話しながら出て來ます。其時踊り姿の船夫権右衛門、吉助が酔ひながら出て來たのに出會ふと船夫兩人は政所(庄屋)さんのお褒を村中有難がつて祝はぬ者はないと其徳を讃めて嬉びます。茂左衛門は江戸から正遷宮を拜うと歸つて來たがあまり村の人々からちやほやされるので氣が術ない話します。清左衛



門も同じ思ひで氣羞しい云ひ出しま
す。酔ふた權右衛門は兄弟二人共政所
さんの片腕、曾一兵衛殿は十郎兵衛様
の叔父甥の間柄、村の者は嬉んで禮を
云ふのは當り前でございます。云ふの
でかへつて皆當惑します。其時群集の
踊子は出て来て可憐に會釋する者、夢
中に踊るものなき口々に金毘羅の正遷
宮政所一つにた、へる音頭を囃し
ながら踊りすぎます。兄弟もあれや之
れを見ながら去ります。宮島、鶴島二
ヶ村の政所(庄屋)板東十郎兵衛は後の
杜の路より出て其様を淋しげに見送つ
て居ます、そこへお藏奉行祖上儀兵衛
が来てあの踊り狂ふ喜びの様はお身の
手柄をた、へる喜びぢや云ひます。
それを聞いて十郎兵衛は恐縮しながら
「それが辛うございませ、金毘羅様
私風情を一つに云ひ囃すあの詞、あ
なた様より御存知ない己の心の暗さ
に引當て、只恐ろしうございませ……
「お身の度胸にも似ぬ口上ぢやの……

「善いことには強く悪い事には弱いのが人の心の真でございます
す……

五年以前米不足で阿波淡路二ヶ國の領民が苦しみに陥つた時
命を投出した此大事を引受け上下俱に無事安泰に置いたのは全
く十郎兵衛の手柄であつたのでそれを知つて居る儀兵衛は十分
に十郎兵衛を賞めて居ますがそれが爲に御法度を破つた十郎兵
衛の心の内は、只男らしう手柄は手柄、罪は罪、世間の毀譽褒
貶には關しなかつたが今此華々しい踊りを見て愚に歸つて居た
と笑ひます。

彦助が来たので儀兵衛は思入れあつて去ります、一人になつ
た十郎兵衛を見て彦助は、十郎兵衛が他國積入米川口改め裁判
役でありながら柵目の多い肥後俵を積入れ半納樹で阿波俵に造
り更へ其洩米が石に七柵もあつてそれを二ヶ村の儲けにして居
る事を知つたから儲けを半分分けてくれ、罪は見事背負つて立
つと申しますが一向知らぬ聞きませぬので立派な證據もある
から聞かぬとあれば白州の砂の上で面を突き合はそうミキツト
云ひます。十郎兵衛は内心ギョツトしながら

「では公事沙汰に……

「恐しいか……

「ハハ、公事なりと訴へなりと心任せ、嚇しが怖ふて二ヶ村
の政所三川口吟味の裁判役が勤まらうか、十郎兵衛はこれで
も男の端くれぢや……

「その口上忘れるな……」

三助は怒つて去ります、あま見送つた十郎兵衛は不安な思入りに佇んでゐる所へお澤は走つて來ます。其後を迫ふ用右衛門が自分を遮るおもよを拂ひ退けながら出て參ります。

「邪魔さらす蹴殺すぞ……」

「兄様……」

お澤に絶がられた十郎兵衛は用右衛門を遮ぎつて女二人を逃がします。そして用があれば私が聞く、女を取らへて腕立てして耻は思はぬか云ふ用右衛門は

「何が耻、おのれの女子を人に取られ指を啣へて引込むほどの意久地なし、耻知らずの用右衛門ぢやない……」

「それほき耻を知る男なら、なぜ持ち崩した身性から改めぬ三十郎兵衛は意見します。

「やめてくれ、説法は聞きたうない、親と親との許婚を反古にしおつた……重ねく踏み附けられて俺の男が何處で立つ……」
「其口惜しさは無理ではないが、結びつかつた男と女の心と心はさうするごもならぬ……末かけて結び階かすにはぬぬ中

ぢや……」

清左衛門とお澤との仲を十郎兵衛が世話をしたのを用右衛門は憎んで居るから之れまで再々金を貰いで貰つてもそれは只他國米一件の口塞ぎ料位ごしか思つてゐません。此一件を金蔓ごして又々金の無心を吹きかけます。あまり再々なのに十郎兵衛も

一文半文出すべき理由はないと断ります。

「兄貴……此舌一枚の動き鹽梅では宮島、鶴島二ヶ村へきんな大悔嘯が寄せない事も限らぬのぢや……」

十郎兵衛は大いに怒つて、

「先祖代々此村に生れ……此村に生きてゐるおのれが今の口上、村の束ねをする十郎兵衛の前で云はる、詞か、さ、云へるなら今一度いふて見い……」

激しく話じります。さうしても三百兩の金を無心しますので
「身を立てるのは金よりも心ぢや……」

「金は土や瓦で作られはせぬ、かりそめにも三百兩、慾しくば金船へなご行くがよい……」

「金船へ……、よい事を教へてくれた、もう無心はいはぬわ……」
「思入れあつて早足に馳け去ります。

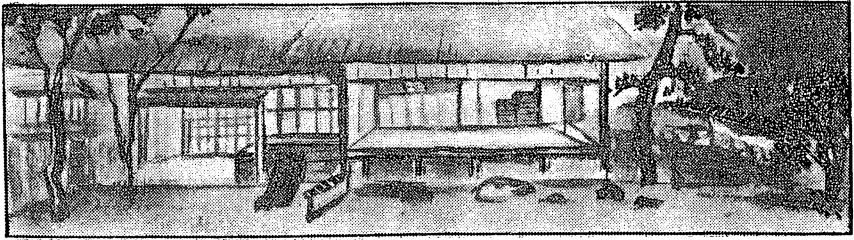
十郎兵衛は冷やかに見送つて居ますご下女お岩が俸甚六を背負ひ娘お鶴を伴うて迎ひに來ます。

「お父様、お迎に……」
「お鶴か、甚六も來たか……」

「お、さうか、二人共よ迎ひに來てくれた……」
甚六を抱き上げます。

大勢の踊子が出て「政所さんぢや、有難うござります」
ご十郎兵衛の前に舞ります。十郎兵衛はハツト氣をかへて、

「お目出度正遷宮ぢや、皆、賑やかに踊らつしやい……」



一同起つて正遷宮ぢや祭禮ぢや賑か
に踊り出す……
——暗轉——

(二) 和田の岬

阿波國小松島灣外和田の岬の沖合、
下手より上手一ぱいに百石積程の帆船
空には暁近い弦月が低くかゝつて居
る。

「おーい、宮島丸、曾一兵衛さんに急
ぎの用がある、帆を下してくれ、お

ーい、おーい
船上には吉助、権右衛門が帆をおろし
て居る。舳梯を孫平次、半八、加治兵
衛、實兵衛、用右衛門が攀ぢ登つて現
はれます。

「私に用があるさいふのは誰ぢや」曾
一兵衛が出て来る、用右衛門が用があ
るのは俺ぢや、曾一兵衛に大阪の間屋
から受取つて戻つた金を借りたい。詰
じりですが金は皆延手形ばかり。斷り
ますのも聞かずに腕づくにて。お互に
舶夫は斬合ひを初めます、船頭が斬倒

され曾一兵衛も重傷を負ふて倒れます。

勝た誇つた用右衛門の一味は金箱を探しますが金は見つから
ない、箱の中は手形ばかり、

「では曾一兵衛のいふたが眞實か……

「人非人め、この怨み忘る、な……

曾一兵衛は睨みながら落入り、用右衛門は愕然として身を退
きます。

下ノ巻(一) 十郎兵衛の住居

——幕——

二重屋臺、中央十郎兵衛の居間、正面床、長押し鎗、棒なご
懸け、机、手燗、帳簞笥なご置く、下手は次の間、正面向ふに
玄關、二重の下手は廣き土間、いづれも夜の體、行燈を點じ、
手代三人は主人の歸りを待ちながらいづれも心配そうに彦助が
起した公事の成行についていろく話をして居る、そこへ仁藏
が先に戻つて公事の様子も案づる程ではない。十郎兵衛の言葉
を傳へた、弟茂左衛門は明日船出の支度をすまして公事を案じ
ながら戻つて来た。十郎兵衛の妻お弓は夫の身の上を案じなが
らお澤やおもよこ曾一兵衛の災難を悲しんで昨日にかはる村や
我夫を案じながら

「此春、金毘羅様の正遷宮の折はこちらの十郎兵衛殿には神様さ
同じやうに云離され、一門一家肩身も廣ふ世にこれほごの果
報はあるまいと思ふたに、ほんに世の中の事ほご分らぬもの



はござんせぬ……
ミ歎、ば茂左衛門も此春の仕入に戻つた時は樂しう参詣しましたのに……ミ一家の今の身の上をかこつて居ます、そこへ十郎兵衛ミ清左衛門ミは歸つた體で這入つて來ました。夫の顔を見たお弓は

「嗚お勞れでございませう公事の様子はどうでございました……」

ミ、十郎兵衛の沈んだ様子を見て問ひました。

十郎兵衛は思案の體で只首肯くばかり、傍にはお鶴をはじめ兄弟一同只無言のまゝ居ります。清左衛門は今日の村の寄合では公事の對手には政所の代りに命を差出す誰も彼れも申しさ云ひます、お弓は側より村の衆さへそうちやもの家の者は皆一つになつて覺悟はしてをりますミ女ながらもまさかの心を話しましたので十郎兵衛も嬉んで

「よふいやつた、五年以前祖上様のお

頼みで大事を引受けた其時から十郎兵衛夫婦の覺悟はしつかり極つてある筈……

「いざごなれば命を投げ出す心を示しました、我子のお鶴ミ若いお澤を奥へさらして

「今度の公事は元々彦助の慾さくづく……其下心は兎も角も表面は理屈が立ちこちらのはがれぬ御法度破りさうで今度は十が十まで勝目のあらう筈がないのぢや……」

之れを聞いて兄弟はじめお弓も十郎兵衛の覺悟を知りました。そこへ仁藏の案内で祖上儀兵衛が這入つて來ました。そして今度の公事は勝目はなく共負けぬ分別がないでもあるまい、よい分別がありそうなものぢやミ其勘考を促します、其時用右衛門は出て物蔭に忍ぶおもよは儀兵衛より曾一兵衛の下手人は四人まで召押りになつたのを聞いて悦んで歸る。儀兵衛は歸る仕度をし乍ら茂左衛門の歸國は仕入もすんで明朝江戶へ出船をするミ聞いて

「江戶は諸國雑多の人入りで世を憚るものなぞには究竟の忍び場所、いや十郎兵衛お身も弟ミ一所に江戶へ下つては見やらぬか……これは餘談ぢや……忍びの事じや……」

ミ清左衛門に送られて去ります。お弓は

「旦那殿今の御談合慮外ながら……お國の爲、御領民の爲でなふては叶はぬ大切なお命ぢやミ仰しやつてございました……此土地から身をのがれて……」

「茂左衛門も側より

「身の立つ勤考はそこでごさいませう……なア兄者人……

「十郎兵衛は始めて口を開き

「お國の爲、村の爲に茂左衛門、そら一一緒に江戸へ行かう……

「祖上様の御心盡じや、こりや弟、明日の出船を繰り上げ今晩

のうちに船を上ぐる用意をしやれ……

愈々、船出に決つて茂左衛門は其用意に走り去る。十郎兵衛は

文庫を出し肥後米積入書附を具足櫃に入れる様に「お弓に櫃を

持ち來さします。突然、兄貴も用右衛門は這入つて來て一緒に

船へ乗せて江戸へ連れてくれ頼み込みます。十郎兵衛もお國

の害をのぞく爲に承知しますので用右衛門は嬉んで去ります。

「出て行く、後にはあはれ十郎兵衛、重なる思ひ一時にほつ

「ミ太息をつき出す圓明院の鐘の聲、こなたも積る憂きこも

の、思ひに重き具足櫃、お弓は漸々運び出で……

「今鳴つたは九ツの鐘、もう落着いてはゐられませぬぞや……

「その鐘櫃の底へ此書附を、茶の間にあつた蕙の葉を上から詰

め、大事な書附に虫の附かぬ要領をして置くにせう……

「その書附が世に出る時はお前の身體も世に出る時、何卒一日

も早うそのやうになりたいものでございます……

「涙見せじミ顔反向け取出す具足打見やり

「此具足には御先祖の魂が籠つてゐる。その大切な家の寶も

守護されず國遠せねばならぬミは……

「聞いてこなたはせきくる涙……

「昨日までも、今日までも村の寶よ生神よこゝろあがめられたに引

替へて、忽ち變る此落日嚙口惜しうござんせう……

「歎けばさすが男氣も忍びかねたる一トしづく……

「祖上様の仰の通り死ぬは易く生るは難い、阿波二十六萬石の

御領民に代る大事な命、何のむざも捨てやうか……

「さうぞお前も家の事、兄弟衆や子供の上慮外ながら私の心

も思遣つて下されて……旦那様……

「御大切にミむせ返り落る涙は篠原や具足の小手にはらく

「ミ霞たばしるばかりなり……

具足櫃に書類を詰めながら夫婦は別れを惜しんで居ります。

此時下手奥に慌しき人の氣配するので、十郎兵衛は慄然とし

て、具足櫃の蓋をする、清左衛門は急いで這入つて來ました。

「祖上様のお心精しう私が談んで來ました……

夫婦はほつミ顔見合はせて肯首きました。

(廻る)

(二) 吉野川堤

阿波國板東郡宮島浦、吉野川の畔。

松並木の堤が上手に延び堤の後方は青茂る積ミ廣大な吉野川

の川口、弦月低うか、海へなだれ入る。

「玉よする浦曲の風に空暗れて光をかはず月代もおのづこ老

けし秋の色、人のさだめミ落らて行く名のみ吉野の川水に

ひびく千鳥の啼音さへ我身の上ニ果敢けれ、こゝに宮島の十郎兵衛は身一つに二つの村の浮き沈み、覺悟はしても追なほ斷つにたゝれぬ愛着の胸は無明の暗の道……
旅仕度に身を堅めた十郎兵衛は靜かに出て來ました時、又向ふより出て來たのは津田村の彦助です、そうして兩人は不量、顔を見合はせました。

「や、十郎兵衛……」

「お、彦助……」

「明日といふ公事を控えて何處へ行く……」

十郎兵衛はハツトしたが氣をかへて

「急用あつて徳島まで……」

彦助は聞いてセ、ラ笑ひました、そして川一つ越した徳島へ行く位に旅支度の姿さひひ、下人手代も連れず、無提灯さひひ、これはつゞき、逃げる氣だなき彦助は考へて、
「いや逃るのだ、あすの公事が怖ろしさに逃るのだ、……あすの裁きの期を延ばして手をつき裏から廻はし今度の公事を握り潰させる心であらう……假そめならぬ御法度破りの大罪人だ……お上の手を借り草を分けても引摺り出す……公事は此土地ばかりに限りはせぬ、天下のお膝元の江戸もある……大阪には御城代もあるぞ……」

彦助のあまり暴若無盡の詞には十郎兵衛も肝にこたへてせき來る怒を忍びながら

「こりや彦助、公事も争ひもわれぬ俺の私事、公儀へ持出しお國の大事、殿様の大事となつたら何にする……」

しかし彦助はそんな事は元より假令阿波二十六萬石峰須賀様が潰れ様も私慾の爲には願はず、元々阿波の國は三好が滅び長曾我が部が潰れて今の峰須賀様の御領地となつたので國の住民には誰が領主にならうとそう大した事でもなく中にも彦助は私慾の爲には意地でも公事に勝たねば置かなかつた、迷けることも勝手にさらせと言ひ捨て、行かむとするを押止め

「待て、そりや本心が、いや詞の意氣張でいふのであらう、おぬしてて根が愈さくづく、仲間へ入れい儲けを分けいといふ

た事は忘れはすまい……」

十郎兵衛はなだめましたが彦助は白州の上へ坐つたからはわれか俺れの首が飛ぶか、命がけじやこ意地から十郎兵衛を苦しめました。最早、十郎兵衛も返す言葉もなく思ひ餘つて絶體絶命、根強き言葉、振切る袂、早やこれまでさ抜く手も見せず、月にきらめく水の刃……

「彦助、覺悟せい……」

「おのれ……」

十郎兵衛は不意に彦助に斬りつけた。

彦助は手負ひながらも斬合ひながら二人は激しく争ひ續け上になり下になりて十郎兵衛は彦助に組敷かれ跳返す機みに兩人とも堤の向ふへ轉け落ちました、『ウーン』と悲鳴が聞えた時十

郎兵衛は髪ふり亂しながら片手には血刀をさけて堤の上に現はれました。其時堤の向ふより船唄が聞えて來ます。

唄へさまが船かや、小松島沖に、のう のん 小松がくれに
やん、帆が見ゆる……

「お……三十郎兵衛は耳を傾けながら

「命を招く船唄に引かれて心も夢うつ、駈出せしが……

慌たどしく聲する方へ行きかけて遂らひ堤の下の死骸を見て思入れ、一旦拾ひ集めた笠も引廻しも投捨てた十郎兵衛は何か心に決しました、其時出て來た忍び姿の急ぎ足で近づく怪しい男は用右衛門でありました。

船唄相圖に出て來た處が十郎兵衛はもう用はないといつたので怒りながら自分で何處までも逃げて見せる三濱の芦間がくれに去りました。

「夫の命ミ張詰めし妻は心の梓弓、ひかれてお鶴もかけはだし……

お弓はお鶴を連れて走り出て來ました。

「船はまだでござんすか」三問はれて十郎兵衛は「其船よりも十郎兵衛が命をあゝの世へ渡した舟、あれを見てくりやれ……」云はれてお弓は月かけに草むらをすかして見れば人の死骸に驚きました。

「公事の對手の彦助、引かれぬ意地で手にかけて、素より命はないものミ覺悟しながら其命の捨場に迷ひ、一寸逃がれに生

きやうとした淺猿しさ、……彦助の退引ならぬ詞の底から初めて命の捨場を知つた……

三十郎兵衛はもう決心しました、人殺海賊ミ汚名を被て死んでも村やお國の無事安泰に導いたのは此上もない歡びであつた。

聞いてお弓は夫の覺悟の悲さに湧き立つ涙で咽んで居ます、十郎兵衛は絶る娘のお鶴を抱きしめて只泣くばかりです。

祖上儀兵衛も出て來て不圖、死骸を見ました。

船唄の二度の相圖に清左衛門が馳つけましたが兄の覺悟を聞いて驚きました。そこへ用右衛門は高小手に縛ばられて來ました、其未練な言葉に十郎兵衛は我から海賊の頭人殺の大罪人ミ名乗つて涙ながら儀兵衛に繩を打たれました。

「血を吐く思もお家の爲、命を捨てるもお國の爲……

捕手は用右衛門を引き立て、去りました。縛ばられた父に娘のお鶴は縋りました、其時三度目の船唄が聞こえて來ました。

「二度の相圖を三度まで……

「船でもやつぱり諦められぬミ見えまする……

「諦めてこそ心の船も輕う浮ぶ、十郎兵衛には早渦巻く鳴戸の波もない、いざお役人様……

「早入る方の月代や、今を限り……

十郎兵衛は捕手に引かれて去るのをお弓、清左衛門、お鶴等は只悲しい思ひくりに去り行く影をいつまでも見送つて居りました。

將來に對しての強い暗示

仲 木 貞 一

築地小劇場が、近松の「國性爺」を新様式で演出した事は昭和三年度中の特筆すべき第一事項である。舊劇中でも形式のしつかりきまつた古典の國寶とも云はるべき物を、斯く新たなアレンジするに云ふ事、それに對して、藝術の冒贖論を云ふ者がある。それは、藝術至上主義者の云ふ事である。藝術の爲の藝術的立場からは、この論は當然の事で、在來の「國性爺」を、凡て新たな演出に於てせよとの事であるなら、それは、何人も反對して抗議を提出するのが當然である。然し、藝術の爲に人生があるのでなく、人生があつて藝術のある事を考へたなら、今日の生活が何のやうに、新たに演出する事も亦必要である事を考へなくてはならない。現に蠟燭の灯に照して見る所に藝術的の光彩を放つ所の舊劇を、電燈の下に明々照し出す今日の演出上の一改變は、最も舊劇の神聖を犯すものに云はなくてはならない。だが、今日の生活者からはそれは已を得ぬ改善と見做され、是認されてゐるやうだ。我々の希望としては、舊劇は凡て蠟燭の下に演出するやうなその特色を特色としてその儘大事に保存するに同時に、今日の生活者に當てはまるやうな演出の物もあつて、と思ふ。

即ち、一方は全く鑑賞の爲めに見るのであり、一方は娯樂——生活上の糧——の爲に見るのである。一方は有閑階級の人が銷閑の爲に、又は一種の研究の爲めであり、一方は、勞れた頭を休めて其所に新たな活力を得る爲である。目的が甚だ違ふ。正反對である。酒飲に菓子と與へる事が無意味と同様、菓子には菓子と與へる事を、興行者も爲政者も十分考へるべきである。能を立派に保存するに同意義に於て、最早今日では舊劇を桐の箱にちやんち收めておいて、そして、實用に供する、生活の爲の芝居に云ふ物は、別に作らなくてはならない。舊劇を少しづつ、段々破壊しつつある今日、それを全く新たな様式に於て築地小劇場が演出して見せてくれた事は、様々の意味で、昭和三年度の劇界に一大センセーションを與へた物に云へやう。但し、この演出ミアダブト振りミが今日の生活に直ちに當はまるや否やは別の問題である。従つてこれが模範であるに何とも云ふ事は出来ない。只靜かな水面に投石して波紋を起したのである。

演劇の保存は、全くブルジュアの力に負ふべきである。彼の能が然うであつた。又舞樂の保存されてゐるのも、それが

民衆の手に歸しなかつたお蔭である。だから、今日の舊劇も民衆の手から取上げる事が最も必要である。然し、民衆は演劇を要求する。何物かを興へなくてはならない。今日は、その悩みの時代云へやう。最少し前迄は舊劇が然うであつたが、今日の二十代三十代の社會の中心になつて働く者には最早夫等はその儘に娛樂たり得、それを十分に享樂するべく豫備智識なり、その劇の時代相や習慣なりを知らな過ぎるし、又それを知る事を、今日の生活では全く必要しないのだから、それを強いる事は不可能である。又嘗ては新派劇云ふ物が、民衆娛樂の對照であつたが、今日では、それは餘り舊劇の延長と見做される事になつたから、矢張りそれは、民衆の生活とは何等の交渉を持たなくなつた。其所で、これからの民衆の持つ芝居は、何うしたらいいか？それが問題である。舊劇に關係を持つ人々は、昭和三年度に於て、その索りを行つた。随分もだえ苦しんだやうだつた。或はテムボを速めた喜劇を示したり、社會意識を扱つた物をやつたり時代思潮を批判するやうな物や、階級意識の物や、心理的解剖を試みた物等を、皆試験的に演出した。然し、相當の效果は擧げ得たやうだが、全く民衆を支配する迄には到らなかつた。

羽左衛門は歸朝して、開演時代の改良を叫んだ。たしかに民衆は、時間云ふ點になやまされてゐる。然し、それより最つと重大な事は、見物する料金である。それを低減しなくては、一般民衆は、西洋人のやうに、月に數回芝居へは足を

踏み入れる事が出来ない。その低減の爲には、俳優の給金をもつと低くせねばならぬ。大臣や會社の重役以上の収入を取つてゐる彼等は、全く生活以上の収入を取つてゐる。これを改める事は、ロシアのやうに國營芝居にせねばならぬのは知れぬが、今日のやうに不景氣の際に、自然的にその解決も出来さうに思ふが、遂に昭和三年度にその端緒すらも見出し得なかつた事は、殊に遺憾の事である。

次に、劇の内容問題である。從來芝居は人情と義理とのせめぎ合ひ位がいゝ所とされたが、社會生活に目醒めた近代人には、只それだけでは満足出来ない。彼等は其所に何等かの理智的な對社會問題の批判を要求する傾向となつてゐる。それは極くく、他愛もない笑劇や喜劇に對しても、そのやうな内容のある物を喜ぶ。これが露骨でなく巧みに奥に隠されてある場合、見物は、自らそれを芝居の中から掘出す事に興味を持つものだ。砂中から蛤を拾ふの快き同様である。作物の内容に關して、作者はそれ／＼十分の考慮を拂ふやうになつた事は、慶賀に堪えない事である。然し、此所にまだ非常な物足りなさがある。それは、意表に出る新しき演出上の試みである。築地の芝居は間々その點で成功してゐるが、在來の違つた、見物をアツミ云はせる破天荒の演出が舊劇及び在來の芝居方面には殆んぢない云ふ事である。これは、民衆を喜ばせぬ事となる。云ふのは、世の中が段々平凡に整つて、社會組織は段々機械化され、吾人の生活は、全く機械の奴隷と云つてよからう。我々は、この機械化に飽々してゐる

し、最つミ飛躍的な事を心の中に望んでゐる。だが、我々の生活は十年一日の如く、決して大金持にもなれないし、偉くもなれぬ、平々凡々に生活にあえいでゐる。その發達は、何かしらアツミ云はせる物を望んでゐるが、相憎く議員や官公吏が悪事を働いて引くゝられる事の新聞記事が、たま／＼氣の變つた快感を興へる位で、外にはたまけるやうな何物も日常生活にない。然うした異常を求めゝる爲に劇場に赴く事も、觀劇心理の内から拾ひ出せるのである。だから、劇中に曲藝的動作のある事は、古來の演劇がこれを實示してゐる。所が十九世紀末の過つた理智化からその要素は取去られて、今日舊劇に於ける立廻りののろまさ加減は何ミ云ふのだらう。満足にこんほの切れる馬の足は居なくなつた。だから、素人上

舞踊劇その他

りの怪しい劍劇團體が梯子の上から轉け落ちる危い立廻りをやつて客を呼んでゐるのだ。斯うしたアクロバチックな要素が劇の決して中心でも何でもないが、劇を面白く見せ、民衆の勞れた目を喜ばせる爲には必要な物である。これと同時に然うした外面的なスペクタラーな部分に對する研究は、まだ少しも考へられてゐない事は、残念な事である。築地三澤田の新國劇ミが、いさゝかその方面に考慮を拂つてゐるらしいのは、まだしもである。在來の劇場や團體では、餘りに古い傳統に縛られ過ぎて、手も足も出ぬ事は全く氣の毒である。然し、最早然うした方面にも注意を向ける時期は來てゐる事を、本年は暗示したのであつた。

永田龍雄

——こましの芝居で興味の深かつたものをあけて見て呉れませんか。

——芝居のこまならほかに語る人がきつさりあるでせふからわたしは舞踊のこまでも話させてもらひませふか。

——で、こましの舞踊ではなにが。

——まあ、待つてください、いつたい芝居の批評でも感想

でも所作事なきになるままるではかのものを扱ふやうな冷たいもてなしをうけるではありませんか、たと踊りぬくだまか綺麗首がなんミかしたまか、新聞評などになるミ二行か三行でさらさらしたものです。

——さうですね。

——あれでは舞踊家は可愛想ですね、最も俳優が舞踊家を

兼ねてゐるからい、でせふが、さうでないご納まらないな。

——日本ではい、わけですな。

——ここが俳優のほかの舞踊家はやはりさうした一、二行組でやられるのですよ、可愛想ではありませんか、榎茂都陸平の舞踊でも藤間静枝のでも花柳壽輔のでもさうですよ。

——なるほご。

——一國の批評がこれでは舞踊家などのすぐれたのはできません、多くさうした野望ある青年は小説家にもなるでせう大衆向のね。

——ここらでこさしの舞踊で。

——わたしは春の歌舞伎座の菊五郎、福助の『舞踊小品四種』をあけます、あの舞踊は古きもので新鮮でした。

——言ふわけは。

——田中良君の舞臺装置がすぐれてゐたからです、田中君の舞踊舞臺装置はい、のこわるいのこあるが、あれはい、ものです、わたしはあのなかの『黒髪』の装置なごも新らしくて舞踊の邪魔にならぬい、装置だご思ひます、『黒髪』は情怨そのものですね、上方の匂ひの濃いもので、京都ではわたしは地唄で見ましたがあ、言ふ廣い舞臺です情怨の趣がごこし消えます、それにいくら福助でもほんごの京女にはかなひませんや。

——京女にいやに肩をもちますね。

——『子守』はやつぱりよかつた、音楽もびつたりしたものです、ごきには音楽をひきずりますからね、菊五郎の舞踊はほんごの舞踊藝術だご思ひます、生き生きとして人即藝術が

彼の舞踊に見られますものね、日本の傳統舞踊をあ、イヤ味をもたずに踊るごきは人間にイヤ味が無いからでせふ。

——所詮は舞踊は人間が出るのですな。

——さうです。

——それからほかには。

——『小品四種』が晩春の舞踊藝術界での最もよきものごして秋では帝劇の『船辨慶』でした。わたしはあれを六遍見まして、梅幸の靜、後シテの幽靈、ごもに氣品壯絶たるもので、わたしは梅幸の舞踊がすきです、『羽衣』にしろ『濱松風』にしろ『お夏狂亂』にしろ皆愛します、『十種香』や『お富』以上に愛します。あの舞踊の人物の氣品を香氣を、梅幸だけの大きな舞踊の香氣をもつて居る舞踊家は絶無ですな。

——やつぱり人間ですか。

——さうです人間です、人間が偉らくなくてはだめです。

——さうなるご人間論——人物評になりますな。

——人間がすぐれてゐるから舞臺が光るのです、これはあたりまへのごごです、歌右衛門の藝術がそれでせふ、こんなごきは言ふだけ野暮です、ごきに舞踊は人間がすぐれて居なくてはごせつて神品を味へませんよ。

——で、ごさしの舞踊界はこのふたつですか。

——ほかにもありますが、わたしはこの春秋のふたつの舞踊をあげます。『船辨慶』の後シテの幽靈は力が乏しかつたごきは病後の梅幸ごしてはしかたが無かつたでせう。

——劇では、いや芝居ではなごでした。

——わたしは澤田正二郎君の芝居を興味深く『僕たちの時

代』の芝居をしまして見ます、『阪本龍馬』など『星亨』でもすべ
てわたくし達のものにして親しく見るのです。型がぎうのか
うのミヤカましく言ふ歌舞伎狂言を見るミ肩が凝りたくなり
ます、そこへゆくミ澤田君の時代の芝居がわたくしきもには
最も合致するこゝになるのです。

——『築地小劇場』は。

——わたしはわりに『小劇場』を見ないほうです、金を出
さなくて見られないからですよ、は、は、は。

——は、は、は。

——『國仙翁』は演出者の博學がたゞりました。

——『大寺學校』は。

——これはい、『たのむ』もい、あのアトモスフイヤア
が出たこゝはたしかにい、今春はメスフィールドの『忠義』
ださうですが、明治座のミきの音楽をうけもつた杵屋勝四郎
が死んで居るこゝをいまさら悲しみます。打入のミきの足音
の音楽などは勝四郎の傑作ですよ、三味線音楽の傑作ですよ
こんざは山田耕作君の新らしい音楽ですよ。わたしは築地に
木下奎さんの『南蕃寺門前』を演つてもらひたいです。

——靜枝さんはいま。

——パリでせう、なかなか勉強して居ますよ、あの女はき
こかヒステリックだが偉いところがあります、送別舞踊界の
『浦島』などは骨法がもう枯れきつて居て實にうまい舞踊でし
たよ、新舞踊界の女性にもう二、三人これだけの人物が居れ
ばいいのだが。

——ほかに。

——居りませんよ、靜枝ひりりですもの、歸朝してから菜
ッ葉服などを着て構成派の舞踊などをやられてはたまりませ
んが、外遊は彼女にまつてい、こゝです。たゞいいこゝです
ミ言つて置きたいのです。

——家傳女悦丸を吞ませてはいけませんよ。

——それあ志道軒の講釋でせう。わたしのはいつでも舞踊
講釋の下手の長談義で恐縮です。志道軒の言葉をかちて言へ
ば、その時代に流行るものは圓本、金持、女の子、ダンスに
ピアノに洋行のたぐひなれば龍雄氏の説く珠の夜光なるを
知らずえへん光焰万丈ですよ……さうも舞踊藝術には女の子が
發展して呉れぬこゝまるのです。

——帝劇の女優の舞踊劇は。

——さうも女の子でもあの舞踊はこまります。彼女たちに
こゝに藝術的良心がありますか、あすこの舞踊はゾオドビル
ダンスです。安來節のをさりのほうが野蠻なあぢ性的魅力
が豊かにかへつてい、です。

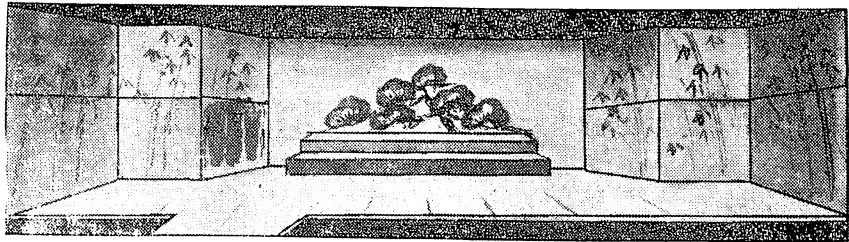
——左團次の歸朝芝居は。

——『毛刺』に『一代男』い、ならべかただ。だがふたつミ
も妙に艶つけが足りないですね。たいへん必要であるこゝ
の艶つけが足りぬのはさうしたわけでせう。

——あぶらつ氣ですね。

——艶つ氣です。

——光澤あぶらですよ。つまり、それがぬけて居るミわた
しは思ひます、お二方ミも改編者があぶらけが無くなつた
めですかね。



中座初春興行上演

岡鬼太郎作

當

世

智

(一場)

津守凡太郎

太郎冠者の拵へで、都のさる長者の家人左近が白い布包みの箱と生れたばかりの嬰兒を包んだ絹布の包を両手に提げて出て来る。

『借々情ない事でござる、都に名だゝる長者殿の家人ともあらう身が、月に四五度の偶々の休み日に氣の向くまゝの骨休めもならず、斯様に女房どもに連れられ買ふた物は持たされる、幼い者の守はさせられる、唯もう女共の爲めの生き巾着でござる……こんなことなら今度生れて来る時は女に生れて来るに限ると、愚痴交りの述懐がある。

彼左近の様子と述懐とを見て居ると、成程……人生男と生れる勿れ……の感を深くする、そのうちに包みの裡の嬰兒が目を醒して泣き出す。

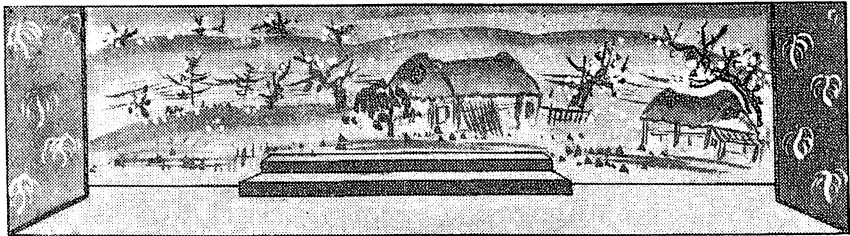
途中の事でお乳の用意もないので、無器用な格好で左近は子供をゆすぶりながら、あやす、子供は益々なく、左近は困り措く……とところで、借も都の花菱く梅

ケ香に酔ふ鶯の……の長唄になり、身も心も浮きくとして妻の米子が出て来る。

「誰やら大の男が、途上に立ち開かつてうろくする笑止やと見たれば、こちらの左近殿、サア早く賺やして眠らしてしまひなされ……と一喝されて夫の左近、無理な奥様だとは想ひながらも、連れ添ふ女房、しかも平素の御氣性を知つては、口返答もしかれて、片手には風呂敷包、片手には泣く子供……進退正に谷つて、今は早や親の方が泣き出しさう。

米子は言甲斐ない夫の様子を見て「何處の家の亭主でもこの位の事はして退けるが當世、些と男らしいなされい」

都に名だゝる長者某の家人でながら妻米子の前には更に顔色なし、然しさすがは左近も男一匹「古より俚諺にも云ふ通り藁で作つても男は男……左近先生にして此の言葉ありとは、世の男たるもの、つくく頼母



しくも有難いといふものだ。

がしかし「衣體の知れぬ藁細工は火の用心が悪くならぬ……」(米子さんの稟とした言葉に、観客席にはドツと笑聲が起る)然し、敢て云ふ世の男子たるもの決して笑つちやいけない、少くとも茲に於て始めて女子と小人は養ひ難し——といふ事を明かに體驗したといふ様な顔をしなくてはいけない、男子たるもの、體面上私は敢へて次の左近先生の態度に共鳴する。

左近先生は、即ち、賢夫人を一足先にかへすと、仲人の頼母夫妻を訪れる、しかも、彼は素晴しく緊張した心持ちで米子離別問題を携へてゐる。

「それつくゞ」と惟れば、朝は已刻頃、起きれば鏡脱み合うては又小半時、髮梳く眉描く黒子描く、筆の命毛短しと、歎つ日却の南窓、膝押遣れば乗物の、ソレお支度よ、お履物、送られて出る先々に買物観物聽物の中にも心うつし繪や、舞ひの集々唄の會、湯の會茶の會飯の會、人を求ひの善根も柄のない所に柄を加げし、これど杓子の帆立貝、眞珠の貝のたまゝも、受け切れぬ事では御座りませぬ……」

様子を聞いた仲人の頼母夫妻、今日途中での一部始終から其他の様子を詳しく聞いて、三人寄れば文珠も及ばぬ智慧袋のありつたけを傾けて、左近先生離婚問題可否の考究……。

そんな事とは知らない米子夫人は、婚殿左近先生の意氣地なさに、今日こそはほとゝ愛憎をつかし「道

傍の敷を蹴つてもあの位の男の二人や三人すぐにも蹴出される……といふ世にもすさまじい鼻息で、これ又仲人夫妻を訪れて離婚の肝煎りを依頼する、米子がふだん石神を信ずる事を聞き知つて居た仲人頼母夫人小笹は「餘事と違へば、今夜密と參詣して、神意を伺つて見たら……とすゝめる、米子も成程と思つて石神様に參詣する事にして辭する。

さるほどに一方左近先生、これも三人もして成した文珠の智慧の賜か、石神に先き廻りして、俄造りの南無石神大明神

「機嫌とられて添ふて來た、子までなしたる夫婦なか、一人かくある朝夕の續かば如何に我が心……と、さすがは女心、いざとなつて二夕道に迷ふ米子夫人の隙に乗じて、左近先生あくまで石神になりすまし、「善い哉、善い哉、汝今までの行を改めて、棄を慎み良人大事、我が子大事と誠を盡す事ならば、此の縁長う守りて得ささう。

「あら有難や、然う御利生のあるならば……米子夫人はすつかり尊い神威に打たれて心機一轉。

◇ ◇

左近殿これこそ、米子殿が信心の功德……と仲人夫妻はしたり顔にて

「祝ひ納めに被ぎの衣の……と長唄になり、買物の包の中より取り出した絹を綾に取りながら、賑やかな振の中にハッピーエンドとなる。

特別通信

佛蘭西たより

宮島 綱男

一、今陽、パリ市ブローニュ

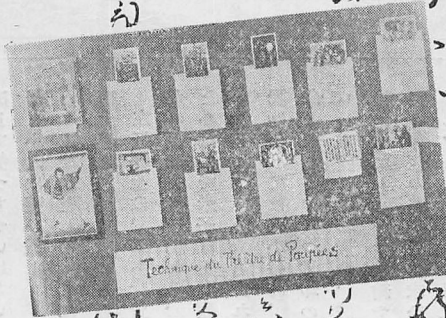
大公園傍オートル

ヂュ、モントパネル部

一、今陽の

カニ

カニ



他の資料

この

この

この

この

この

この

この

拜啓益々御健勝奉慶賀候小生幸ひに無事乍憚御安心被下度候陳ば夏中萬事靜態に在りしパリの都も本月初め頃より漸く活動の季節に入り所謂パリのセーゾンに相成申候此時に當り先づ第一回の仕事として左記演藝展覧會を相試み候處異常の盛況を呈し我國演藝を海外に紹介する上に於て甚大の効果を收め候ものと確信仕居候

一、會期 十一月十九日より廿四日まで

一、會場 パリ市ブローニュ大公園傍オートル、ヂュ、モントパネル部(室數三)

一、會の内容

第一部 文樂の人形芝居に關する寫眞、版畫、その他の

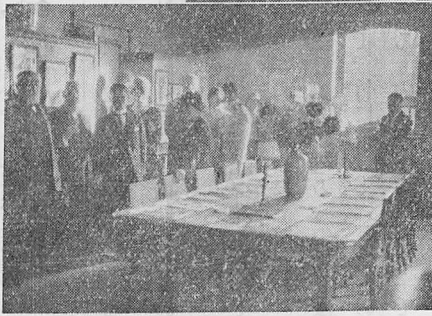
資料

第二部 歌舞伎に關する寫眞、プログラム、その他の資料

附屬として能樂に關する資料を展觀

第三部 文樂に關する活動寫眞(これは特に賞讃を博せ

り)



尙十一月二十日招待日に付各方面一流の紳士淑女多數來觀、その内主なる人士は前海軍大臣ランドレー氏夫妻、前勞働大臣ゴダール氏夫妻、國立劇場コメデイー、フランセーズ付名優ベール氏夫妻、クロード大使令息ビエール氏、パリ大學正教授アカデミー會員ツリユシー氏夫妻並に令嬢當地にて近代作曲家として有名なるミヨー氏夫妻等に御座候右展覽會の寫眞六種十枚御高覽に供し申候

上述の如く第一の經驗意外の好成績を收め候に鑑み來年小生歐洲再遊の節は（小生一度歸國來年四五月頃再び當地に參ることに相成候）尙多數多種の材料を持參一層盛に致度今より思考仕居候

幸ひ當地に來合せしクロード大使に文樂に關する一文を依頼致し承諾を得候間アメリカより尊臺へ直接送付致されられ候筈に相成居候又ジョツフル元帥も今月末歸巴の筈に付病狀許せば面會所感を求むる心算に有之候先は右御報告申上度如此御座候

敬具

十一月廿六日

宮島綱男

白井尊臺

二仲 來年小生歐洲再遊の節は尊臺も是非御出かけ相成候様今より御勸め申上候前記前勞働大臣ゴダール氏發起にて來年六月當地にて當分人形芝居大博覽會を開催する事に決定相成居候御含み置被下度願上候

若者よ汝の名は鷹治郎

日 比 生

昭和三年度に於ける、わが中村鷹治郎君の總決算を行つて見やうとするのだが、下手な算盤を弾いて見るまでもなく、一言にして盡してゐる、曰く、若かりし鷹治郎である。鷹治郎を口にするものが常に云ふところのこの言葉は實はもうあまりに古くさい、鷹治郎ミ若さ、は對句であつて、竹に雀、梅に鶯ほぎの月並である。尠なくとも昭和三年の鷹治郎を云々せんとするもの、筆にすべき文字ではないのだが、而かも、それを何うすることも出来なくて、やつぱり、若かつた鷹治郎、さいふ結末を先づ書き出さねばならないことになつてしまつた。

ところが、鷹治郎の若さ、を云うものゝ多くは、相變らず美しい、長ほんや中ほんより若い、洋服を着て歩きやはる、舞妓ハンを呼んで遊びやはる、ステッキを持つ、なぎ、珍らしくもないことを、さも大業に云つてゐるが、私の云ふところの、鷹治郎の若さ、はそんな甘口ではなく、もつこ大眞面目の鷹治郎の若さ、を云はうとするものである。だからすこし理窟さくて、成駒家を論ずるには、恰好の言葉で無いかも知れないが、如何に八方が專賣であるところの鷹治郎にしても、一面には關西劇界の代表者、技藝部委員長、なのだから、これから私が云はうとするところの大眞面目が、あなたが當て嵌まらないわけではないと思ふのである。

私の云ふ、鷹治郎の若さ、お言葉を變へて云へば、大いに働く鷹治郎である。町の

中 座

關西大歌舞伎大一座

一月二日初日午後二時半開幕

松 居 松 翁 作
田中 總一郎 舞臺監督
松田 種次 舞臺裝置

一番目 尾 形 光 琳 二 幕
中 幕 傾 城 反 魂 香 大 頭 舞 の 場

大 森 痴 雪 作
同 舞 臺 監督

新 作 與 平 寛 濶 駕 二 場

大 森 痴 雪 作
田中 總一郎 舞臺監督
松田 種次 舞臺裝置

二 番 目 阿 波 十 郎 兵 衛 二 幕

岡 鬼 太 郎 作 歌
杵 屋 榮 藏 作 曲
藤 間 勘 右 衛 門 振 附

大 喜 利 新 曲 當 世 掣 長 唄 雛 子 連 中

總 配 役

淨世又平、板東十郎兵衛(鷹治郎)尾形光琳、
女房おとく、祖上儀兵衛(福助)高島利兵衛、
媒人頼母(右團次)中山篤親卿、狩野雅樂之助
弟清左衛門、家人左近(長三郎)妻おはつ、幫
間吉兵衛、妻小笹(吉三郎)手代市松、喜多七
太夫(八百藏)妻おかね、下女お岩(成笑)將監
北の方、手代善七(成三郎)仲居およね、村の

青年團ほぎよく働いてゐるから、若い鷹治郎である。七十歳といふ年齢でこれほぎよく働いた俳優が古往今來それほぎあるであらうか、十の指を數へるまで有つたらお目にかゝらない。實際よく働いてゐる。働くといふ言葉は鷹治郎家のモットーであるのかも知れない、玉屋町の鷹治郎宅の書齋に、一人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し——といふ例の徳川家康の訓話が額になつて掛けられてあつたと思ふが、そんなところから來てゐるのかも知れない、けれども、鷹治郎といふ人が、その扁額にお燈明を上げて、官地嶽さんを拜むやうに、果た金神さんのお香水を頂く時のやうに朝夕禮拜をしてゐるところを見たことも無ければ、家の者や伴達に、そんな教訓めいたことを云ひ聞かしてゐることを聞いたこともない。八面玲瓏の成駒家ハンは、かりそめにも、そんな理窟くさい親父ではない、さうするに、なんの爲めに家康の訓話がかつてゐるのか、わからないことになるのだが、なか／＼常人にわからないところか、不思議な若さ、の所謂でもあらうか。彼れがそも／＼二十歳臺にして、すでに大阪劇界一方の旗頭であつたその頃から、すでに、働くといふことは、彼れの本領であつた。たゞ何かなし滅茶苦茶に働いた。女形、老役、敵役、なんでもかんでも役といふ役、殆んど彼れの手にかゝらないものはない、現代語の女學生から朝鮮人まで、演じてゐないのはアイヌぐらゐのものだ。なぜに鷹治郎はそれほぎ働くことが好きなのか、私のやうな怠け者にはトンシ合點が行かないが、鷹治郎も好んで骨を折ることに好きなのではなく、多くの鷹治郎びゐきが彼れを休ませないのだから、さうにも致し方が無かつたわけである。かうして五十餘年の舞臺生活、いまだに不斷に働いてゐる。いまだ三十歳の人と同じ骨格を持つてゐる。某博士が診斷した彼れの體軀には、何處からも病魔の浸入する餘地がないのだから、働くといふ人に出來あがつてゐるのは當然のことも知れない。決して無理に精力ヲ義を標榜してゐるのでもな

女(雀)花見の武士、村の女(扇妻お梅、村の女(鷹之助)娘おのり、村の女(我久之助)弟子渡邊始屋、村の男(升藏)娘おたつ、村の女(眼童)藤屋吾妻太夫、女房お弓(魁車)娘おみね(章景)娘おとく(市郎)百姓音作、村の男、手代平四郎(卯十郎)妻お直、娘おたつ、村の女(右若)妻おとせ、村の女(福萬壽)手代八右衛門、百姓哇作、子分半八(市昇)花見の町人、百姓畑作、六部、子分孫平次(右左次)手代信七、百姓哇六、子分實兵衛(延郎)番頭重助、桶造の老爺、手代助吉(齋五郎)彌世左近、下人仁藏(鷹正)手代善吉、幫間九兵衛、船夫吉助(九團次)船夫權右衛門(箱登羅)妻およし、女房おもよ(庭女)中村内藏之助、土佐將監光信(市藏)難與平、宮島村用右衛門(延若)關白二條綱平公、山崎與次兵衛、津田村彦助(壽三郎)中川權太夫、井筒屋九郎右衛門(橋三郎)妻あづま、女房お澤(成太郎)藤屋勘右衛門、船頭會一兵衛(銀十郎)弟乾山、修理之助、弟茂左衛門、妻米子(扇雀)妻お石(我童)

浪花座

志賀廻家淡海一派

十二月三十一日初日晝夜二回開演

田村 新作

第一早合點貳場

ければ、こころさら、よく働く、こいふモットーを掲げてゐるのでもなし、たゞ働いてゐる。物好きで舞臺へ出てゐるわけでもなし、白粉を塗つてゐるのが嬉しいこいふやうな年齢でもない、而し多數の見物に囑望されて、彼れが得意の一藝を演ずるこいふその瞬間にこそ、彼れが五十餘年の働きに酬はれる有るものがあるわけなのである。だから、いまさら、鴈治郎の若さやよく働くを云々する必要もないわけのだが、さて昭和三年度の彼れの興行記録を一瞥して先づ驚かされることは、やつぱり、若かりし鴈治郎であり、よく働く成駒家ハンであるわけなのである。

手つり早いころ、一月からの興行記録を掲げてみる。八九兩月の例年の夏季休業を除くの外、一日もして休んでゐる隙はない。

(一月) 中座 『赤穂實録』協阪淡路守。『碁盤太平記』天星由良之助。『土屋主税』主人公。『後日助六』助六。

(二月) 中座 『源平布引瀧』實盛。『戀の湖』稻野谷半兵衛。

(三月) 中座 『勸進帳』富樫。『戀飛脚大和往來』忠兵衛。

(四月) 東京歌舞伎座 『近江源氏先陣館』盛綱。『藤十郎の戀』藤十郎。

(五月) 同座 『引窓』十次兵衛。『九十九折』清七。

(六月) 中座 『近江源氏先陣館』盛綱。『伊勢音頭』福岡貞。

(七月) 神戸、名古屋巡業 『近江源氏先陣館』盛綱。『伊勢音頭』福岡貞。

(十月) 中座 『一條大藏卿』大藏卿。『九十九折』清七。

(十一月) 中座 『殿下茶屋聚』東間三郎右衛門。『心中天網島』紙屋治兵衛。

(十二月) 京都南座 『源平布引瀧』實盛。『曾我對面』十郎。『敵討襦袢錦』春藤治郎右衛門。

並木 五屍作

第二萬樂の日壹幕

山本 肇作

第三二つの地球 貳場

足立 萬里作

第四舊 友貳場

梗 概

第一、早合點 バスの運轉手尾崎安吉は新妻を迎へ楽しい日を送つて居る、その友人安達幸三も又最近或る會社のタイピスト花子を見染め尾崎に媒介の勞をとりにくれと頼む、尾崎は花子に逢ひ、友の切なる心情を告げ居る所へ尾崎の妻ユキ子が辨當を持ち來り此の體を見て誤解し親里に泣いて歸る、尾崎と安達はユキ子の親里八百佐方へ謝罪に行き丁度花子も來合せ無事に圓滿に納まると云ふ。

第二、萬樂の日 社會主義排斥論者で寡慾恬淡な河田繁は貞淑なる妻美代子と共に貧民窟に甘んじて窮迫なる生活を續けながら靜に時の來るを待つて居る、美代の姉喜代子は河田の人格を識らず妹可愛さの一念から妊娠せる美代子を無理に連れ戻らんとする、遇々兼て河田の提出せし論文が内務當局の認むるところとなり社會局囑託の辭令が屆く、こゝに於て清子の誤解も釋け一同欣喜雀踊の折柄、臨月の美代子は玉のやうな男仔を出産す、河田は月光に映へる嬰兒の無邪氣な面持ちに見惚れてゐる前途を祝福する件。

この内、壹月の助六、二月の實盛、十月の大藏卿、十一月の原作紙治、この四つには、初演、再演、いづれの意味に於ても、鷹治郎は精力を削るやうな努力をしてゐる。もう百萬の觀客の眼に訴へられ、多くの品隣に上つたいま、改めて、仔細の點を練り返へして見る必要はないが、無論鷹治郎の努力に酬はれるところは十二分であつたのである。これで今年度の鷹治郎の總決算はついたので、多くを云ふ必要はない、よく働いた、やつぱり若かつたのであるが、おそらく、今年來年、或ひは生涯の幕を閉づるまで、鷹治郎は働きつゞけに働くに相違ない。

亡父の思ひ出

二代目 澁谷 天外

「いよいよ御襲名でお芽出度う」

「おい、しつかりやれよ」

「此れからは君の腕次第だぜ」

「うん、きばつみなはれや」

會ふ人、來る人、こころよく浴せかけられる祝詞や激勵の洪水に、嬉しさで心配が頭の中でチャールストンを踏んでる様な心持。

「親父は酒豪だつたが君はいけるか」ミ、妙な處まで心配してくれる亡父の友達。

「嬉しいか、嬉しくないかきつらだ」なんかは問はれて返答に困る。中には、

第三、二つの地球 或る會社の重役古河は

愛妾きぬ子の許へばかり行くので妻の繁子はヒステリックになり里へ歸らんとす、たまたま呉服屋番頭の話聞いて改心し夫の行先へあやまり行かんとす、一方古河も妻のヒスに往生し妾宅に來りしが隣家の會社員合宿所に於て青年加藤が他の友人等に散々いぢめられて居るに同情し愛妾をその男の情婦の様に仕立て友人等の鼻をあかしたが、其迄にその青年の純真なる愛にほだされ人間として強い光明を見、妾宅通ひの徒事である事を知り改悟して妾きぬ子とその青年とを結婚せしめ自分は妻と圓滿に暮し喜ぶ件。

第四、舊友 職工西山良吉は先妻お米は美貌なりしかど心悪しかりしにこりこりし醜婦お蝶を自ら好んで貰う、先妻お米は改心して良吉を慕ひ來りしが一言の許に拒否し醜婦お蝶と圓滿に暮らし居りしが、たまたま舊友松井金造が美妻を自慢に訪ね來る、金造と十年前にお互ひに美人を妻に持ち競争せん事を約せし爲め良吉は大いに困り窮餘の一策としていかげや政次郎の妻を一時自分の妻として彌縫せんとせしが後に露見金造の妻も借物なりにしに兩人呵々大笑の裡に舊友互に親み合ふ件

總 配 役

「あなたのお父さんは實に巧い役者やつた」ミ言つた工合で暗に君は下手だぞミ注射して歸る人もある。

「君ミ引換へて親父は天才さ」ミ實に頭ごなしも程がある位る手まきびしく挨拶をしてくれる人もある。

「今まであなたはほんで暮らして来た人や。是れから苦勞だつせ。うんミ苦勞しなはれ」人の苦勞だと思つて盛んに苦勞を獎勵してくる苦勞人もある。さうした環視の中で亡父の名を汚す自分をかへり見るミ又しても脳味噌がチャールストンを踏み出す。「今後の喜劇界は君の双肩に在り」なんて嚇かされでも仕様ものならチャールストンがステテコミの合奏に早變りする。

親の光りは七光り。親父の光りは歿後十三年間光つて不肖の子まで襲名ミ云ふ餘光をもたらしてくれました。親の光りは全く有難いものです。

親！親！（續けて云ふミ變に聞へます）左手に數島の吸ひさしを持つて右に溢れ落ちるほご一杯に酒の注がれたグラスカップを手にして盛んに議論（管を巻いて居たのかも知れませんが）を吹つかけて居た姿。名古屋の愛知病院の病舎のベットで白いシートから髻の生へたアゴをつき出して、落ちくほんだ眼を天井へ釘付けた様に白らんで居た死の直前……私の印象に残された父に此んなにまで（ミ云つては悪いが）光りがあつたのだらうか。私は今までの自分の努力ミその殘された親の光をしらべて見る時襲名ミ云ふ事がおそろしく思はれて來ます。

又ジャツミステテコの合奏です。

「氣の弱い奴だ」ミ、云はれるかも知れませんが、結婚の式場に臨んで鼻唄氣分になれる人のないのミ同じ理屈で襲名ミなるミ一寸固くならざるを得ません。まして獨り息子。駄々子のやんちゃ坊主で暮らした私です。至つて氣が弱い。笑つちやいけま

姉美代子、古河夫人繁子（龜鶴）運轉手尾崎、
息子善太郎、職工巳之吉（辨慶）運轉手安達、
小使山田（樂太）會社員加藤、かんと煮屋儀助
（白石）河田妻美代子、政治郎妻おみき（かも
め）屋根屋藤吉、友人松井（老松）會社員板垣
（伊吹）田舎者田吾作、家主大井（樂祐）會社員
岩崎、先妻お米（松葉）屋根屋男三（浪縁）車夫
八造、職人伊作（銀波）運轉手市田、職工爲三
（樂三）會社員中野、職工辰造（紫雪）藝妓桃子
（紅葉）佐平の妻おとく（式部）妻お蝶（るり子）
タイピスト花子、女中おたね（友子）女中お竹
（靜子）女中おすゑ（千代子）女中お杉、娘おき
み（伊都子）妻お雪、妻眞佐枝、藝妓筆吉（春
江）古河妻おきぬ（辨天）母お友（多景島）八百
屋松田、友人大和（源五郎）いかけや政次郎十
太郎）番頭常助（太郎）河田、重役古河、職工西
山（淡海）

角座

松竹家庭劇

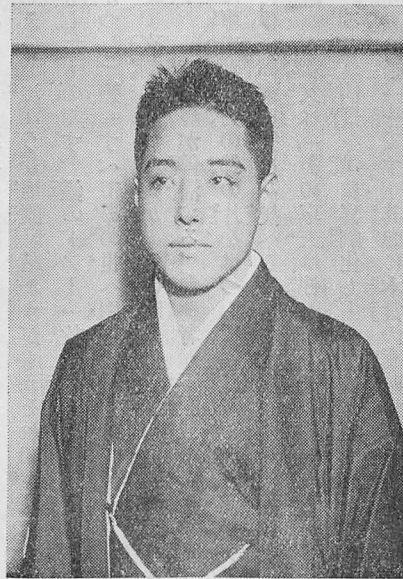
十二月三十一日初日晝夜二回開演

御入場料

一 等 金貳圓貳拾錢
（外に落物金貳拾錢）
二 等 金九 拾 錢
椅子席 金五 拾 錢

せん。全く氣はあかん方です。それも父の生前よく云はれたものです。「蛇は寸にして人を呑む。もう一寸しつかりせい」ミ。結果寸にして呑めなかつた私は五尺になつて酒だけは一人前呑む様になつたんですから御安心下さい。亡父は頑固でした。疝癩持ちで周章もので、殉情的で幡隨院の長兵衛でした。巡業に出るミ芝居の閉場後、大部屋の人達や書生連中を劇場の前へ整列させて、

「一人につき〇圓づゝ出してやる、これから遊廓へ駆足ツ……オイツ」なんて走らせたり、書生を天外にして自分が書生になつて藝妓をなけて遊んだりそんな事をやつて痛快がつて居る人でした。平素でも滑稽味のない



そんな處があるので歓迎せられた父も一面蔭口を叩かれる事がありました。亡父は私を愛してくれました。掌中の玉ミ云ふより買ひたての靴の如く。常に深甚の注意ミ手入をおこたつてくれませんでした。水！あれは腹にわるい。豆！胃にもたれる。電車道へ出るな。川岸を歩くな。全く修身の教科書をつくりの生活を詰め込もうミしました。大分度が強かつたミ見へて子供心にも一困つた親父だ一ミ思つて居た事を記憶します。その癖酒は呑む可しミ晩酌

人間は嫌つて
あいつはボン
チの味が無い
（當時ユーモ
アなんて言葉
谷は一般に使ま
天せんでした）
外ミつき合ひを
さけて近付き
ませんでした

茂林寺文福合作
詩賀里人

第一申分なし一場

茂林寺文福合作
詩賀里人

第二雪折れ笹三場

茂林寺文福作

第三靈の交換二場

詩賀里人作

第四親の味一場

茂林寺文福合作
詩賀里人

第五岡目八目一場

總配役

掃除夫山名、西善太郎、兄好松（十吾）高濱子
息宏、筒井文造、樺庄太郎、店員徳造（天外）
友人江見、おきくの夫輪田（三郎）社長高濱、
佐々木大造、主人米三（二郎）市會議員町田、
知人佐藤、岩坂（三樂）女給お蘭、西の妻安子
（石河）娘るり子、女中おすゑ、藝妓濱路（春
日）おちよぼお花、娘お千代（小東）藝者光吉、
米三の妻おます（米津）女中おしん、藝者夢路
女給光子（香取）女中お里、女房おしか、英策
の女房おきく（桃谷）娘満智子、藝妓吉彌、許
娘お久、星野の女房おしづ（東）谷口巖（藤村）

の度に缺さず手本を示して教へてくれます。かんがへて見るに妙な親父ですな。

豆は胃に悪くつて酒はその限りに非ずなんて、つまり喜劇の家庭化でせう。その喜劇の實行が過ぎて、劇中に倒れたたま、再び起つ能はず、白熱的な人氣のあつた名古屋の縣立病院で鬼籍に入つたのも亡父として時を運び當したのかも知れません。

大正五年十二月十七日。それから二日を経た十九日の未明霜のおりた道を生々しい柩の中に長軀を横へて、火葬場へ運ばれる父の最後の姿。重い鐵扉がガタンミシまる……、それでしまひ。泣かうが地團駄踏まうがもうそれで左様なら。割合人間ミ云ふものはあつさりしたものです。鐵のドア一枚で名も地位も富も（父には残念ながらそれは更になかつた）戀もすべてあの世へ引越しするのですから始末がよろしい。處が親父は最後まで喜劇的だつたのか、その時の僧侶が可成あわてものに見へて鐘を忘れて來た譯です。一時お經が停滯する、會葬者が不服云ひ出す、ヤツサモツサです。處へ氣の利いた車夫が人力の鈴の片をはづして「此れでさうだやアも」名古屋訛りでやられた時には一同實に笑ひを堪へるに苦心慘澹だつたに違ひない。

鐵扉の中に眠れる親父は「あの車夫は仲々ポンチの味がある」ミ嬉しがつたに相違ない。嚴肅である可き情景を遂に喜劇化し去た車夫は父の心を知る人だつたのでせう。笑ひミ涙の間隔は紙一枚です。其處に本當の意味の喜劇が在るのぢやないでせうか。その利那死の恐怖を生るの歡喜に變へ得るものは笑ひです。そこに喜劇の意義があり存在價值があり、又使命があるのだと思ひます。鐵扉一枚に數多の喜劇が含まれて居るのです。私は父の死に依つて尊い經驗を得る事が出來た譯です。さうして十三年目の今日鐵扉の中に父と共に閉された名は私の手へ歸つて來ました。遺業を繼がせてやらうミ云ふ温情に依つて再び蘇へつて來たのです。更生された名を、泥濘に落さずしつかり抱へて努力を續けなければならぬと思つて居ります。

啞小田新三郎(高田)吉彌の父、田山定次郎、父親和田松造(小織)

辨天座

新潮劇一派

十二月三十一日初日晝夜二回開演

田中總一郎作

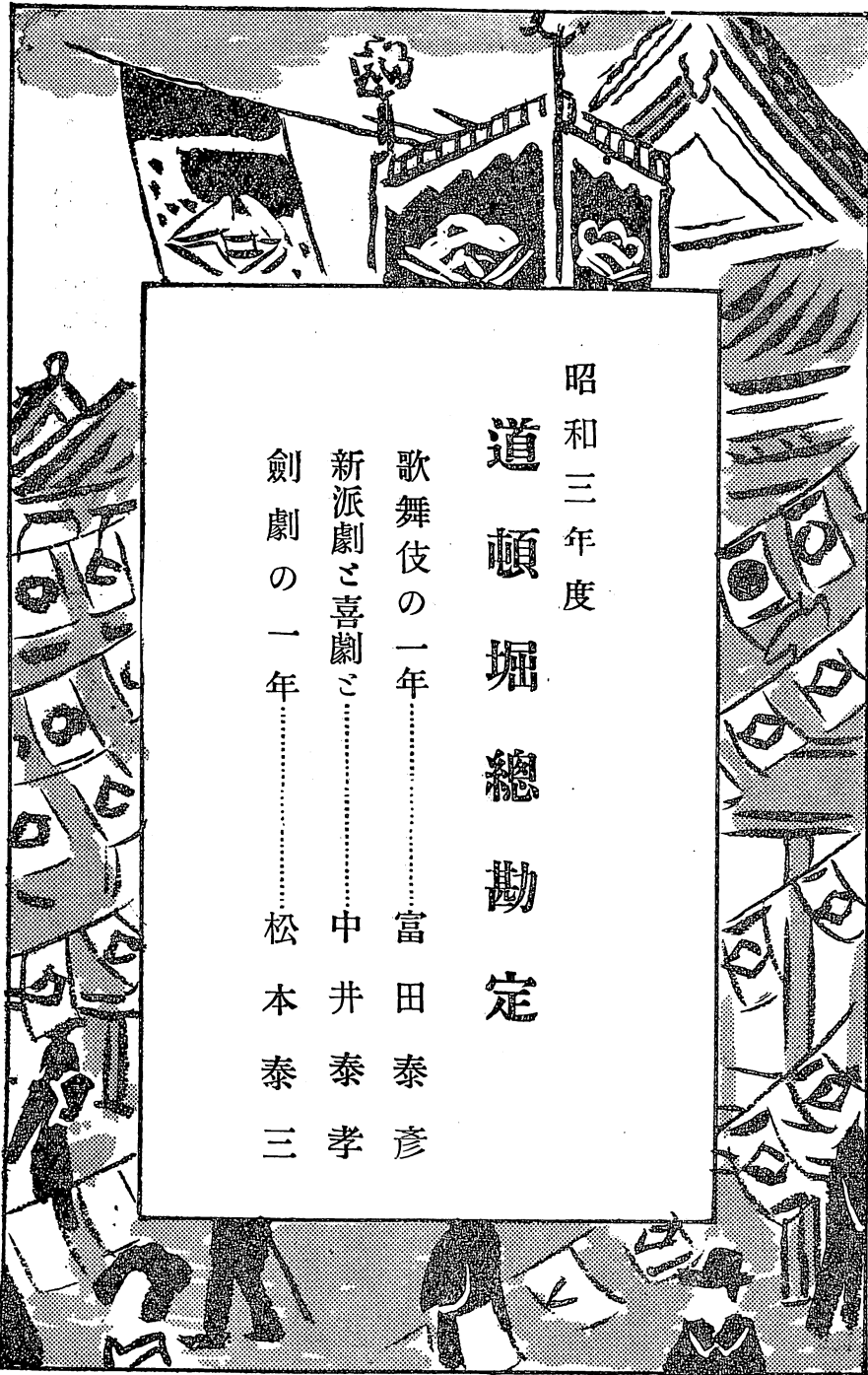
第一 ある敵討たれ 二幕五場

加藤武雄原作
瀬川春郎脚色

第二 球を抛つ 五幕九場

總配役

柿沼宇八郎、關清一(野澤)原田重藏、馭者岩松(筒井)肥後久之助、學生古賀(高橋)志村劍學生牧野(吉田)矢部傳藏、男爵大河内(原)須藤源三郎、社長宮川(眞木)未亡人侑子(桃木)金澤藤藏、家主高木(山田)吉村金吾、學生殿村(松村)弟晋吉、學生佐田、家令杉本(泉)武士伊藤、小使萩野、家令谷口(松井)寛正俊、小橋喬郎(進藤)進藤源五郎、原進之助(波多)谷崎庄作、梶原柳太(小笠原)相馬直亮(都築)妹八重(守住)麻倉輝子(富士川)霧島彌生(葛城)女學生徳子、女給數子(大東)貞子(小松)川路靜枝(三好)



昭和三年度

道頓堀總勘定

歌舞伎の一年……………富田泰彦

新派劇と喜劇……………中井泰孝

劍劇の一年……………松本泰三

歌舞伎の一年

鷹治郎を中心とする考察

富田泰彦

——『歌舞伎の一年』は、また過ぎて終つた。

× 恰で『眞晝の夢』のやうに、そこはかき消えて終つた。消ゆるもの、美しさ……なんかさ、私は、いつも詠歌的にならざるを得ないほど、不斷に歌舞伎を惜愛してゐる。

× 夢は詩で傳説の輝ける創造物だ——と、若し云ひ得るならば、歌舞伎も慥に美しい夢の幄の中に、封じ込めて終ふ方が、されだけ、詩的な運命の終局だらうことを、私は常に希望者である。

× また、禪學的に云へば、過去も未來も、何うでも可い、たと現在に即した歌舞伎は、一體に何うなのか……と云ふことだ。こゝらからして少々禪問答めくが、それほかにまで、今

の歌舞伎は、運命的に、逼迫して來てゐる。越くも刻下の歌舞伎を、世間の人達は何う見てゐるか云ふことを、考察するのが急務なのだと思ふ。

× 「それぢや、君に申し付けた——『歌舞伎の一年』——と云ふのを何うする氣だい」と、「道頓堀」の編輯者から、お小言を喰ふかも知れない。だが、私は未だお屠蘇には、酔つてゐない。師走の灰色の空から、冷たい風を送つて來る日に、何うして春めいた浮かれ心になられよう、況んやこの『歌舞伎の一年』を回顧するにあたつて、私の頭腦は勢ひ理智的に、それは恰も二十日正月を過ぎたお鏡餅のやうに、カンシ固くなつて來た。

× 其處で、無理にも正月氣分になつて、もう一度原稿紙に向

つて見た。——元日や神代の事も思はるゝ、斯うした古句も胸に浮かんで来た。次に鴈治郎の土屋主税の顔が、大寫さなつて……『玩辭樓十二曲』ミタイトル……が。

『さうだ。さうだ。たしかに昨年の中座の初芝居だつた。

一番目は『赤穂實録』中幕が『碁盤太平記』さうだ……二番目は大森痴雪君の新作『助六後日』……芝勢以の哥澤、成駒家は不思議芝居がしなかつた。大阪日日に寄せた長廣舌庵主人の鴈治郎観……太陽の黒點ミ云ふ惱みが是れかな？』

×

「大佛次郎氏の『赤穂浪士』を持つて来るミ云ふ噂があつたが、ハテな去年のお正月が『赤穂實録』だ……さう云へば『助六後日』も、今年の初芝居に据へても可い藝題だ」

何んだか、長閑になつて来た。追憶も満更悪くはない。悪くはない處が、斯うなるミ愉快になつて来た。私の萬年筆も助六もさきに、妙に前渡りにこだわりすぎて長くなつた。

×

其處で、鉢巻を締め直す。「變道常ならず、敵によつて變化すは是れ三略の詞——是れが助六の臺詞だが「江戸紫の鉢巻に髪は生締、ソレや、刷毛先の間だから——間ぢやない——覗いて見ろ安房上總が浮繪のように見えるわ——」ミ云へきも、當今目前の舞臺さへ見えてか、見えぬか助六の

本格呼ばはり、樹に依つて魚を求むるは、猶魚樹に上るの風情ある竹生島を、隣國に控えたりとも、京都に來て初松魚の蟹を説く以上の、コケに非ずや。それ「變道常ならず、敵によつて變化すは是れ三略の詞」——如何に頭の悪い高麗屋ミても、臺詞は二度も附けさせはしまし、

×

昭和三年十二月、御大典記念ミ稱する顔見世興行の『助六』からして「能く見て置いたもんや、幸四郎ミ云ふ役者の助六それは、立派なもんでしたえ——ミ、遠くは丹波の炭焼賣炭の齒ツかけ爺、近くは祇乙の古遣手梅干婆に至る迄の茶呑み咄さころか、こ、五年十年後の『助六』上演難は、堀越宗家の版權料沙汰ではない。一體是れだけの俳優でも舞臺に揃え得るや否や——至く心細くならざるを得ない。

×

何んミ云つても、昭和三年度の收穫——でなくば奇蹟ミ云つて憚からざるものが、この『助六』ミ、二月中座の『暫』の上演、さうして鴈治郎の『實盛物語』の再現である。

×

『助六』の筆ついで「ヤイ侍、何故突き當つた、鼻の穴へ屋形船蹴込で、コリヤ又、何ーンのことてえ」

ミ、八方へ喧嘩を賣るのではない。だが、今の劇評家云々、眞に歌舞伎を愛護しつゝある態度か、何うか——大に疑ひを狭さざるを得ないほどの、罅隙はありはせぬか。

懷古に感傷し、新奇を慾望す。その二つの端的な觀賞眼が兎もするミ、太陽に擬せらるゝ、鷹治郎にすら、黒點の惱みを生ぜしむる所以であつた。

由來、歌舞伎も時代思潮に、押し流されて來たことば、論を俟たず。荒唐無稽な表現を喜んだ發芽時代——若しくは初期に暫く措き、浪漫的な構想が、一轉、慘忍性を喜び、エロチックな官能的な舞臺を謳歌する時代を経て、近代は餘りに神經質な惡寫實に傾いた舞臺表現を責むるは、脚本そのものよりも寧ろ俳優の末梢的な技巧にありはしまいか、即ち脚本箇々の持味——それを反映せしめてゐる處の、時代的情操を餘りに無視しすぎてゐることである。それを難したい。

一例は、古典味を貴ぶ歌舞伎十八番の『晋』が、生真面目で片付けてゐた事や、『天下茶屋』の返り討の興味の淡れたことば、觀客よりも、その罪は多く演出者側にあつたことを、私は甚だ憾みとするものであつた。

歌舞伎俳優が、その演技に自信を持ってなければ、須らく廢棄すべきである。——ミは、私がいつでも斯う叫んだ記憶がある。

その反語として、歌舞伎見物に、その滋味を攝取し得ないほどの無教養の觀客は、一切近寄るべからず。——だこ是れも私は常々思つてゐる。

其處で、私の常套語たる『私達の歌舞伎』を説く。——『私達の歌舞伎』は、高山樗牛の言ひ草ぢやないが、須く時代に超越すべきである。

特に『鷹治郎の場合』も同斷。

少々極端な引證だが、『續耳塵集』に曰く「昔の役者は肌を見せることなし、大肌脱ぐ心の時は、上着を脱いで白無垢になるなり、刀を腹へ突き込むむいふにも、白無垢ごしに突きまはす。此事は今もあり。然るに白無垢ごしに腹を切るは無理なりと難する人なきは、是れ白無垢を肌ごして昔より傳へ見なれたる故自然ミ、見物承引するは、又自然なりけらし」ミ、この心意氣は、今日も猶、或點まで尊重して貰ひたい

ものだ。

× 『鴈治郎の場合』の新作を厭ふ好劇家の爲めに、彼は全く此の一年間この『助六後日』を除く以外は、悉く極め付のもののみを上演した。一月の『基盤太平記』『土屋主税』二月の『戀の湖』の半兵衛、三月の『勸進帳』の富樫三郎、梅忠三月の『戀盛綱』の伊勢音頭、四月の『大藏卿』の九十九折、清七就中十一月の『天下茶屋』の當麻三郎右衛門、云ふ大敵を買うて出たこゝを、珍とすると共に、天下一品の『心中天網島』の治兵衛で、愈よ圓熟した至藝を見せたことは、その『實盛物語』の收穫を合せて、特筆大書すべき記録ものだ云へる。

× 今日、鴈治郎にして、天下の好劇家の望む處は、萬事此調子である。古劇復興——それは未だしも、徒らに新作を追ふて、その迂愚を後世に残す必要はあるまい。彼には永劫不變の聲價を保つ處の、完成されたる幾つもの藝術品を持つてゐる。こゝを忘れて貰ひ度くはない。

× 鴈治郎を認むるこゝは、勿論完璧なる鴈治郎の藝術の輝きである。卒直に云へば、鴈治郎の眞價は既に玩辭樓十二曲のうち、藏せられてゐるのである。従つて、いつ何時でも、

それだけの壁には、それだけの磨きのか、つた輝きのあるこゝを忘れてはならない。

× 顔見世の實盛に、殊更變な着附を着たり、今宮のガード下を思はずような、非繪畫的な蒲鉾小屋から治郎左衛門が出たり——イヤもう藝術も完成されて終ふこゝ、ツイお道樂氣の出るこゝは、將來までも嗜んで貰ひたい。

× 「鴈治郎は、先づ自らの藝術を尊重すべし」——是れは先づ私が、成駒家に捺ぐる年頭の詞である。

× これで『歌舞伎の一年』は盡きてゐる。——尠くも大阪劇壇の現状は、その全部を語るよりも、鴈治郎一人を是非すれば、足りてゐる譯である。實際それほかに、大阪劇壇の形勢は、クラシカルであり、保守的な處に、猶誇るべき何かを把持してゐる。

× だが、私は決して、それで満足してゐる者ではない。古典歌舞伎は、いつか美しい夢の幄の中に、封じ込めなくとも、『時の力』は、自然に昔の榮光を語る處の、傳統の影をも、蹴散して終ふであらうこゝを信ずる。さうして我歌舞伎國に

も、黎明の鐘は、既に撞かれてゐる筈なのに、目覺めないでゐる。イヤ目覺めてゐる者もあらうが、扱て何うすることも出来ない。無力なのか、狡情なのか、それとも寡黙なのか、その態度がハツキリしない。——「まア、今に何うともならうと云つた環境に、皆が苟安を貪つてゐる態なのだから、本當に情ない。

其處なのだ。私の現在に即して、我が大阪劇壇の趨勢を、熱々觀望しよう云ふ點は——何も好きこのんで、古典歌舞伎を尊重しよう云ふのではない。新興歌舞伎結構、新劇

——まア揆ぐつたいが賛成である。「それぢやア、その方面の印象を書けば可いぢやないか、いらざる雑言を吐きちらす手間にさ——直ぐ編輯者からお叱りもあらう、だが、私としては

「云はねば、理が通らぬ、まアお下にござつて、一ト通りま、お聞きなさつて下さいませ」ト誂えの合方も、要らない要するに、簡單明瞭である。さうした機運には、未だく到達してゐない。だが、私はそれを敢て咎め立てをする者ではない。

俳優諸君にしてからが、内に燃ゆるような藝術的感奮がな

くてはならない。観客諸君にしてからが、外に抑えきれない觀賞慾の熾烈さがなくてはならない。舞臺に觀客席との慾求が、渾然と融和された處にこそ、始めて劇界の新機運を醸成する醗酵力が漲り渡るのであるまいか、遺憾ながら、御註文の『歌舞伎の一年』の回顧から、さうしたものを見出し得ないではないか、氣拔けのサイダーのような新劇——それには好意あるほんの一部の好劇家が、耽奇的な眼を強ひて光らして殊更に、それを強調した讃辭を寄せたにしてからが、大衆的には、何等の感激をも齎らさなかつたではないか。

浪花座の四月に延若の『戦艦三笠』魁車長三郎の『高瀬舟』中座の五月の永田衛吉氏の『平家の人々』大森痴雪氏の『國分寺戀開眼』中座の六月の山本有三氏の『西郷三久久保』——更に同座の九月に同氏の『嘉門七郎右衛門』それに引續く十月の谷崎潤一郎氏の『お國三平』なま新作物はあるにはあつた。重に延若を始め福助、魁車、我童、壽三郎などが中心となつて、上演したにはした。取り分け『西郷三久久保』、『お國三平』は、それを以つて直ちに、大阪劇壇に黎明近づけりとのさきの聲にはならなかつた。それどころか、その興行の景氣を支配するだけの原動中にもならなかつた。

それは何故か——。

要するに、是れも説明は、頗る簡單明瞭である。曰く鴈治郎の藝術の輝きが、餘りに大いからである。大阪の好劇家の眼には、是れ等の新作の大抵の場合は、成駒家の顔を扮り直す時間か、それとも夕食の時の繋ぎの幕ほきにも感じられてゐない。また、實際はさうした場合の多いのも事實だから可笑しい。だが、大阪の芝居は、それで可いと思ふ。其處に大阪劇壇らしい色調が現はれてゐるのである。生々しい『西郷ミ大久保』の何處か、整はない幾幕を見るよりも、『盛綱』や『實盛物語』やの一幕に、より完成された美的魅惑が多分に持つてゐることを忘れてはならない。

斯くて、鴈治郎百年の後ならば、いざ知らず、彼の不拔の人氣ミ、偉大の藝術ミの滅びざる以上は、随つて大阪歌舞伎の本領も牢固ミして磐石の如く動くものではない。

この尊敬すべき不世出の藝術家、鴈治郎を有することに依つての大阪人の自負は、取りも直さず歌舞伎のクラシズムと禮讃となるは、全く觀賞眼のあやまたざる方向を指示するも

のミ云つて能く、而も交通文化の進展せる今日、若し新興歌舞伎に赴き、新劇に憧憬せんミの人々には、容易にその劇場若しくはその劇團に接する機會を與へられつゝあるではないか——、而も猶それ等は、未來に伸展せんミする生命の躍動しつゝあるではないか、然るに我が劇界のクラシズムは、將に傳統者を得ずして、いつ崩壊せぬとも限らぬ危機に立つてゐるのである。

——たゞ一人の巨人鴈治郎によつて、支えられてゐる古典歌舞伎の殿堂に對して、何を措いても大阪の好劇家は、日常その禮拜を怠たらず、進んで、この巨人を圍繞する處の大阪劇壇を愛護することを忘れてはなるまいと思ふ。

さうして『歌舞伎の一年』も、また一瞬の夢のやうにすぎて終ふであらう。其處で、最後に白井社長に希望する處は、今年も更に面白い歌舞伎を提供して呉れることである。『誓』『勸進帳』『助六』ミ歌舞伎十八番の問題のものを、次々に上演した意氣を以つて、鴈治郎中心の古典劇復興なごに、考慮を拂つて頂き度い。或場合はいつぞやの『菅原』の松王丸や『天下茶屋』の三郎右衛門を振りあてたやうな、機智をも時々には用ひて頂きたい。さうして少しでも鴈治郎の役々のマンネ

リズムに對する一部の非難を緩和することに努めて欲しい。

×

新派劇と喜劇と

斯くてこそ、『私達の歌舞伎』を讃仰する處の、恍惚境へは永久に導かれて行くでがなあらうと信ずる。

中井泰孝

今年の一年ほき新舊を通じて、劇界の沈滞を見た事がない殊に新派劇の今年ほき淋しかつた事は、恐らく此の劇の發生以來ない事だらう、イヤ淋しい云ふも、そこにまた淋しくない影が、若干残つて居る事を意味するが、今年の新派の狀態では、最早その影さへも止めず、全く没落し終つた、云つてしまつては、言や甚だ正直過ぎる云ふならば、茲に言の葉を改めて、恰も行燈の灯の油盡きて、今や明滅の間に心細い光が、まばたいて居るでも云つて置こう、則ち關の東西を通じて、果して新派劇が、昨今什麼蠢きつ、あるか云ふも、それは日本に只一つ、本當に日本に只一つ、彼の新派劇の三頭目の合同が、一家一門相擁し相抱いて、僅に東都の空に、心細い息をついて遣ふて居るのみではないか、而かも

聞く所によるも、來春を期して、その一團の中に、更に思ひがけない梅島、英の面々までが加入して、愈々茲に一派團結以て大いに新派劇の爲めに、捲土重來……と見れば聊か意を強ふするに足る氣もするのだが、一度首を左して此れを眺めて見る時に、曾ては天下に覇を握つて、あらゆる人氣を一身に集め、意氣天を衝いて彼の平家武士も、時の推移と共に到る所戦利あらず、遂に一敗地にまみれた敗軍の將卒、哀れ敢果なくも追はれくつて西海に落ちのび、期せずして合ふ所に落ち合つてしまつた、さも見れば見られるのである、今更ながら甚だ心を細うするに足るのである。

が然し、東京方に於ては蠢きつ、でも、あえぎつ、でも、兎に角形の残つて居る以上、決して未だ全く消滅したのでは

ない譯である、翻つて一度眼を關の西方に轉ずる時に、其處には全く其の影さへも認め得る事が出来ないのだ、關西斯界の霸王繞將相ぞつて、今や仁輪伽喜劇の居候である、或は海を隔て、遠く出稼ぎに出掛け、或は自ら頭を押えて劍劇に隠れ、或は映畫に走り、或は萬歳に早替る、飛々散々全く其跡をも止めず、斯くして茲に關西新派劇なるものは、全く絶滅し終つたのである、然し死して悪名を残さざるは武士の本分である、惜む可し關西の重鎮頭目たるもの、如何に移り行く世の習ひは云へ、曾ては天下の人氣を沸きた、した日の爲めに、せめては其の匂ひにだけでも、新派劇の影を残しておくかは、遂に相こぞつて渴して盗泉の水に舌鼓を打ち、武士遂ひに大いに食つてたか揚子を使ひ、天晴れ死して立派に悪名を残したのである。

が然し、此れは當然來たるべき運命だつたのだ、寧ろ今日まで細々ながらも存続し得た事が不思議な位だ、では新派劇の命数は今日までとあつて、さつち道此れから先きには彼の壽命は全く無かつたのか、ミ云ふ事實は甚だ然らずなのである、要するに彼の保健法と治療の法宜しきを得なかつたからである、進み行く時勢の寒暖に處して、最も合理的な措置手當を忘れたからである、時勢は既に花笑ふ春のさ中だミ云ふのに、彼はまた秋のつもりで頻りに紅葉の唄を唄つて居たか

らである。

兎も角も新派劇なるものは、今から半世紀前に舊劇の變形物として生れた演劇であつて、今更時勢が春だからミ云つて秋の産物に愧て、春の衣を着せ、春の化粧をさせても、それは決して春の産物にはならないのである、若し彼が、徒らに近代的な物真似に陥らず、慌て誤つて荒尾讓介にカクテルを吞ますことなく、浪さんにチャレストンを踊らせる事なしに則ち半世紀前の思想風物を背景にして、つ、ましく生きて居たならば、或は歌舞伎劇が歴史的大背景の許に、存続し得る様には行かずとも、まだ四五十年前に生れた觀客が此の世に存在する以上、もう少しは今日の浮目を先方へ延長し得たかも知れない。

結局は新派を亡したものは俳優自身であつて、餘りにも演劇ミ云ふものに對し無關心無自覺であり無能であつたからである、或る俳優が堂々として恠ふ云ふ事を云つた事がある、我々は三十年來舞臺の上に立つて多くの經驗ミ智識を持つて居るに、その三十年來のくだらない經驗を持つて居る爲に即ちその三十年來の經驗に依つて得た智識から放れ得ない爲めに、近代的演劇に進浸し得ない事に氣のつかないほどの無能者に依つて形られて居たからである。

然らば此の新派劇を再び蘇生させる道ありや、曰くありて

ある、俳優それ自身が、即ち三十年來のくだらない經驗を捨てる事に依つて、もつこく自分自身の營業に誠意を持つ事に依つて、實に淺ましい役者根性を捨てる事に依つて、須く近代生活に浸り、時代的精神の涵養に依つて、せめては人様の演劇を見、輸入のフ井ルムを見る事に依つて、せめてはその月の文獻に現れた戯曲の標題だけでも知る事に依つて、依つて以て彼等が猛進的努力に依つて、勿論從來の新派劇とは全然其軌を異にした新派劇の再生を見る事が出来ると思ふ。

『何故我々の新派劇を見に来る客がなくなつたのだらう』
「除りにも嘲ひ笑ふ可き愚昧を小聲でこぼして居る新派の俳優諸君よ、乾坤改まつて正に昭和四年である、大いに奮勵努力を望む。

新派の没落に乗じた譯ではあるまいが、その穴埋めに善劇に云ふものが、今日以前の派劇の位置に置かれてある、その經驗から見て當然新派劇と同一運命を持つて居るのではあるまいかと思ふ、五郎一座にしても淡海にしても、また家庭劇なるものにしても、全くその軌を同ふして、そこに聊かの現代的進取の色がない、十年前の喜劇と些の變化もない、今では既に近代文明とは大分遠い隔りを生じて居る、見よ昨日の文明は決して今日の文明ではない、昨日の生活は決して今

日の生活ではない、況んや十年前の思想は決して今の世の思想では勿論ないのだ、若し近代人が現在の喜劇を笑ふならば恐らくそれは、今日の前の演劇其者に笑ひ興するよりもその十年前の思想は今日に見て時代錯誤を寧ろより興味ある喜劇にして笑ふであらう。

今日演ぜられて居る喜劇なるものは、決して純然たる喜劇とは云へない、つまり昔大阪の産物さして誇つた仁輪伽の稍演劇化したものに過ぎない、要するに喜劇は何處まで此れを粉砕して行つても、形る所の分子細胞は即ち喜劇でなければならぬのである、今日、喜劇はその演劇は悲劇であつても笑劇であつても好いのである、只俳優が即ち仁輪伽式のセリフの使い方、人生有り得べからざる、見るに堪えない身振り此の二つの技巧に依つて悲劇を笑して見せる、只それだけである。

悲劇十演劇一喜劇

恁ふ云ふ喜劇は決して存在し得ない筈である、此れでは萬歳が新派悲劇を演じて居るのと同じ轍である、喜劇の笑ひは決して萬歳の笑であつては不可ないのである。

劍劇の一年

松 本 泰 三

劍劇の名が生れてもう十年の餘になる。夫れは氣紛れな一時的流行であつたかも知れぬが、現在ではもう抜く事の出来ない重なる位置を關西劇團に占める事に成つた。昭和三年度に大歌舞伎が十一回開演したのに對して劍劇が十二回、新派劇を追い舊劇の一部を喰んで之れ程の進出をして居る事は如何に時代的に同劇が恵まれたものであるかが知られる。同時に關西劇壇の動勢に就て彼は決して無力ではない。夫れ丈に彼等が一年の間に上演した脚本並びに其の成績を一應顧る必要がある。例へば本年に於ける關西劇壇の大勢を卜する上に於ても……

□一月 澤正は浪花座に、額田六福氏の作『小棍丸』一幕廣津和郎氏の『勝者敗者』村上浪六氏の『原田甲斐』を眞山青果額田六福兩氏の脚色で連日滿員の盛況であつた原田甲斐は脚色も好く浪六氏得意の考察が大阪人の心に叶つたのであらうが、小棍丸は左程感銘深いものではない。三題の中では

僅か十五分の『勝者敗者』が神經衰弱的現代人の心に響く何者かが有り、自分も其の患者の一人にして之れが一番氣の利いたものだと思つた。けれ共一般は原田甲斐に引寄せられて居た事は勿論である。二の替りは佐藤紅緑氏の『キリスト』を一番目に、行友李風氏の『怪船安宅丸』を二番目に据ゑた並べ方は甚だ巧妙であつたけれ、キリストは興行政策にしても脚本にしても上々の物では無い。キリストを人間として扱つた事に却て無理な破綻があつた。怪船安宅丸は行友氏が老練な筆で平易無難に書きなされた劍劇で観客は歡んだ。此月は兎も角も満員續きで打揚けたのは目出度。

□二月 新聲劇が角座で此年に於る第一回を開けた。第一が徳田純宏氏の『忠告した彼』第二が食滿南北氏の『大岡政談』で仲々の大當り。二の替りは徳田純宏氏の『父の眼』ミ服部秀氏の『日光の圓藏』で第一が比較的無技巧に對し第二は技巧一天張の芝居である。俗に言ふ二月三日言ふ悪い月に

も拘はらず相當の成績を収めて居た。

□五月 再び澤正が浪花座に來り、杉村楚人冠の『うるさき人々』第二『浪人の群』第三『掬摸の家』第四『金平化生討』の四ツを並べた。若し第四の如き澤正自身の御道樂が無かつたら、此興行は満員であつたらうもの……打込むにつれ見物が薄くなつて行つたのは不景氣の罪か、それとも出し物の所爲か……?

□此月 新聲劇は角座に、久松氏の『世紀末の女』ミ中井泰孝氏の『安倍の仲磨』各一幕物の外、下村悦夫氏の『悲願千人斬』を食満南北氏の脚色で……更に、二の替りは同じく中井泰孝氏の『第七天國』を一番目に浪六氏の『妙法院勘八』を南北氏が脚色で上演した。内容の説明ミ批評はにおいて新聲劇も新國劇も決して不入りでは無かつたが、又決して上々の成績とも言ひ得なかつた。

□七月 同劇は辨天座に轉じ、第一に『噓若林大尉』を、第二は大森痴雪氏の『血染の瀑布』で、前者は山本夏山氏の作なる軍事劇、後者は本水使用の大劍劇であつた。又二の替りとして、栗嶋狹衣氏の『海國兵談』ミ『國定忠次』を上演し不十分ながら満足に値する大入りをしめて居た。

□八月 同劇は再び角座に轉じて徳田純宏氏の『飾窓人形』ミ大森痴雪氏の『露見來輔』を、一は癒りかけの腫物に

一寸觸つたミでも言ひ度い皮肉。第二は謎か舶來物……でもさすがは老練な味ミ面白い作意がある。二の替りは徳田氏の『萬歳師の家』之れは流行の絶頂に達した萬歳師を主題にセントメンタルな人生觀を見せたもの。二番目の『鞍馬天狗』は大佛次郎氏の作を其儘徳田氏の脚色による詠えむきの劍劇である。

□此月 永く休演して居た新潮座が、再起して辨天座に花々數開演した。第一が湊邦三氏の『非力武士』第二は瀬川春郎氏の『嫁ヶ淵』である。前者は新しい作意から立廻りを避けた時代劇。後者は思切て場當りのする、寧ろ三十年昔の新派劇の再現ミも言ひ度いが、でも現代の子には相違ない。要するに新派で劍劇を行ふミ狙つたらしい。二の替りは服部秀氏の『夜咲く花』ミ瀬川春郎氏の『赤城の喜三郎』新派に幾分の新味のある外二番目は讀切講談ミ言ひ度い代物。

□九月 瀬川春郎氏作の『邦坊漫畫の旅』を一番目に、鳥江鏡也氏の『返り討崇禎寺馬場』を二番目に据ゑ、連日満員の盛況裡に十八日間の打越しは脚本よりも宣傳に大功があつたと言はふ。二の替りは瀬川春郎氏の『環境』ミ鳥江鏡也氏の『ごろつき船』第一は春郎氏近來の傑作で一時間餘る一幕は満場を酔はして餘す處無く、第二は残念乍ら新聞小説の缺點を遺憾無く暴露したミ言ひ度い。脚本家が杜撰ミ言ふ

より興行師に罪があつたのでは無からうか。

□十月 新國劇の短期興行が浪花座に行はれた。澤正の『坂本龍馬』は開演前より非常なる好評で同座の前賣券にプレミヤムがついたと言ふ程の大成功であつた。作も良く澤正も又研究を積んだ舞臺を見せた。惜むらくは第二の『此村大吉』が龍馬で清新の味を出したのに反比例に餘りに大味な愚劇であつた事である。

□此月 の下旬 新潮座一派が辨天座に戻つて粟嶋袂衣氏作の『出世太閤記』を十五場通しで上演した。此芝居は藤吉郎其他の人間味を抜かつたつもりであらうが何處をさらへ所もないつまらない芝居で、見物の來なかつた事もあながち不思議ではない。

□十一月 は御大禮記念劇が盛んに行はれた月で新聲劇も瀬川春郎氏の『高山彦九郎』を記念劇とし鳥江鏡也氏の『伊丹屋金次』を二番目として空前の大入りをした。蓋し鳥江氏の傑作中の傑作で此大當りの反映は二の替りの興行に迄及ぼし全大阪の人氣を同劇に集めたと言ひ度程の大入りであつた二の替りは吉川英治氏の『坂東俠客陣』を徳田純宏氏が脚色したものである。

新潮座の二の替りは瀬川春郎氏の『結婚金字塔』と粟嶋袂衣氏の『後藤象二郎』で三の替りは加藤武雄氏の『華臺』を瀬

川春郎氏が脚色し、二番目は福井野紅氏の『林藏國越』かくして劍劇の一年は終つた。

顧る此一年、澤正は宮本武藏と言ふ意氣で三度大阪に現はれ、新聲劇は大名の如く嚴然と構へた。其の間に新潮座は功名に焦る若武者の如くに血み泥になつて鬨つた。全く血み泥である。澤正が坂本龍馬で全大阪の人氣を煽り、新聲劇が伊丹屋金次で壓倒的好評を博した間に新潮座の與えた處のものは取り立てて言ふ程のものが無い。實際の感銘と言へば春郎氏の環境でもあらうか。只新潮座の異彩は大膽にも新らしき構成法の下に現代劇の復興に努力精進した事である。

新聲劇は大衆讀物の脚色で鬨ひ、澤正は文壇諸氏の小品に大衆もの、二つを並べて進んだ、要するに此年は新聞小説に大衆讀物の脚色が其の大部分を占めたのである。然し此の脚色には言ひ合したやうに見えぬ無理と破綻とが伴なつて居た事を見逃してはならない。そして事實觀客の感銘に値したものは脚本として書かれたものである。眞山氏の坂本龍馬、鳥江氏の伊丹屋金次、瀬川氏の環境、大森氏の露見來輔等。茲に於て大衆讀物と芝居とが共に異なつた立場にある事が明瞭と判る。然し大衆は既に劍劇の立廻りには満足せず、其の内容を求め心持は取て大衆作家の作品が上演される事を歓迎した傾きがある。劍劇の行詰りがこんな風に打開されるか之れが本年に残された問題である。



編輯
後記

松本泰三

一陽來復の春を迎えて、愛讀者諸賢はもとより、あまねき好劇家のみなさまの御健康と御幸福を祈ります。

本誌もこゝにつゝがなく昭和四年度の第一聲を擧げることが出来まして、御覽の通り内容はいさゝか面目一新の感があるかに自信して居ります。

劇界の多事と共に益々本誌の使命は重く、編輯經營と尠からぬ苦心をしてゐます。まづ本誌はその月の道頓堀を語るに相應しい代表的狂言の舞臺寫眞を最も多く掲載する事にしました。ために初日の開くの待つて最も完全なる舞臺なり粉装を撮影して、尙且つ鮮明を期したく努力してゐます。これは舊臘の顔見世號以來既に皆様のお認め下さつたと存じます。

その結果は實に顯著で、顔見世號の如きは大阪、

正 賀

道頓堀編輯部(イロハ順)

鳥江 鉞也
大塚 克三
山上 貞一
松本 泰三
西田 宏
加藤 健三

京都の市中の書店はもとより南座の中賣で忍ち賣切れの盛況で、遺憾乍ら地方よりの御申込の方々にはその由を申上げて誌代を返金致さねばならぬ仕未でそのため、月極讀者の申込みは急に激増し、たゞさへ初春興行の準備で猫の手も人の手の事務所内に一段と多忙を極めた譯で、今更に讀者諸賢の熱誠なる御援助を感謝してゐます。

その爲に本號は初春興行に最も忠實にして最も優秀なる効果を幸多き新春の皆様の座右に呈上したく敢て餘儀なき遅刊を斷行した次第であります。どうか編輯者の苦心もお認め願ひたく思ひます。

中に御無理を願ひました各先生の玉稿ばかりでございます。先生方へ特に感謝致しますと共に、讀者諸賢の御味讀を希望します。

前號誌上で發表しておきました『道頓堀ドラマリーグ』も愈々組織することに致しました。この會は本誌の年極讀者は勿論一般讀者の御援助をまつて初めて完成することが出来るものでありますからどうか御知己をお誘の上御入會御聲援をお願いします。

昭和四年一月一日發行

月刊『道頓堀』第四年
第廿八輯

□ 誌代は前金でお拂ひを願います。

□ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

□ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵費五厘)

昭和三年十二月廿八日印刷
昭和四年一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社

編輯者 鳥江 鉞也
大阪市東區船越町三丁目〇

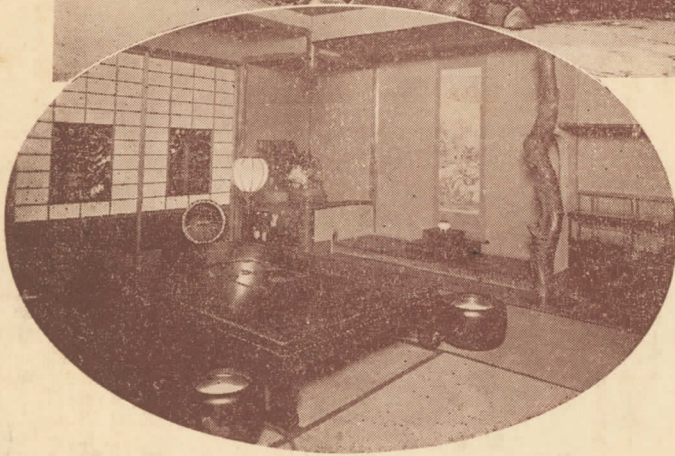
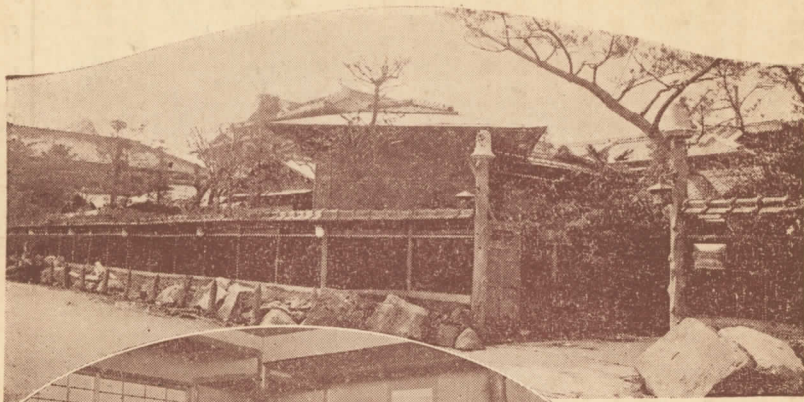
印刷所 中央堂印刷所
大阪市東區船越町三丁目〇

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社内

道頓堀編輯部

電話 六六八五番



少年宴會
は

名代割烹
電氣旅館

電話 卅五
番 四七

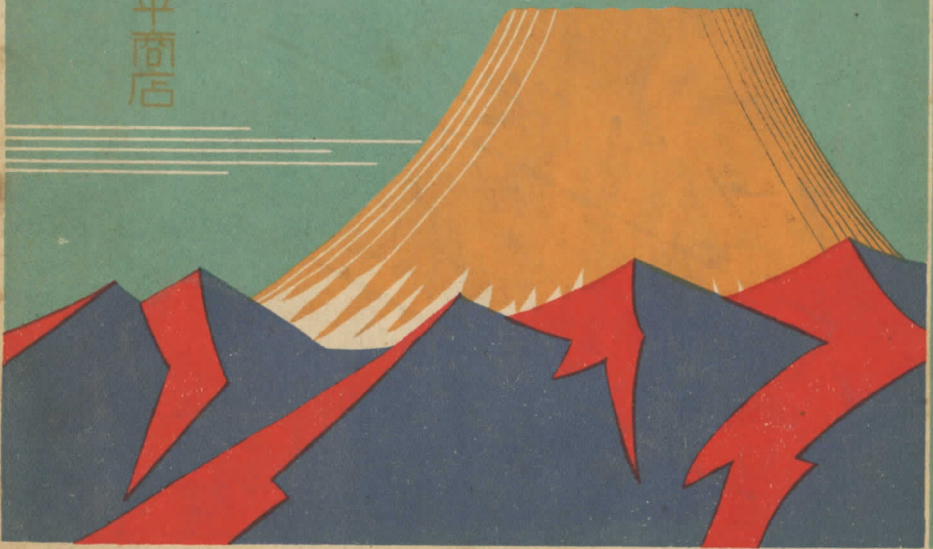
舞臺付百疊敷
大宴會場落成

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年十二月廿八日印刷
昭和四年一月一日發行

若く明るの顔になる

リート白粉

東京大阪平尾替平商店



金參拾錢 (郵一錢五厘稅)